

ジョン・タイプ

JOHN RIFFE OF THE STEELWORKERS

一労働者の歩み

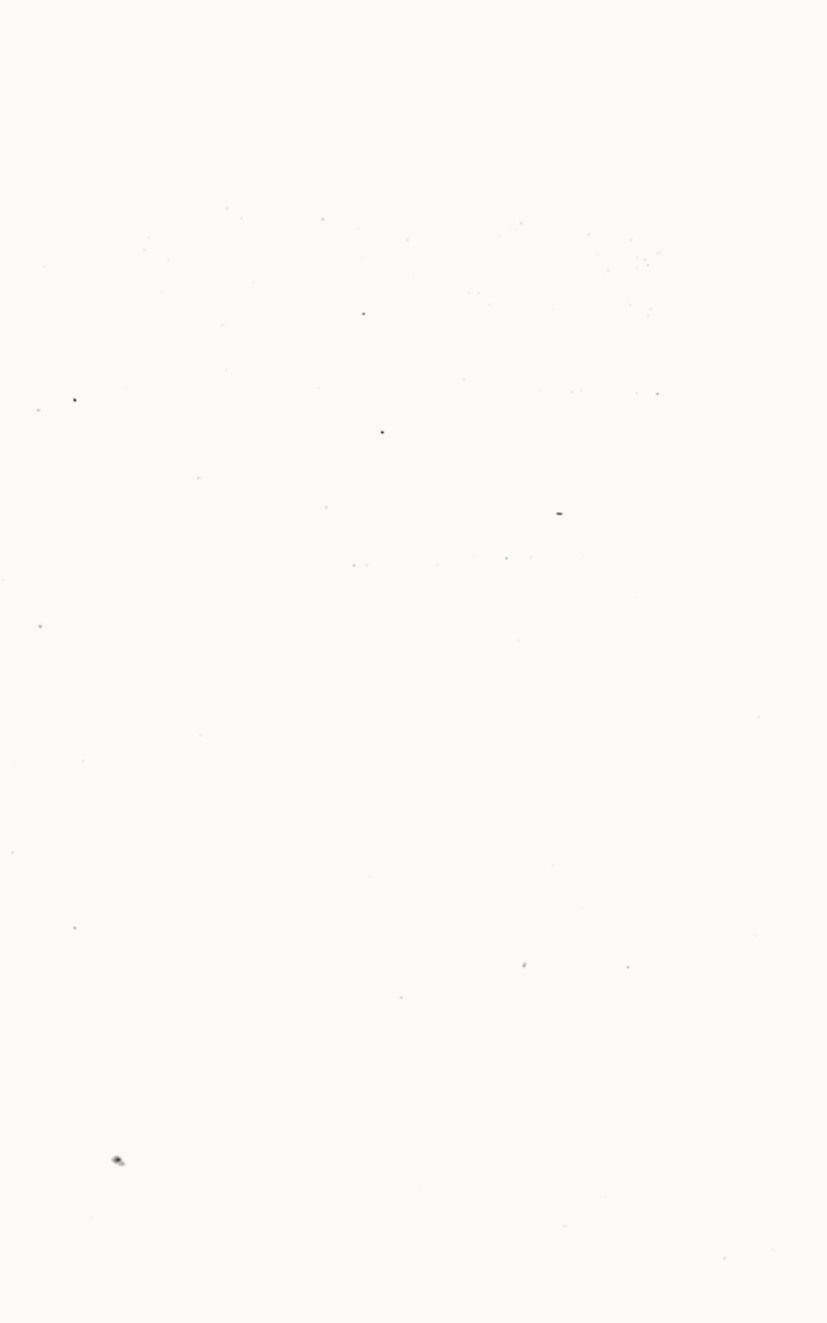


ウィリアム・グローガン 著

ジョン・タイプ

JOHN RIFFE OF THE STEELWORKERS

ウィリアム・グローガン



これは私たち家族の物語である。あるときはいっしょに住むことさえ出来ないほど分裂していた家族が、私の夫ジョン・ライフの偉大な生活を通して見出した解答の物語である。

この本に記されている事柄の多くは、ジョンが私たち家族に語ってくれたそのままの形でのせられてゐる。

生前彼を知っていた人たちはばかりでなく、知らなかった多くの人たちのために、その生涯を労働運動のために捧げたジョン・ライフ、父として家族から愛されていたジョン・ライフの一生を集録し、出版の労をとって下さった友人のビル・グローガンに私たち一同は心から感謝している。

一九五九年バージニア州、アーリントンにて

ローズ・ライフ

目次

第一章	ケンタッキーでの少年時代	一
第二章	炭鉱労働者	七
第三章	鉄鋼界の闘い	一九
第四章	解答はあるだろうか	二五
第五章	敵を友にする秘訣	三六
第六章	フィリップ・マレーの呼び声に応じて	四五
第七章	南部諸州に対する攻勢	六六
第八章	行きづまりに押し流されて	七七

第九章	一九五二年の鉄鋼大ストライキ	六七
第十章	一人の男を勝ちとるために	一〇二
第十一章	新しい次元	一四四
第十二章	イデオロギーと共に働く人たちに	一四〇
第十三章	経営者側にも	一六〇
第十四章	コミュニスト並びに反コミュニストにも答はある	一七八
第十五章	世界労働戦線の指導権争い	一九〇
第十六章	安定の秘訣	二二三
第十七章	ジョン・ライフとフランク・ブックマン	二三三
第十八章	ヨーロッパへの訪問	二四二

第十九章 最後の闘い……………二九〇

第二十章 最高の経験……………二七一

第二十一章 世界の讃辞……………二七八

第二十二章 後につづく者は誰か……………二九二

付 録……………二九五

第一章 ケンタッキーでの少年時代

「自分はケンタッキー州の炭鉱地区で生れたのさ。そう、白人として生れたのさ。だけどこれは偶然の出来ごとで、自分で選んでそうなったわけでも何でもありませんよ。自分が、黒人に生れたとしても、日本人なり、中国人なり、或はその他の人間に生れたにしても、また、アメリカの他の地方に生れたにしても、自分には文句の言いようがないわけですよ。事実、ケンタッキー以外のところに生れりゃよかったと思つたこともありましたよ。だけどこればかりはどうにもならないですからね」これは一九五三年、ジョン・ライフがC I O専任副会長に就任した直後に書いた言葉である。

彼はさらに思い出を語る。「私の父と母は、その地方の開拓者ともいうような立場にあつた人たちで、私たちが子供を育てあげるのにずい分苦勞をしたものですよ。子供たちにとってはとてもやさしい、愛情の深い両親でした。私たちが子供は物質的には恵まれていなかったけど、結構楽し

い少年時代を過しましたね」

両親のガブリエルとサラ・アン・ライフは地の塩といったような人たちであった。ガブリエルは小さい農場を持っていた。南北戦争のおこった頃十六才だった彼は南軍に従軍した。彼はまた大工もした。その関係でAFL所属の大工組合の有力な会員でもあった。やがて炭鉱会社がこの地方に入ってきて、農場も買収されてしまつてから、ガブリエルは上の男の子たちといっしょに炭鉱で働くようになった。しかし、何といつても百姓が彼にあってゐた。後年になって、炭鉱を後にして都会に住むはめになったが、わずか六カ月でしばむように死んでしまつた。

サラ・アン・ライフはチェロキー・インデアンの混血児で、足もとまである長い服を着てまっすぐに立つた彼女は背が高く、優雅で、立派だった。月曜から土曜まで彼女は糊つけした白い前かけをかけていた。そして日曜日には特別のエプロンをするのが習慣だった。一方スコットランドのブカナン家の血統を誇っていた彼女は質素であると同時に応揚で、いつも多くの友人たちをもてなしていた。家の裏庭には染めものをするかめがおいてあつて、自分の着るものは勿論、家族全体の衣服を上手にそめるのであつた。自分が教会を欠かさなければかりか、家族全体も行くように仕向けるような人だった。

「私たち子供はおふくろのためなら何でもするほど好きだった」とジョン・ライフは言った。

シャード、ローガン、フレッド、そしてあだなを「ヴァーニー」といったジョンの四人の息子たちはガッチリした体格と性質をそなえ、どんな逆境にも負けない気構えをもっていた。彼らはガブリエルとサラ・アン・ライフが共通にもっていた素朴なそして実際的な道義力と人に対する思いやりとをうけついでいた。姉のベシーは若い頃から母親の片腕になることを覚えた。

ジョンの兄のシャードはその頃のことをこういうふう語る。「私たちの両親は本当に昔気質だった。日曜ともなれば必ず六マイルも七マイルも歩いて教会に行ったものだ。家には豚や、羊や鶏を飼い、とうもろこしを作っていた。大きい料理用のストープは薪をもやすやつだった。母さんは料理が上手だった。少なくとも私たち子供はそう思いこんでいた」

「餌箱を木のさじでたく音をきいて豚が集ってきたよ。ところがこの習慣じゃずい分面白いことが起ったものだ。木つつきが木の幹をついても同じような音がしたものだから、豚のやつらは餌かと思つて森中を気ちがいのように走りまわったりしたよ。考えて見ればあの頃の私たちは満足していたよ。その後ちようどあの豚どものようにただ夢中で走りまわっている人を沢山見かけることもあったが、あてもなく忙しがっているところなどそっくりだね」

一番末の子、ジョン・ヴァーノン・ライフは一九〇四年三月十五日にケンタッキー州のジェンキンスに生れた。兄さんたちと同様、彼の子供時代は生きていくという現実のために短かく、苦

しいものだった。

八才ともなれば、働けるによい年だというわけで、三年生のヴァーニーは学校を休学して農場で働くことになった。次の六年間は学校と農場とで交互に過した。

ケンタッキーの山の中では学校に行くのも冒険にみちたものだった。というのは途中、橋のない川を歩いてわたったりしなければならなかったからだ。時には、満水した川をわたるため、洋服をぬいで頭にのせ、胸まで水につかって、どうにかビショぬれにならずに学校にたどりつくこともあった。

夏にはひでりがつづき、川は道になってしまふ。若いジョン・ライフが新しく手に入れた古い自動車を得意気にジエンキンスまで運転してくるときも、山間のこの地方では川底が一番よい道だった。ある日曜のこと、ジョンは川底の道を通って自動車で母親を教会につれていこうとして出かけたことがあった。さほど遠くに行かないうちにエンストしてしまった。サラ・アンは体の大きいヴァーニーが自動車の前のフードをあけてあちこちいじっているのをしばらく見ていたが、礼拝の時間は遠慮なく近づいてきた。彼女は新しい機械には大した信頼をおいてはいなかった。腰をあげると自動車から降りた。気がついたジョンが顔をあげてふり向くと、「教会で待っていますよ」と言い残して、母はもう川底をさっさと歩いて行くところだった。

今世紀の初めのころのケンタッキー州の東の炭鉱地帯の生活は剛気な人をつくり出していた。鉱夫の住む家といえ、およそ倒れかかったような丸木小屋で、屋根もかべも床もすき間だらけで冬は雪、雨、風を、夏は暑さを防ぎようもなかった。食事は変化に乏しく、とうもろこしを粉にひいたものをやいたり、煮たりしたものや豚を食べるのであるが、たまに献立を変えてみてもゆでとうもろこしとハムになる位なものであった。その地方の子供はよく栄養不良と遺伝的欠陥から発育不良の小さい体になることがあった。

十四才のジョン・ライフがコンソリデーテッド石炭会社第四鉱にやとわれたとき、兄さんたちはすでに一人前の鉱夫として働いていた。しばらくの間ジョンは暗い坑内をらばに引かせた車が入りするたびに戸をあけたり、しめたりする番人をした。

ついで、らば車の御者に昇進した。その時会社の人の言ったことばは少年の心に深くやきついてしまった。「馬やらばを大事にしろよ。人間の方が簡単に手に入るんだからな」坑内はらばにとっても、——人間にとっても——危険が多かった。保全設備など殆んどなく、事故はたびたび起った。坑内に生き埋めになった人たちの家族が、心配にはりさけそうな心をおさえて、夜通し坑道口に立っている痛いたしい姿がよく見られた。

後になってジョン・ライフは当時のことを偲んで次のように書いている。

「炭鉱はとても危険だった。ある日のこと、私は友人と弁当を食べようとして腰を下した。坑内から石炭を運び出すらば、車の通る坑道の両側に分れて食べていたのだが、突然頭の上から大きい岩石が友だちの座っている上におちてきたことがあった。友だちは即死した。当時、ヘルメットなどもかぶってはいなかった。坑道を支えているのも石炭の柱だった。一日の終りに車につきこむ石炭の量がちょっと足りない、つい手近かの石炭柱をけづって間に合せているのを見たものだが、けづりすぎた柱がくづれて、おくにいる男たちが、殺されたり、生き埋めになったりするのであった」

「労働組合を組織する前の炭鉱は一日十六時間労働が普通だった。十才位の男の子が十時間もぶつづけに働いたものだ。そして一日十六時間の賃金は一ドル七十五セントであった」

その炭鉱の真只中で、組合組織運動家としてのジョン・ライフの情熱の火はともされたのである。彼の一生は、激しい闘争、逮捕、殴打、迫害に色どられるのであったが、仲間の労働者たちのためにやがては全人類の福祉のために献身した輝かしい勝利の記録でもあった。

炭鉱に入った最初の週に、わづか十四才ではあるが、れっきとした組合員としてジョンはそこの労組に加入した。

第二章 炭 鋏 労働者

坑内馬車を扱う仕事は並大抵のものではなかった。当時を回想してジョンは言った。「強情で有名ならば、ばを扱いながら、テコでも動かないらば、でさえ、気を変えることがあるということ^{を学んだよ}」

この仕事にも危険がともなうことが多かった。新しい炭鋏やまを開くときなど、ジョンは爆破用のダイナマイトをつんだ車をらば、にひかせて山越えをしなければならなかった。しばらくしているうちに彼の手綱さばきがみとめられて、今度はらば、車のひき方のコツを他の鋏夫たちに教える役を与えられた。

その間、彼は組合活動も活発にやり、十六才のときには、彼の属している支部組合の書記をつとめるようになった。

彼がはじめて獄舎の味をおぼえたのはすでにこの頃であった。場所はバージニア州の、とある

炭鉱町である。炭鉱労働組合結成のうわさが流れて、反対派は殺気だっていた。二人以上の集会を禁ずるといふ命令が裁判所からでていた。そんなことを知らないジョンは道ばたで二人の同僚の組合員と出あって立話をしていた。話の内容は組合結成のことも何でもなかったが、とも角オルグと知られている三人が集会しているのを、これまた偶然通りすがった警察署長に見とがめられて、有無を言わず、逮捕されてしまった。その夜、ジョンと二人の友人は留置場で一夜をあかすはめになったが、明くる日、簡単な裁判にかけられ、判決が言いわたされた。——六カ月間強制労働、しかも逃亡を防ぐために鎖につながれたままという屈辱的な条件で。十六才のジョンの心には社会不正に対するはげしい憤りがもえ上った。この憎しみにも似た憤りの炎は、長年ジョンの心にもえつづけたのである。

彼の組合活動がはげしくなるにつれ、彼は各州で何回となく逮捕、投獄のうき目にあつた。その最高の記録は、後年シカゴで二十四時間の間に六回も監獄を出たり入ったりしたときである。それからの十年間というものは、彼にとってはげしい闘争の連続であつた。その間に彼は結婚をし、妻のエルシーは苦難や危険を夫とともにした。また炭鉱労働者として貧乏はつきものだつた。組合オルグとして西バージニア地方のジュンキンス、ホイールライト、デービー、ウェルチ、トウィン・ブランチなど行く先々の町で彼は迫害にあつた。

一九三一年に彼はトウィン・ブランチに住むようになった。一年後に長男のエステイズが生れたが、彼の妻はろくな手当ても受けることができずほとんど死ぬところだった。医者によぶために、ジョンは岩のゴツゴツした、まがりくねった山道をこえて二十マイルもさきのキングストンまで車を走らせなければならなかった。

そのころの苦しかったことを思出してジョンはいう。「私たちの行く先々、どこへ行っても貧乏に追い回された。家の中はガランドウで、箱をもってきて椅子や机にしたものだ。床板のつなぎ目は穴だらけで、私たちの手にする金といえば、会社の経営する店で日用品を買うために会社が発行する『購売券』だけなのだ。私が必要な靴を買うために、エルシーは何カ月も靴をはずにスリッパでがまんするという有様だった。

エルシーの兄弟たちも炭鉱で働いていたが、そのうちの二人は事故でひどい怪我をしていた。一人は腕をなくし、一人は脚を切断するというような始末だった。三人目は珪肺でやられていた。もう一人は彼の妻が、会社の息のかかっていないある候補者に投票すると公言したかどで首になった。

鉱夫が負傷しても、近くに病院もなければろくな医者もいなかった。死ぬだけさ。私は石炭をほるばかりでなく、オルグの仕事をしていたことが知られていたのです。分苦勞したよ。いつだ

って一番わるい仕事場に回されたものさ。坑内がひどくせまく、ねながらでなければ掘れないよ
うなところとか、それも水びたしのこともよくあった。場所によっては石炭柱のかわりに一番安
い悪質の木の柱で天井が支えられていることもあって、そんなのが折れて鉱夫たちが生埋めにな
ることもしばしばだったよ」

ジョンは炭鉱労働者が力を合せてこうした悪条件を是正する以外に道はないと、全身全霊をか
たむけて組織化のために働いた。この仕事は双方に暴力がつきものの険しい闘いであった。

ジョンは語る。「バージニアのある町でのことだったが、私たちは組合を結成しようとのり込
んでいった。冬のことだったが、その町の鉱夫たちは経営側の報復をおそれて、私たちを泊め
てくれるものがなかった。仕方がないから私たちは雪が降ってるといふのにテントをはって、夜
をすごさなければならなかった。その町に私の親類で鉱夫をしていた男がいたので、私はそこへ
頼みに行ったのさ。ところが彼は自分のところにそんな危険人物がいることが知れたらどうなる
かということをおそれて、ソッと家をぬけて会社につげ口をってしまったんだ。『私の家に今
ジョン・ライフが来ています。私がよんだんじゃないんです。勝手にやって来たんです。今
いるんです』とね。

会社の人を時をうつつさずやって来て、その晩のうちに町を出て行かないと承知しないぞってお

どすわけさ。とも角、私たちは町を出るには出たよ。しかし必ずもどってきて組合を結成することを心に誓いながらね。やがてその通りになった。

またある時、私が盲腸の手術をして、家でねていたことがあったが、二人の男が自動車でやってきた。エルシーが玄関に出て見ると、いきなり彼女を車の中に引きずりこもうとしたのだ。彼女の悲鳴をきいて、私はベットからとびおりるなり現場に駆けつけた。その有様を見るなり、私は垣根の板を引っぱがして、それで奴らの自動車をたたきこわそうとしたんだ。その間にエルシーも彼らの手をふりきることができたし、二人の男もあわてて逃げてしまったようなこともある。後でできて分ったことだが、私が病気をしている間にエルシーを誘拐して、組合運動のじまをしようという悪だくみだったのさ」

暴力ぎたでは、組合側ばかりに死傷者が出たわけではなかった。ときには正面衝突になることもあった。会社側がやとった用心棒の団を鉾夫たちが待ちうけて発砲して、何人かを殺すという事件もあった。生きのこった連中は川を泳いで逃げ、中にはからの雨水溜にかくれて助かったものもある。

ジョン・ライフも一再ならず手ひどくやっつけられた。西バージニアのウェルチという町では窓からつき落されたこともあった。またある時は重い椅子を頭の上から落されて、鼻をつぶされ

たこともあった。息子のエステイズは父についてこう語る。「それでも父は暴力に訴えることを好まなかった。父はいつでも組合の発展のために建設的なあり方を求めていた。たしかに社会悪に対する憎しみは持っていたが、その感情にまかせて、人をやっつけるというようなことはなかった。いつも彼は組合活動の正しい建設的な目的を念頭においていた。

それだから、ある土地の学童のフットボールチームが資金難で困っていたのを、彼が組織したその土地の組合が金を立替えて助けてやったときなど、彼は非常に喜んだのである。また地方の組合の役員が、立派な社会人として尊敬をうけるようになるのを見てはわがことのように喜んだ。

苦しい闘いの間にも楽しいことはあった。ある冬の日曜日、統一炭鉱夫労働組合の中執委のバン・ビトナーが小さい炭鉱町で演説することになっていた。ジョン・ライフはそりで彼を迎えに行き、町へ案内してきた。会社側の見張りでライフの顔を知らない男が、よびとめて用向きを尋ねた。ビトナー氏は牧師で説教するためにきたのだと答えて無事関門を通ってしまった。「その日は確かに説教をしたよ。ただし内容は『組合の組織化について』だったがね」

そのうちに西バージニアの炭鉱の空気が陰悪になって、ジョン・ライフは住んでいるわけにいかなくなった。「西バージニア州ではあちこちでこづきまわされた」と彼は書いている。一九三四

年に彼はテリトリーマンと称する統一炭鉱夫労働組合の専従員になった。この仕事はたえず各地を回って組合を指導することだったので、彼は家族の安全と自分自身の心の平静のために、炭鉱町でない西バージニアのプリンスストンに住むことにした。炭鉱町では彼はマークされた男となつてしまったので家族の危険を予測できない状態だった。

ところが統一炭鉱夫労働組合の組合専従者になつたために家族にとって思いがけない厄介なことがおこりはじめた。仕事の関係で彼は家を外に長期間活動するようになり、そのため妻はひどい不安におそわれるし、彼自身の生活も不安定なものになってきた。彼の仕事の重圧にたえかねて、一年もたたないうちについて離婚というはめになってしまった。

全米統一炭鉱夫労働組合の委員長ジョン・ルイスがはじめてジョン・ライフの名を知つたのは、ライフがフォード会社のストライキを指導したときからだつた。当時のいきさつをジョン・ライフの口からきこう。

「一九三二年に私は西バージニアの人里離れた山の中のトウィン・ブランチに住んでいたが、フォードが経営する炭鉱で働らきながら、組合の結成のために闘っていた。私の他に二人の同志が仕事の余暇のすべてを捧げて組合を結成しようといふ力を合せていた。一人はケンタッキー生れの子

エスター・ワトソンで体は小さいがダイナミックな男で、もう一人はダグラス・グレーという大柄な黒人だった。私たちは炭鉱委員とよばれていた。

西バージニア州では組合結成は非法とされていることだから、私たちは山の中で会合していた。第一回の会合には、七十人から七十五人が集ったが、みな猟銃を手に、三々五々目をはばかりながら、それぞれがう道を通って所定の場所にやってきた。——山中の秘密会だった。その日は一発の弾もうたれなかった。

労働者を組織することについて私は少しは経験をもっていたが、まだまだ学ぶことは多かった。しかし、入社規定で会社直営の店で何から何まで買わされていた私たちは、改革する目的ははっきりしていた。町で買えば六十セントの小麦粉も会社の店では一ドル二十セントもしたものだ。社宅があいていると、既婚者であろうと独身者であろうと必ず借りなければならなかった。生命保険も会社指定の代理店を通して、法外な値段で契約させられていた。

その日の会合の結果、どのようなことになるのか誰にも分らなかったが、ただひとつははっきりしていたことは、次の日仕事にいく前に組合加入の署名をとっておかなければならないことだった。その夜私たち七十人は、一人または二人の組になって一軒一軒家をたづねて朝までに四百五十人の署名をもらった。誰一人ことわる者はいなかった。まづ組合員のリストもできたし、必要

な金も集った。

西バージニアのチャールストンにある組合本部から規約をとりよせるのにお金を郵送するのは危険だというわけで、結局チェスターとダグと私の三人がうけとりに行くことになった。ほとんど道らしい道のない当時のことなので往復二日の旅だった。

私はかねてから人種差別の制度には反対で、その撤廃をさげんできたが、この旅行でその弊害をみせつけられた。私たちは日曜の朝早く出発して、山道を自動車でドライブし、頂上にあるレストランについた。入ろうとして気がつくど、入口に『黒人お断り』のサインが出ている。私たちは憤慨して立去った。そこからチャールストンまでの二百マイルの間、三人がいっしょに食事の出来るレストランも喫茶店も見当らずとうとうチャールストンの黒人街につくまで食事ができなかった。

チャールストンに本部のある統一炭鉱夫労組の第十七地区の委員長はバン・ピトナー氏で、私是一九二〇年代の初めのころ、アラバマ州でストライキをしていたときに彼に会ったことがある。ともかくそこでピトナー氏に会い、規約を手に入れ、トウィン・ブランチへ帰ってきた」

「私はこの地区の委員長に選ばれたが、これが一番困難な仕事だとは、なって見るまで分らなかった。私たち三人の委員はほとんど毎日、経営者側と会ったが、ヘルムという所長が直接交渉に

当って、私たちの組合を正式に認めることはできないが、非公式には交渉に応ずるといつてくれた。

ある日、十七人の鉱夫が、不良石炭を積出したという理由で首になった。石炭はすでに搬出されてしまっていたので調べようもなかった。私たちはすぐさまヘルムに会いに行ったが、交渉の余地はないという返事だ。しかも私たちに椅子をすすめようもしない。『これはあなた自身の決定か』とつめよると、『そうだ』とは答えるものの、その態度がちょっとおかしいので、『デトロイトの指令か』と突込んだ。

彼はニンマリ笑って、『まあ、それに近いところだ』といい、ついには『実はデトロイトからの直接命令なんだ。残念だが、君たちと話しあうことも出来ない』といった。彼は善良な、体も大きいが心の広い立派な所長だった。私たちは彼を恨む気にはなれなかった。

フォード会社は私たちの炭鉱のほかに、ケンタッキー州のボンドクリークに三つの炭鉱を持っていた。かねてから私たちは週末の時間をさいてそっちの炭鉱に向向いて組合を結成させていたので、次にヘルムに会う前にボンドクリークに連絡をとり、こっち同様の状態かどうかを確かめたところ、ないということが分った。彼らは相変らず所長と交渉しているということなので、私たちが感づいたように、私たちのところがテストケースにされていることが確かになった。

さてヘルムに会ってみると、驚いたことにビトナー氏に相談しに行く時間を許可してくれた。

私たちの状態を話すとビトナー氏はちょっと考えていたが『君たちがデトロイトでフォード氏に会えるように何とかしてみよう。フォード氏に直接高い保険料のことや、会社直営の店のこと、医療代のことなど君たちの生活の問題を話してみたらよかろう』とってくれた。

そこで私たちはトウィン・ブランチに戻り、二週間待った。ある朝ビトナー氏から手紙がきた。『残念ながらフォード氏はおろか、責任者には誰にも会えない。この上は君たち三人でともかくデトロイトに行つて、フォード氏に会えるまで事務所に坐りこんで見ることをすすめる』と書いてあった。

仲間の特別会議を開いて意見を徹したところ、投票の結果、チェスター、ダグ、私の三人がデトロイトに行くことになった。

デトロイトに行つて見ると、『フォード氏の関知するところではない』と書いて、秘書だの、石炭部長だの、二流どこの人を会わせようとした。私たちは『ヘンリー・フォード以外の人には誰も会わないし、彼に会うまでは帰らない』と書いてがんばり、二日間坐りこんでしまった。辛棒が報いられ、彼らはヘンリー・フォードその人に会った。

それは男対男の対決であった。フォードとライフはお互の信念と決意に対しては尊敬の念をも

ったものの、いづれも譲らなかつた。結局炭鉱はストに突入した。

「他の会社がいとるまでの二十年間炭鉱は閉鎖されたままだった。しかし、私たちの訪問の直後、フォードはボンドクリークの炭鉱を売ってしまったが、その契約の中に新しく買いとる会社は組合を認めなければならぬという一条があった」おそくではあったが自分も闘争の中に生きてきたヘンリー・フォードが、若いジョン・ライフの心の中にもえている闘志を認めたというわけである。

ライフの闘い、ことにデトロイトでのねばり強い闘い方は、ジョン・ルイスや副会長のフィリップ・マレーの注目するところとなった。その結果、彼は統一炭鉱夫組合の組織の仕事を与えられることとなったが、往々にして最も困難なところへ送りこまれたのである。以来一九四〇年までの間に、ライフはその果敢さと経験とで何回もジョン・ルイスを助けたのである。

一九三四年、バン・ビトナーは彼を統一炭鉱夫労働組合の補佐役に任命した。そのとき以来、ライフの生活に大きな影響を与えたアメリカ労働運動界の偉人、バン・ビトナーとの同志的交友がはじまった。ビトナーの方もまたこの若い青年の資質を高く評価した。一九三六年、ビトナーは鉄鋼労働者組合組織委員会(SWOC)に入ることになったとき、ジョン・ライフもその世界にとびこんで行くこととなった。

第三章 鉄鋼界の戦い

ジョン・ライフが炭鉱での闘争を続けていた一九三〇年代の初期は、全米の勤労大衆にとって最も苦しい時代であった。不況はそこをつき、工場はつぎつぎと閉鎖され、何千万の労働者とその家族はすべてを失い、住むに家なく大都会の郊外のほっ立て小屋に雑居する始末だった。男たちはあてもなく貨車にのりこみ、職を求めて町から町をさまよいつづけた。

炭鉱で見た労働者に対する不正な待遇がジョン・ライフの血をたぎらせたように、当時の惨めな状態が何千万の人の心に憎しみをうえつけた。しかし、一九三三年には「労働者は彼らを選挙する代表を通じて団体交渉する権利を有する」ことをはっきりうたった国家復興法が議会を通じたが、これは全米の労働大衆にとって新時代の到来であった。それ以来、力強い組織運動が全国に展開されたのである。

社会正義と経済的自由を求めて、その後十八年間、大衆の先頭に立って指揮をとる強力な指導

者たちはこの数年間にきたえあげられたのである。

この間にあってジョン・ライフの生涯はそのまま労働運動の発展の歴史であった。CIOとして知られるようになった大組織の初期から成長途中の苦難を経て完成されるまでの発展の闘いの中に彼の生涯はおり込まれていた。

CIOはAFLから分裂してできたものである。AFL傘下のジョン・ルイスの統率する八つの産業別労組の委員長たちはマスプロ産業の労働者を組織するには職能別の組織では不十分で、どうしても産業別でなければならぬと確信していた。その結果、保守的な職能別労組の指導者との衝突は避けられず、ついには一九三五年の年次大会で一線を画するに至った。

大会の三週間後の日曜新聞は簡単に、ジョン・ルイスを会長にいただく「産業別労働組合組織委員会」が結成されたことを報じた。その数日後の十一月二十三日にルイスは会長のウィリアム・グリーンあてに「本日現在をもって私はAFL副会長の職を辞任致します」との辞表を提出した。

一九三六年にAFLは内部にあって反対の立場をとるCIOの特権の一時停止を決定し、一九三八年にはついに組織から追放してしまった。その年の十一月にCIOは「産業別組織会議」として結成され、ピッツバーグで第一回目の大会を開いた。両者の分裂はここに決定し、二十年近

く経つまでその状態はつづいたのである。

この決裂と二十年後の最終的合組とはどちらもジョン・ライフの生涯にとってきつてもきれない関係がある。

こうした大きな事件の起きる一方では、ルイスの率いる統一炭鉱夫組合は鉄鋼産業に従事している仲間の問題をとりあげていた。それまで存在していた鉄鋼錫合同組合は一九三五年には名ばかりの弱体となり、何十万の鉄鋼労働者は声を大にして組織されることを要望していた。どうでも新しい組合は誕生せざるを得ない状態であった。

統一炭鉱夫組合にも問題はあった。というのは、鉄鋼会社の所有する炭鉱は「とらわれ」炭鉱といわれていて、そこに働く労働者たちは組織されていず、したがって擁護されていなかったのである。それまでの闘争を通してその実力を認められていた炭鉱労組は組織経験をもった指導者たちを派遣して未組織の仲間を助けることができた。

一九三六年の六月には鉄鋼労働者組織委員会がつくられ、炭鉱夫組合の副委員長長のフィリップ・マレーが議長になった。彼は炭鉱夫労組の同志であるバン・ピトナーとともにすでにこの人ありと知られているクリントン・ゴールドン、ウィリアム・ミッチ、P・T・ファーガン、アントニー・フェデロフ、ジョン・ライフ、若年のディビッド・マクドナルドなどという人材を集めた。デ

イビッド・マクドナルドは、後年労働界の巨人としてライフと並び称される人となった。

フィリップ・マレーは当時を回想している。「鉄鋼産業の労働者たちを組織しようとする工場に働いている連中はおそろしがつてどうにもならなかった。大分このおそれは取除かれてきているが、私たちは完全に彼らがおそれをなくするまで手を休めることはしないだろう」

三十年代の後半は全国的に労働者組織の傾向が高まってきたが、鉄鋼労組組織委員会は先駆者としての役割を果たしていた。彼らと並んで、全米自動車産業労組も、ストや坐りこみ戦術等を経て大会社に認められるに至ったし、全米ゴム、繊維労働者、かん詰労働者、衣服業組合、交通労働者などの多くの戦闘的な組合がこの頃に生れた。彼らは力強く、前進しつづけるのであった。かつてジョン・ライフが炭鉱夫労組で経験したことは、勇氣と自制心を極度に要求するこれらの闘いのよい準備であった。

鉄鋼労組のジョン・ライフは大きい男だった。身長六フィート二インチ、肩巾のひろい、体重の重い男で、仲間を勇氣づけ、敵を射すくめてしまう鉄のような青くすんだ眼の持主だった。

「鉄鋼労組きつての荒っぽい、頑強な男だ。一人で六人を相手にできる男さ」とはディビッド・マクドナルドの評である。

新しく生れた鉄鋼労働者組織委員会は好調子にすべり出した。一九三六年の末には十二万五千

人の組合員を数え、一九三七年三月に、ジョン・ルイスとフィリップ・マレーは米国最大の鉄鋼会社US鉄鋼会社を相手どって、最低賃金一日五ドルと、週四十時間の労働協定を結んだ。このため鉄鋼労組の組織運動は全国的に活発になった。

しかし、大会社とはこうして平和的に協定を結んだが、中小企業はそう簡単にいかず、ベツレヘム、リパブリック、ヤングスタウン鉄板鉄管、インランドなどの諸会社は組合と協定を結ぶことを拒絶した。その結果、七つの州で三万八千人の労働者がストを行った。

一番ひどかったのはリパブリック会社の闘いで場所はシカゴである。一九三七年五月三十日、「メモリアル・デーの虐殺」として知られている不祥事が起った。デモ行進のあとで警官隊と衝突して八人の労働者が殺され、八十人が負傷したのである。

ジョン・ライフは南シカゴの鉄鋼労働者組織委員の一人として、悲劇に終ったデモを計画した一人である。

この日の出来ごとは彼の心に不愉快な傷をのこし、長い間このことに触れることをさけるのであった。

何年かたってから、驚いたことに、彼は突然その日のことを家族に話した。

「あの日の責任は経営者の何人かにあることは分っていたが、今考えて見ると私の側にいた

二、三人の男は鉄鋼労働者組織委員会のことや、労働運動のことを真剣に考えていたのではなく、自分たちの目的のためにどう利用しようかと思っただけだ。彼らはその日の陰悪な空気をよみとって、彼らの終局目的である階級闘争を激化するために暴動さわぎをおこす方に回ったのだ。そしてそれに成功した。

労使の間の憎しみを深めようとするこういう連中はあらゆる組合の中にいる。組合の中だけじゃない。政府にも、実業界にも、国中どこにでもいたんだ。彼らが成功したのは他でもない、私のように自分のこと、自分の憎しみ、自分のしていることばかりに夢中になって、眼の前で彼らのでていることを見ぬくことができなかつたからだ。今までずい分そうした人たちを見つけ出して組合から追放したが、これからの私たちはそんなことがなくなるような生活をしなくてはならない。どうしても、そういう連中にもっと優れた思想を与えなくてはならない」

一九三七年に、ジョン・ライフは再婚した。妻のローズは不安のうちに夫の消息を待ったあのメモリアル・デーを忘れることができない。「電話がなかったとき、私は自分の部屋にいました。相手はジョンでした。『ローズかい』彼の声は静かでした。『今おれは工場の近くからかけているんだが、ひどいことが起つたのだよ。仲間が何人か殺された。おれは無事だ』ということを書きたいと思つてかけたんだ。心配しないでくれ。それだけだよ』と」

第四章 解答はあるだろうか

リバブリック鉄鋼会社の労働者を組織する闘いは挫折したが、「メモリアル・デーの虐殺」に対する反動で全国的に組織活動は強まった。

一九三七年の暮に中西部の鉄鋼労働者組織委員会の支部長をしていたバン・ビトナーはジョン・ライフを補佐役に任命した。ライフは未組織労働者を組織するため全国の鉄鋼産業の中心地へ行った。二年後に彼はカリフォルニア州にある第三十八地区の支部長に推薦された。

そこでの彼の成功は目覚しかった。先づ一年の間に組合員を二千二百人から二万二千人にふやすことができた。それから間もなく、サンフランシスコの彼の事務所には大胆で挑戦的なポスターがはられた。——「次はベツレヘム」

だが、家庭の方はそれほど幸福ではなかった。ジョンとローズの結婚生活は嵐の中をつき進んでいた。「組合未亡人」という立場に我慢ができません、苦情ばかりいうローズの小言にあきあきし

たジョンはますます家をあげた。妻のローズも再婚だったので、ジョンの息子のエステイズとローズの子のフッカーとバーバラは親とは別に東部に住んでいた。

さて、話かわって一九四〇年初頭のこと、鉄鋼労組組織委員長のフィリップ・マレーと書記兼財務部長のディビッド・マクドナルドの二人はフィラデルフィアのベルビュー・ストラトフォードホテルで、鉄鋼部品を製造するヘインズ・ゲージ会社のチャールズ・ヘインズ氏と昼食をした。ヘインズ家はアメリカの鉄鋼界では名の通った家柄である。彼はまたペンシルバニア州のベツレヘムやルーケンス製鋼所で職工として働いた経験も持っていた。三人は初対面ではなく、その前年サンフランシスコで知り合った仲であった。

組合指導者たちは自分たちが知っている経営者どこかちがっているヘインズに興味を感じていた。この男は確かに労働者の問題も、その必要もよく理解しているようだ。経営者であろうが労働者であろうが彼と会っていると心を打ちあけて話したくなるのだった。彼はMRA（道徳再武装運動）にあって、生きる動機がはっきり変った経営者だったのである。彼は利潤よりも人間を大事にすることを学んでいたのだが、そういう人は人から信頼されるのである。

話をしていく間に、最近サンフランシスコに行くのだが、誰か鉄鋼労働者に紹介してもらえないものだろうかとヘインズがいうと、ディビッド・マクドナルドは一瞬考えて、「西海岸の支部

長のジョン・ライフにお会いなさい」といった。

この一言がジョン・ライフの一生を大きく左右することとなったのである。

一週間後にサンフランシスコにつくなり、ヘインズはライフの事務所に通話して昼食の約束を作った。ジョン・ライフは同僚のジム・ティムズをつれてきた。ヘインズの方にも二人の友人が同席した。二人ともイギリスの労働界の出身で、一人はロンドンの東地区のビル・エーガーで、もう一人はスコットランドのクライドサイドの造船工をしていたずんぐりしたダンカン・コ克蘭である。

食事をしながらライフは炭鉱や鉄鋼での自分の経験を逐一話し、どうしても労働者を組織して団結させなければならないという確信の一端を披歴した。二人のイギリス人はよく理解する様子だった。というのは、ライフの語る状態はちょうどカール・マルクスが共産党宣言や資本論を書く材料ともなった十九世紀のイギリスの産業界のあり様に似ているからだ。コ克蘭は自分のことを話し出した。「私のような普通の労働者の歴史は、貧困と失業と戦争と死の四語につきている。何とかしてこの状態を変えなければならない」

「そうだ。何とかしてこの状態を変えなければならない」ジョン・ライフは心にうなづいた。それこそ西バージニアの炭鉱の、悪夢のような時から終始彼が求めていたものなのだ。コ克蘭の

言つた四つの冷酷な現実、貧困、失業、戦争、死に終止符を打ち、すべての人に平和と繁栄と融和を約束する世界を建設することができるだろうか。それこそ労働者を組織する最高の目的ではなからうか。

どうやったらこれを成就できるだろうか。

イギリスの「暗い地獄の工場」といわれている綿織物の工場地帯に育つたエーガーは確かにマルキシズムをよく理解している、とジョン・ライフは思った。彼はごみごみした町のむさくるしい家にぎゅうづめになって生きている労働者の生活を知っていた。今から百年前のこうした状態が大衆を救うものは階級闘争以外にないと人びとに信じこませたのである。

しかし、マルキシズムが誕生してから百年後の今日、労働者は組織はされたが、反比例的に分裂しているよりも現実をどうするかとエーガーは言うのだ。多くの国で労働者は多くのものを獲得しているが、その反面、指導者たちのやきもち、恨み、野心、意見のちがいなどが原因で分裂しているではないか。その結果、たしかに西欧諸国では社会悪がずい分是正されたものも世界的に見ればまだまだ解決にはほど遠いものがある。

「たしかに十九世紀の産業時代にはマルキシズムが労働大衆に希望を与えてくれた。しかし二十世紀の今日、マルキシズムでは労働界ばかりでなく、世界全体を融和させることはできない。

アフリカやアジアに目をむけて見よう。イギリスが植民地として長い間搾取してきたいわゆる後進国民は、民族としての権利と使命に目ざめはじめている。これは歴史の現実だ。彼らはおそらく早かれ自由を獲得するだろうが、どんな方法で、どんな自由を得るかが問題だ。国家主義といい、自由といい、それが世界の融和を助けるか、反対に分裂させ、結局は破壊してしまうか、どっちかだ。

戦争ということを考えて見ても分るが、昔は局部的な戦争もあり得た。軍隊だけの戦争もあった。今日では戦争はいやでも民族的であり、世界的で、しかもイデオロギー的である。ファシズムや、ナチズムや、コミニズムの旗印の下で何百万の大衆が動員される時代の戦争を想像しても分ることだが、とうてい一カ所にとどめることはできない。」

ジョン・ライフは今までこんな風に大きく考えたことはなかった。頭は新しい考えでわれそうな気がした。今まで鉄鋼労働者をどうやって組織しようかとそればかり考えてきた彼である。それも大切なことにはちがいがなかったが、なされなければならぬ大きな事に比べるとほんの一部分にすぎない。今までこんな風なもの考え方をしたことはない。そんな時間もなかった。だが、今きいたことから一つだけはっきりした結論がでてきた。——二十世紀の今日、階級闘争の思想はそれがどんな形をとるにしても、大衆の必要を満すには不十分だということだ。それど

ころか、階級闘争の思想をおし進めていけば、資本家と労働者の別なく、十九世紀の人が夢想だにしなかった破壊と混乱のまっ只中におとし入れることもあり得るのだ。

もち論、ジョン・ライフの心の中にはガブリエルやサラ・アンからゆづりうけた素朴な神への信仰が消えずにいたせいもあるが、彼はコミニズムをうけ入れることはできなかった。彼はよく友人に言ったものだ。「私の両親は実にいい人たちだった。私がコミニストにならなかつたのもそのおかげだ。共産主義が解答だとはどうしても思えなかつたのだ」

シカゴでの例の虐殺事件のおきる前から、ジョンは組合内部でのコミニストの活躍には気づいていた。そうした人たちは有能なオルグである場合が多いので、つい活用してしまうのである。彼らのあらゆるチャンスを使って仲間をふやそうとするそのやり方は気に入らなかつたが、どうしてよいか分らないので、そのままにしていた。またあるときは、オルグの仕事を終えたら手際よく組合を出てもらえばよいと考えたこともあつた。

組織の実績によって重要な地位についていた人の中にも秘密黨員がいたことがあとになって分つたこともある。

自分の利益とか、よりよい賃金や労働条件のためばかりでなく、世界の共産主義化のため献身的に闘っているこの人たちを簡単に追い出そうとしても出来ないことを知ってジョンは驚いたこ

とがある。彼らは生命をかけて使命を全うするために、指令の下に働いているのだった。行動はそのときどきの命令によって違っても、彼らの決意と献身は不動であった。

さきにいったようにジョン自身はコミニズムをうけ入れはしなかったし、しばしばコミニストと対決するようなことはあったが、彼の心の中の憎しみは少年時代からシカゴの事件に至るまでの思い出のひとつひとつでかき立てられるのであった。後に彼は言っている。「私の心は、経営者に対する深い憎しみと憤りで一ぱいだった」

この頃まで、ジョン・ライフはコミニズムに対して、コミニストに対しても解答が必要だなどとは考えたことがなかった。多くのアメリカ人と同様、共産主義というものは不愉快な現実でそれに対して答があるなどとは思ってもよらなかったのである。それだから他の何百万のアメリカ人同様、自分の出来る範囲のことをやってきたにすぎなかった。その中にはよいことも、わるいこともあったのである。

しかし、こうして話し合ってみると今まで漠然と頭のどこかで考えていたことがだんだんはっきり形をととのえてくるのが分った。

エーガーの話にきき入りながら、ジョンは今までに考えたこともない大ききさで労働者の使命というものを考えだした。

エーガーはつづける。「マルクスは『万国の労働者よ団結せよ』といったが、なるほど十九世紀にはそれでよかったかも知れないが、二十世紀の今日となつてはその考え方はせますぎやしないか。今日の大衆はより大きい思想を求めている。もっと大きい使命がある筈だ。『万国の労働者よ、団結せよ』ではなく、『労働者よ、世界を団結せよ』でなければならぬ」

それは確かに偉大な考え方だ。だが、どうやって実現できるだろう。

ところで、話は急に方向を変えてしまったようだ。分裂は今の時代の特徴ともいえる問題だが、その根本原因を探ってみると、決して経済的理由ばかりではなく、人の心の中にすくつてゐる貪欲とか、おそれとか、憎しみにあるということ、その上ただ経済的、政治的或は法律や条約だけで解決できるものでないことにジョン・ライフは気がつきだした。新しい階級或は新しい制度をつくり出したところで、その中に生きてゐる人間が新しい動機をもたない限り、同じ失敗、同じ問題をくり返すにちがいない。利己的な人間が集つて、どうして非利己的な社会をつくることができよう。

これに対する答はすでに発見されていることを彼は知った。——しかも広範囲にわたつて。

階級闘争より偉大な考え方がすでに大衆の心を魅了しているということだった。人間の心が革命的に変わったために、人と人との間、或は国家間、民族間によこたわる憎しみと分裂がいやされ

た事実をこの人たちは話してきかせてくれた。この考え方はどこの誰にでも通用するように思われた。経営者にも、労働者にも、政治家にも、普通の人にも、夫にも妻にも通用する考えであった。これは階級闘争の考え方よりも進んだ考え方——すなわちM R Aの考え方であった。

確かに新しい考え方だ。ジョンは次から次へと質問をあげかけたが、その都度はつきりした解答が与えられた。別れるときにジョンはまた会おうと固い約束をしたのである。

次の数週間、ジョンはたびたびエーガーとコ克蘭の二人にあった。

この時ローズも、エーガーの母で心のとてつもなく大きいアニー・エーガーを知るようになった。

ある春の日の午後、アニーは街角で花を買って、ジョンとローズの泊っているホテルをたづねた。

アニーだと知ってローズは大喜びで迎え入れたが、思いがけない花をもらって、彼女の心はどんなにか慰められたのである。その午後アニーは心を開いて彼女の過去をつつまず語った。新しい生き甲斐と方向を見出したことや、分裂していた家庭が和解したという生きた話などもしてきかせた。

アニー・エーガーは自分の心の中にすくっていたおそれや憎しみが消えてしまった経験をして

いた。イギリスの工業地帯に生れ、苦難にみちた生涯をおくってきた彼女は、人間の心にすくう憎しみや分裂に答を与える大きい考え方を得たのである。

労働運動の先覚者たちが、労働者の家を一軒一軒たずねては自分たちの思想をといて廻った頃の事をアニーは知っていたので、自分が見出したこの素晴らしい秘訣を一人でも多くの人に伝えようと彼女は一軒一軒歩いていたのである。事実、彼女はこうして労働者、経営者の別なく何百という家庭を和解させていた。

アニー・エーガーは誰に対しても、またどんなことをした人に対しても裁くような気持はもたなかった。自分自身の性質をはっきり見ていた彼女は人間性を知りぬいていたのである。また彼女は決して人を指さしたりはせず、どんなことを話されても決していばったり、さげすんだり、とがめたりはしなかった。彼女は、はっきり問題を指摘して、その原因をつきとめる術を心得ていた。

ローズはアニーの話にきき入った。彼女の話す一語一語が自分の心にくいこんでいくようだった。ローズの心の中には、はっきり見るのが何かこわいみたいな、暗いかげで蔽われた場所が沢山あった。その中でも一番気がかりなのはこの二度目の結婚もうまく行っていないということだった。ローズの心の中はうたがいで一ぱいだった。ジョンはとても忙しく、家を留守にしてばか

りいた。会議、会議というけれど、本当に会議のためなのだろうか。どうやったら信頼することができるだろう。それより、どうしたら自分の感情を自制することができるだろう。どうにもならなくなるのがたびたびあった。言わなくてもいい、いやがらせをつい言ってしまふのをどうしたらいいのだろうか。ところで今、ローズの前に坐っている一面識しかないこの人は、自分と同じような経験をもった妻たちが夫との間に愛情と融和を見出した話をしてくれている。しかも新しい生き甲斐を見出したというのだ。

それから数日後にジョンとローズはカリフォルニア州のブルックデールで開かれたMRAの円卓会議に出席するよう招待された。オルグ仲間のジャック・フラナリーとポップ・シッピーの夫婦のところにも招待状がきた。ローズはもっと知りたいと思っていたところだったのでシッピー夫人のオルガに相談して見たら、彼女のところにもアニー・エーガーがたづねていた。二人は行くことにした。

第五章 敵を友にする秘訣

ブルックデールはサンタ・クルズの山中の町で、サンフランシスコから楽にドライブできる道のりであった。一九四〇年のある春の日の午後、ブルックデール・ロジの玄関に一台の車が横づけになり、中から鉄鋼オルグのフラネリー、シッピー、ライフとその妻たちがおりた。

こんなところにあまり来たことのない人たちなので、うさん臭そうにまわりを見廻した。もし、あんまりつまらなかつたら自動車の中にウイスキーは入れてあるのだからと、ジョンはこんなことを考えていたが、にこやかに迎えられて家の中に入って行った。

その日の夕食のとき、彼らはMRAの創始者のフランク・ブックマン博士に会った。その頃ブックマンは六十代であった。

ジョン・ライフはそれまでにフランク・ブックマンのことはきいていたのだが、会って見ると想像していた人とはまるでちがっていた。第一に感心したことは実に上手に主人役をつとめる人

で、話し易い相手であった。何千人という人に新しい生き方といおうか、新しい哲学を与えた人とは思えないほど気おけない人だった。彼の話は非常に分り易いがまた非常に深く、ユーモアにとんでいて、自分の失敗を笑って直視する気持を、きく人に与えると同時に、二度とそうした失敗をすまいという決心をさせる不思議な特質をもっていた。彼の素朴さは人間そのもの、人間と神との関係、人間の必要に答える神のあり方などに対する深い理解から生れる洞察力からきていた。

ジョン・ライフがそれまでに経験した社会は限られたものであったが——或は限られていたためかも知れないが、——彼はフランク・ブックマンが世界情勢や人物について語るのにすっかり感激してしまった。殊に世界各地の労働組合指導者と親交の深いことに感心した。ブックマンの話はいつも理論ではなく、実際の経験からわり出したものであった。

ジョン・ライフは我を忘れて思う存分きいたり、しゃべったりしていた。

ブックマンは改変した人の話を次から次へとしてきかせた。彼はこんな風に説明した。「誰でも相手に変ってほしいと思っている。だけどみんな相手が変わり始めるのを待っている。MRAは自分から始めるべきだと言うのだ」

ライフはうなづいて考えこんでしまった。そして自分は変る必要なんかない人間だと言った。後

できて知ったことだが、大抵の人は先ずこう言うのだそうだ。

ブックマンは静かに、「それは結構、それは結構」といいながら、ジョン・ライフがつづけて話すのに耳を傾けた。

それから微笑を浮かべながら彼は言った。「あなたが変ってほしいと思う人はいませんか。経営者とか、組合の中の頑固な人とか……」とつさにジョンは何人かの名前を思い浮べた。「そんなんですよ。敵を友だちに変えてしまふ秘訣です」こんなことは考えても見たことがなかったとライフは後になって言った。「或はおくさんか子供さんに変ってほしいと思いませんか」

ジョンの興味はますますつづつてきた。これこそローズにはもってこいの考え方だ。そうだ、彼女が変わりさえすればすべてはうまく行くのだ。

ふと彼は車の中においてあるウィスキーのことを思い出した。しかし、どうしたわけかフランク・ブックマンに会ってから飲みたいとも思わなかった。新しく会う人たちや新しくきくことで心が満されているような気持だった。退屈するどころか、心あらたまる新しい経験であった。

夕食を終えてジョンとローズは暖炉を囲んでいろいろの人たちと話をしていた。名前だけはきいていたような人たちと今ひざを交えて話しているのだった。

凡ゆる階層の人たちがいたが、その一人ひとりが新しい要素が生活に入ってきたのを経験した

人たちだった。

そして家庭争議が解決した話もあった。新しい動機で仕事をするようになった経営者の話、分裂の原因である階級闘争と憎しみをすてて、何が正しいかに基いて新しい世界をつくろうとしている労働者の話は夜おそくまでつづいた。

ジョン・ライフの生涯に決定的な影響を与えたフランク・ブックマンとの交友はこの週末に始まり、ジョンが死ぬまで続いたのである。ジョン自身はこう云っている。「全くの話、最初にいっしょに食事をした時から私は人が変わってしまった。勿論一度に私が変わってこのイデオロギーを生きたというわけではないが、とも角その時以来私はフランク・ブックマンのこともMRAのことも忘れることが出来なかった」

それから二月経って、ライフ夫妻は再びフランク・ブックマンに会った。場所はカリフォルニア州のタホー湖のほとりで開かれたMRA大会であった。

その時姉妹らしい少女が二人の食事の給仕をしていた。この二人は西部海岸で手びろくレストランを経営しているウィリアム・マニング氏の令嬢たちだときいて、ライフ夫妻はびっくりしてしまった。「何ですって。組合側はその店にチケットをはろうとしているんですよ」とジョンは言った。

この二人のブルジョア娘は国や世界を分裂させている階級的、民族的、人種的考え方を變えるために自分たちのすべて——時間もお金も——を投げ出して働いているのだときいてジョンとローズは二度びっくりしてしまった。もしこれが本当なら、それこそ労働者ばかりでなく、資本家に対しても全く新しい考えを入れることができるのではなからうか。これは単に労使関係をよくするとかいうことより大きな新しい要素ではなからうか。

しかし、この二人の娘たちの素性を知ったとき、何か労働者をおとしいれる陰謀でも企んでいるのではないかと疑ったほどだった。だんだん調べてみると決して労働者を弱体化しようと思っているのでもなく、恩きせがましい態度も見られなかったのでやっとな安心した。この二人の娘たちは改変（カヘン）をしたというわけなのだ。その結果、相手がどんな階級の人であろうが、どんな民族に属していようが、心からの思いやりの気持で奉仕することに喜びを感じるようになったというのだ。なるほど給仕をしながらも本当にうれしそうにニコニコと顔を輝かせていた。ジョンもローズもすっかり感心すると同時に自分たちのあり方について強い挑戦をうけたのである。

他人のことなど考えずに自分本位な、快楽を追う贅沢な生活をしようと思えばできるこの二人の娘は、人に奉仕する生活を自ら選んだというのだ。それは規律と目的のある生活だった。そのため食卓のお給仕をすることも、台所で働くこともあった。

その夜ジョンとローズはそのことについて語りあった。はじめのうちは、「理くつに合わない」と思えたのだが、だんだん話し合っているうちに、労働者にとっても経営者にとってもこれほど意義のある生き方はないように思えだした。たしかにこのマニング一家の心の中に革命がおきたにちがいない。フランク・ブックマンは経営者といわず誰の心の中にも改変キョウヘンによって新しい動機が生れるということをいったが、これがその生きた証拠ではなからうか。

これはもっと徹底的に調査する必要があると思つてライフはマニング家の全員にあつてみた。「この人たちは私よりずっと階級意識を持つていなかったんですよ」とライフは言っている。ある日は彼はマニング家の息子と湖に釣りにでかけた。釣りの方は大したえものもなく、二インチの魚三匹しか釣れなかったが彼の心に浮ぶ質問はすべて答えてもらつて満足してかえつてきた。その三匹の魚は記念にマニング氏が魚拓をとつてくれた。

ところで、マニング家のような家庭がたったひとつしかなかったら、どんなに彼らが心の底から一生懸命にやっていたにしてもジョン・ライフは納得しなかつたろうが、この大会には他にもマニング家の人たちと同じような心の革命を体験した経営者たちが何人もきていた。この人たちはお金や機械のことよりも、人間のことを優先的に考えるようになっていた。ジョン・ライフは今まで経営者というものは何よりも先づ利潤を考え、次に工場や施設を大事にし、それでも余裕

があつたら働く人たちのことを考えるものだと思つていた。

ここでジョン・ライフは「世界の富と仕事をすべての人に与え、搾取することを許さない」世界をつくるというこの新しい闘いに、本気で「生命も、財産も、名誉」までもなげ出している経営者の人たちとその家族に会つたのであるが、これは彼にとって生れてはじめての経験であつた。

二人にとってここはまるで別世界だつた。誰かに対立している人は一人もないという雰囲気ははじめてだつた。

ここで新しく知合つた多くの人たちの中に三人の年輩の婦人がいた。ひとり是有名な発明家のトーマス・エジソンの未亡人（この人は亡夫とともにフランク・ブックマンとは長い間の知友であつた）、ひとりはアメリカの鉄道建設で名高いバンダビルトの孫にあたる人でニューヨークの弁護士であるハモンド夫人、ひとりはボストンのスラタリー夫人である。彼女は笑いながらこんなことを言つた。

「私は監督ビシネスマンの娘で、監督ビシネスマンの妹で、監督ビシネスマンの妻です。よく神さまにもっと善良な女にして下さいと祈っていましたが、正直のところいかに神さまだつてこれ以上私をよくすることはできまいと思つていたのです」

三人の婦人たちにとってもこの体の大きいがっしりした組合指導者と彼の元気のいい小さい妻は今まで会ったことのない人たちであった。しかし、フランク・ブックマンのそばにいと何となく今までのせまい世界から解放されてお互に理解しあえる気持になるのだ。どうしてもサンフランシスコにいる自分たちの友だちをライフ夫妻に会わせるべきだと三人は考えた。労働者に会ったこともない人たちに、労働者だって自分たちと同じような人間だということを知らせなくてはならない。

ハモンド夫人は早速友だちを三十人ばかりサンフランシスコのフェアモント・ホテルに招待した。ジョンとローズは自分たちがブルックデールで経験したことをこと細かに話した。つづいてアニー・エーガーが立って話したが、彼女の素朴な話は人の心を深く打たずにはいなかった。最後にハモンド夫人は話したい人がいたら遠慮なく話をしてくれと思いきっていった。

不思議なことはその場の空気に心も口もほころびたのか、出席していた人がひとり残らず心の底から話し出したため、四時間たってもまだ人びとは話をしていった。

次の日ハモンド夫人はニューヨークにかえるためサンフランシスコ・オークランドをむすぶ渡し船で出発したが、桟橋にはローズ・ライフ、オルガ・シッピー、リリー・フラネリーが送りにきていた。三人の姿がかすんで見えなくなるまでわかれを惜しんで立っていたハモンド夫人はつ

ぶやくのだった。「これで私たちの間に橋がわたされたのだわー

仕事に戻ったジョン・ライフの心は不思議にも日ましに満されるようになっていた。どこかにインチキはないものかとずい分さがしたが、どこにも見あたるところか更に経営者たちのこうした革命的な変化は労働者としての彼の心を挑戦せずにはおかなかった。人間の生活のあらゆる分野で動機が徹底的に変化したら結果はどうなるだろう。家庭で、職場で、労働界で、産業界で。組合指導者の自分がまずその立場でやってみたらどうなるだろう。

ちょうどそのころ、西海岸のある製鋼工場でストが二月もつづいていたが、解決の見通しはまったく立たずにいた。週末をタホーのMRA大会ですごしてきたライフは新しく学んだ考え方をひとつ実行してみようと思うのだった。ふと一人の男の名前が頭に浮んだ。それは工場主任の名である。ライフはこの男を相手に個人的に交渉をつづけてきたので、一応友だちになっていた。だが、それにしてもこの二カ月というものの交渉は行づまっていた。

彼は事務所で机の前に腰かけながら、電話の受話器をとりあげ、ダイヤルをまわした。主任に電話にでもらってこういった。「ジョン・ライフですが、お元気ですか」しばらくして相手がいっぱい。「ストの話はごめんだよ」

「私もごめんです。今日は別のことを言いたいんです。あなたにあやまりたいと思って……」

相手は返事をしなかった。「私はあなたを憎んでいたんです。ずい分かげ口もききました。そのことをあやまりたいと思ったんです」つづいて彼は自分が不正直だった点を具体的にいくつかあげてすまなかったと言った。話はそれで終わった。主任からは何の反応もなしに一方的な会話であった。

二日後にジョン・ライフの電話のベルが鳴った。主任からだ。「君と話したいと思うのだが、昼食をいっしょにしないかい」

食事をしながら主任はいうのだった。「この間、君が正直に話してくれたから、私も正直になる決心をしたんだがね。解決に役立つ条件で私は君に正直にいわないことがずい分あったんだ。こっちの足元を見すかされるのがいやだったり、一步後退するのがいやだったりしてね。しかしこの間君が私にあやまってくれたとき、私も同じことをしていることに気がついて、何とかせざるにいられない気持ちになったのさ」そして彼もライフと同じように具体的に自分の不正直だった点を話した。

最後に彼は驚くほど正直で寛大な解決条件を示した。今度はライフが黙ってしまった。

それから二人はそれぞれ自分たちの仲間を集めて相談をした結果、四十八時間後には交渉が妥結して労働者は職場にもどることができた。

これは確かに驚くべき結果であった。その後ジョン・ライフはいつもこれほど簡単に結果がでるとは限らないことも知ったが、いづれにしてもこの時の経験は貴いものであった。そのうちにジョン・ライフはまた次のようなことも学んだ。それはMRAは団交を有利に導くためのテクニクでもないし、机の上の厄介な問題を都合よく解決する公式でもなく、かえって机の回りに坐っている厄介な人間の心の動機を変えることのできるものだということである。

実際ジョン・ライフは自分が変わったときに、周囲の状態も変わってくることを度々経験したのである。彼は自分が生きるべき人生を発見したことをいよいよ明瞭に自覚した。それは心の新しい贈物であった。しかもこれは妥協することとは全くちがっていた。ジョンは彼が変わることによって相手も変わってくることを体験するのだった。人の心の中に新しい動機が生れ、正直が秘密にとって代り、疑惑のあるところに信頼がめばえ、自分を忘れ、人を思いやる気持が欲ばりと要求にとって代るのを見たのである。

ジョンは経営者と労働者との利益は相反するものときめていた。ところがこの考え方がまちがっているのだろうか。労使の反目が時代おくれだというのなら、労働界内部にある反目は一体どうなのだろう。

ここでもジョン・ライフは新しい考えを実行する決心をした。フランク・ブックマンにあって

間もなく、ジョンは組合の仲間たちにMRAを研究するチャンスをつくることができた。というのはちょうどその頃、鉄鋼労組の大会がロスアンジェルズで開かれたのである。

カリフォルニアの鉄鋼労組の内部は分裂していた。中には階級闘争のイデオロギーを信じている人たちもいて、始めから大会の方針をたて一糸乱れぬ作戦でことを運んでいるらしかった。ジョンが心に抱いていた憎しみをすててしまったことはこの人たちに都合のわるいことであった。階級闘争をおし進めるために役に立たない人間はじゃまだった。

大会がはじまるとジョンはほんのわずかの差で議長に選挙された。しかし、反対派は激烈であらゆる議題をとりあげてもんだ。そして終始数人の代議員がしつこく大声で妨害を試みるありさまだった。会場は緊張した空気に包まれていた。

ジョン・ライフは、しかし、組合指導者としての自分の役割について今までとはちがった考えを持ち始めていた。そう簡単に憎しみの策略にはのらなかつた。ひとつ新しい手を使ってみようと思ふのだった。——正直という新手を。

ことあれかしと願って機をみていた反対派の一人が、議事の進行をなじって議長にくってかかった。昂奮と怒りにふるえていた反対派は血の雨をふらさなばかりの気配だった。どんな小さなきっかけでも火薬庫にマッチをなげこむのと同じ結果になりかねなかつた。

ゆっくりとジョンは議長席で立ち上った。怒りにみちた人びとを前にして彼は一言も弁解しようせず、静かに言った。「私のまちがいです。すみません」

思いがけない言葉に人びとは啞然としてしまい、立ち上ってさわいでいた反対派の人たちも席にもどり議事ははじめて静粛につづけられた。

大会の最終日に彼は彼自身のタホーでの体験を語りながら、MRAの二人の友人を代議員一同に紹介した。

その一人は有名なラジオ歌手でギターも上手なカナダのカウボーイのセシル・ブロードハーストで、彼はいくつか歌を歌った。もう一人はニューヨークのケネストン・トゥイッチェルであったが、彼が貪欲や憎しみ、おそれを根本的にいやしてしまうイデオロギーについて話すのをきいた人たちは心から反応をしめた。

「このイデオロギーをもったらそれこそ敵なしだ」とある組合オルグはいった。

この大会でジョンがとった態度は勇敢で異例なものだったがそのおかげで、彼は人びとがどういふ動機で動いているかが分りだしてきた。真剣に労働者の利益のために働く人とそうでない人との区別が見えだしたのである。

その年の終りにジョンはこんなことを言った。「MRAの精神を実行した三カ月間に、私は三

年かかってもできなかつたことを組合のためにすることができた。

とはいえ、彼の前途には苦闘と試練が待ちかまえていたのである。

一九四一年の初頭に、彼はバン・ビトナーを助けて東部諸州にあるベツレヘム鉄鋼会社を組織するといふ困難な、しかし名譽ある仕事ととりくむこととなった。

東部に残されていたエステイズ、フッカー、バーバラの三人の子供はおぼろげながら両親に何かおこつたことを感付いた。八才のエステイズは母のエルシーとケンタッキー州のヴァージーに住んでいた。ローズの先夫の子の九才のバーバラと七才のフッカーは家政婦といっしょにシカゴでくらしていた。

バーバラはその頃のことをこうかいている。「両親の手紙の調子が変わり、長くなつたんです。それまでの手紙といえは短かくて、カリフォルニアの氣候が素晴らしいこと位しか書いてなかつたんです。ミシガン湖の冷い北風にさらされてる私たちには、あまり有がたくもなかつたのです。ところが一九四〇年の春ごろから確かに変わり出しました。私たちのことを本当に心配し出した様子がよみとれるような手紙になつたんです。それまでもお父さんは自分が若い頃炭鉱でずい分辛かつたと見えて、私たちの体のことか食べものことはずい分気にしてくれていたのですが、今度は私たちが幸福にしているかとか、学校はどんな具合かとか、人間として考えてくれて

いるというふうでした」

ところがある日、突然ジョンとローズが自動車でやってきて、家政婦に礼をしてシカゴの家をたたんで、子供二人と家財道具をまとめて、インディアナ州のレミントンという人口八百五十位の町の郊外に引こしてしまった。新しい家は部屋が九つもあって、四エーカーもある牧場に囲まれた素晴らしいれんが造りの家だった。

どうやら落ちつくときジョンはケンタッキーまで行ってエステイズをつれてきた。

はじめに全家族が一つ屋根の下に住むこととなった。ローズの母のスタイン夫人も加った。その上、ジョンとローズはロスアンジェルズから真白い元気のいいベギーというスピッツ種の犬もつれてきていた。ベギーはジョンが苦手で、片手に軽々とつまみあげられるとキャンキャン鳴いて大さわぎをするのだったが、ジョンが長い旅行からかえってくると真先に玄関に迎えにでるのであった。

お互に父と母のちがう子供たちは前に一度会ったことがあるだけであった。しかもその時は口こそ出さないがあきらかに反目しあっていた。しかし、今度は雰囲気もちがうためであろう。彼らはすぐ友だちになったが特に背が高く頑丈なエステイズと背こそ高くないがガッチリしたフッカーは仲よしになった。

バーバラはいう。「お父さんとお母さんはたしかに変わりました。カリフォルニアでみんなのためになるよいことが起ったことはきいていたのですが、今度いっしょになって詳しく話をきくとができました」

ジョンも仕事のゆるす限り家にいるようになり、はじめて家庭らしい家になった。子供たちも各自の部屋を持ってたし、庭の桑の木にはブランコもできたし、まちがって落ちても下はコンクリートでなく土であることも楽しかった。子供たちが秘密の洞穴をほったりする場所もあったのだ！ 家にいる間にジョンは家族のために花壇をつくったが、植木を植えるのも家族にとってはじめてのことだった。

バーバラは回想する。「両親はカリフォルニアで学んできた一番大事なことを私たちに教えてくれました。心を静かにして神にきき、浮んできた考えを紙に書くということでした。私たちが子供は素直にやってみたらとても役に立つことが分りました」

ジョンとローズは子供たちがいつも愛されていると感じ、安心していられもし、また友だちをつれて来られるような家庭をつくりたいと思うようになった。それで今まで子供たちのことをかまわず、他のことにばかり忙しがっていたことをわびるのであった。

父親はいうのだった。「今まで私は君たちに食べるものと着るものと、そして家を与えておく

ことが私のつとめだと思っていた。君たちばかりじゃない誰に対してもそこまでしか考えなかった。今になってそれだけじゃ足りないことが分ったよ。すべての子供に必要なものは親の愛と親にたよれるという安心感だということがね。その上にもっと大切なものは神にたよる信仰から生れる安心感だということがね」

その次にジョンがパン・ビトナー氏を助けてベツレヘム鉄鋼会社の労働者を組織する闘いに加わるためベンシルバニアに出かけていくときにローズは子供たちといっしょにレミントンにのこったが、これはその新しい決意のあらわれだった。

レミントンに住んでいる間にジョンが生まれた。ジョンはちょうど大会に出席していて留守だったが、子供の洗礼式の間にあうようにと急いでかえってきてみると、フランク・ブクマンもヘインズ夫妻や、アニー・エーガーとその息子のビルたちをつれてもう到着していて、家族の人たちはお父さんのジョンが間に合わないのではないかと心配しているところだった。式が終わって皆で食事をいっしょにすることになった。それは本当に楽しいひと時であった。今度生れたジョンアナを中心にライフ一家は心から融和していることを感じるのであった。

バーバラはいう。「そのとき、私と弟のフッカーはライフの姓を名のことになりました。一つ家であらしていながら名前が二つあることはどうもややこしかったのと、お母さんのためもあつ

たけれど、今度のお父さんがとてもよくしてくれるのでそういうことにしたのです。最初私たちの父はこのことを喜ばないで、裁判にまで持ちだしてしまっただけですけれど、まるで父親のような裁判官が双方の意見をきいてから、『子供たちにまかせるのがいいでしょう』と行ってくれたのです。フッカーも私も即座に返答しました。『私たちはライフ家の一員として一生仲よくやっていきたいのです』『それで決った』と裁判官が言ってけりがつかしました。

私たちの家の父はそれでも納得しない様子でしたが、あとになってライフの父と会ってお互に心を開いて長いこと話した結果誤解もすっかりとけて、二人は本当の友だちになったのです。

ベツレヘムでの闘いは中々困難で、ジョンの留守も長びくことが多かった。そんなとき、ローズは考え込んで沈みがちになるのだったが、しかし、ジョンが帰ってくるとまたすべては元通りに楽しくなるかのように見えた。

第六章　ファイリップ・マレーの呼び声に応じて

「この人の愛に優るものありや」という珍しい見出しの記事が一九四〇年十二月の『労働者の声』に掲載された。西バージニア州モーガンタウンのその新聞は、バン・ビトナーがアメリカ上院議員の議席を断わったことを伝えた。西バージニアの新しい州知事に選出された上院議員マシュー・ニールイはバン・ビトナーに国会の議席を譲ろうとしたが、譲られた鉄鋼労働組合の指導者がそれを断わったというのである。その記事によればビトナー氏は「自分は労働組合組織者としてよけい必要とされていると思うし、鉄鋼労働組合組織運動の指導者として現在の地位にとどまっているほうが労働界のためにより寄与できると思う」と語っていた。また他の新聞記事の伝えるところによれば、「ビトナーの友人たちは彼が労働者の組織化に生涯を捧げる決心を固めていることを知っているし、どんな政界の地位を提供されても彼が絶対に受け入れないことも知っている……現在ビトナーはベツレヘム鉄鋼会社の全工場にその組織運動の鋒先を向けてい

る」

ビトナーがジョン・ライフを自分の補佐役に選んだのはその時であった。上院議員の席を断わるという指導者の決意はライフを驚かすこともなかったが、彼に深い印象を刻みつけずにはいなかった。

後年ジョン・ライフはバン・ビトナーといっしょに暮した時代の思い出を語ることが大好きであった。その話をはじめるとにジョンの目は開拓者としての感激と先輩にたいする感謝の念に燃えて輝くのであった。どんな人間にとっても労働者のために身を捧げるといふことより貴い目的はこの世の中に決してないということをもバン・ビトナーが彼に示してくれたのであった。S W O C (鉄鋼労働者組合組織委員会) の機関紙『鉄鋼労働界』は一九四〇年十月号にビトナーを「アメリカの最も傑出した組織者」と評している。

ビトナーの穏かな容貌ともの静かな態度の中に鉄鋼のような固い性格と決意が秘められているといふことは、彼の相手となって闘った人たちが一番よく知っているはずである。或る報告書のことばに従えば「不屈な革新運動の指導者」であったこの人からジョン・ライフの学んだことは、民衆を指導するためには先ず率先して模範を示すこと、次いで犠牲と不断の努力が要求されるということであった。ジョンは、ビトナーが幹部の者と夜いっしょになると、いつもにこにこ

目を輝かせながらその豊富な体験談を語ってはみんなの耳を楽しませてくれたことを語った。若手の指導者たちはこの大先輩の思ひ話から多くのものを学び取ったのであった。またライブはビトナーが演壇に立って単純な、平凡な、いやおうのない真理を説いて問題の核心を衝いてくれたため会議が混乱から救われた場合のことも思ひ出しては語った。

それより先き一九二四年にビトナーはすでにアメリカ社会政治科学学会の会報に書いている——「進歩した与論も、最良の工業界の慣例も先例も、また最高の工業界の政治的手腕も、ともに早くから団体交渉の基盤として組合主義を承認して来ている」

まだ「進歩した与論」や「最高の工業界の政治的手腕」などの例を見いだすことが実に困難だった時代、南部諸州のあいだで組織運動の茨の道を歩いていたビトナーをあくまで支えてくれたのはこの確信だったのである。

ビトナーの死後六年目の一九五五年にCIOの最後の組合大会は波乱に富んだ歴史を後世に残したが、そのさい、彼に贈られた賛辞はそのことばの内容だけではなしに、それが大会に与えた影響により特筆に値するものであった。バン・ビトナーの名前とその思ひ出はCIOの男女の心をまるでトランペットを鳴らしたように奮起させる力を持っていた。彼らは闘争と危険に満ちた初期の時代に連れ戻されたからである。忘れられない一つの話が彼らにビトナーの生涯と仕事を

貫いた友愛と信念を思い出させたからである——組織を勝ちとるためのストライキの最中のことである。

工場主たちの中には組合幹部に危害を加える意図を公言している者もあったとき、バン・ビトナーはストライキ中自分の護身隊として選任された友人たちをまいて、ただ独りでどこかへ出かけてしまった。

彼をさがし出したとき友人たちは心配のあまり怒りを面に出して尋ねた。「どういうわけで独りで出かけるような馬鹿な真似をしたんですか」バン・ビトナーは答えた。「私は独りで外へ出かけたわけじゃないよ。私は私を守ってくれる神といっしょに歩いていったんだ」

CIOのためにいっしょに尽した長い年月のあいだジョン・ライフにとって父親のような役目を果たしてくれたバン・ビトナーはそういう人間だったのである。

一九四一年ジョン・ライフはベツレヘム鉄鋼組織化運動の第一線に立って活躍した。中小鉄鋼会社の中でも最大のベツレヘム会社にたいする攻勢は、その規模において類のないものであり、その闘争の成否はSWOCにとってきわめて重大なものであった。ベツレヘムで起ったことはそ

の他の会社つまり、リパブリック鉄鋼、インランド鋼鉄、ヤングスタウン鉄板鉄管の七万人の労働者の運命を決定する力を持っていた。闘争の中心となった鉄鋼工場の所在地はニューヨーク州ラカワナナであり、メリーランド州スバローズ・ポイントであり、ペンシルバニア州ベツレヘムとジョンズタウンであった。特にラカワナナにある巨大な鉄鋼工場は最後の決戦場と目されていた。ここでも他のベツレヘム各工場に起ったとおなじようにすでにストライキの火の手が上っていた。重大な運命を賭けた闘いであるだけに、敵味方の熱意は時によって奔流となってほとばしることもあった。しかしジョンは新たな沉着きと自制心を得たらしく、それは同盟罷業者の中にいる好んで事を起したがる人たちや、激しやうい人たちをおさえるのに役立った。ただけではなしに、遂に敵側の尊敬と好感を勝ち取る原因となった。

ストライキ中、今にも暴力沙汰になりそうな場合も度たび起ったが、ジョン・ライフの勇氣と機転によってそのたびごとに最悪の事態は避けることができた。会社側が緊急事態にそなえて臨時に頼んだ警察官が大挙して勢ぞろいした同盟罷業者群に向い合ったとき、一人の警察官が急におびえて興奮のあまり群集に向って催涙弾を投げつけるといふ事件が持ち上った。ジョン・ライフは「メモリアルデーの虐殺事件」の恐怖を思い起した。そういう血なまぐさい事件を二度と起してはいけない、とジョンは考えて即座に行動を起した。彼は仲間の者にその場を動かないよ

う台図しながら進み出てその若い警察官に話しかけた。その男は自分の性急な行動の成行きをおそれ、もはや狼狽の極に達していた。

「どういう訳であなたはあんな催涙弾を投げたのです？」とライフはもの静かに、しかし斬固とした口調で尋ねた。その警察官は事態が自分の手に負えなくなりそうなことを恐れたからだと告白し、自分の誤ちを認めた。

ライフが話しかけているあいだにその警察官の張りつめた気持も少しづつくつろいできた。二人のことは聞える近くに立っていたほかの警察官たちも次第に緊張した不安から解放された。その警察官の行為は規定に違反していたので警察部長がその場に姿を現わした。ジョン・ライフは部長に向かってその若い男のために弁護してやった。もの静かな口のきき方をするこの堂々とした労働者の指導者にはどことなしに相手を承服させずにはおかない精神的な威厳がそなわっていた。しばらくして、彼はもとの場所に戻って自分の仲間の労働者たちに話をした。彼らの目から怒りは消えた。危機は去ったのである。

やがて警察側は手に負えない罷業者たちを検束する代りにライフに引渡して処置をつけてもらうことに同意した。一人の組織者はこう言った。「もし事態処理にジョンがあのような新しい手段を取らなかったら、工場の周辺一帯に流血暴力の惨事が起り救急車のサイレンがなりひびいた

ことだろう。そうなった後では私たちにはとうてい事態の解決を得られなかったにちがいない」

その後のラカワンナ組織化運動は大した暴力沙汰も起らずに進展して行った。労働会議選挙の投票日は一九四一年五月十五日と定められた。SWOCが審判される日である。工場の近くに投票所のテントが張りめぐらされた。終日鉄鋼労働者たちはSWOCに賛成か反対かの意思表示をするため列をなして投票所にはいった。ジョン・ライフはその結果を待ちかねていた。集計は発表された——鉄鋼労組賛成八二二三票にたいし、反対二九六一票である。ライフにとって大きな得難い勝利であった。フィリップ・マレーはそれを「組織化運動の歴史における最も重大な勝利」と呼んでいた。

やがて投票はベツレヘムのその他の鉄鋼工場でも行われた——全部で十二工場である。各工場に勝利が確保された。その例にならってリパブリック、インランド、ヤングスタウン鉄板鉄管の各工場もSWOCと協定を結び、かくてSWOCは大鉄鋼、中小鉄鋼両者にたいする正式交渉団体として認められるに至った。

一九四一年末までにベツレヘム鉄鋼は完全に組織化された。今やCIO、並びに鉄鋼労組の委員長となったフィリップ・マレーは当時ジョン・ライフに送った手紙の中でこう言っている。「私がベツレヘムの選挙のことをどんなに満身に思っているか、またその勝利をもたらすために

演じたあなたの役割をどんなに感謝しているか、ぜひあなたに知っていただきたいと思つています」バン・ビトナーもまた心から賞讃のことばを送つた。

フリリップ・マレーはライフの家庭生活が變つたことにたいしても大いに賛意を表していた。彼は以前からライフの家庭生活のことを心配していた。「私はあなたがジョン・ライフのために尽して下さつたことすべてに賛成です」と彼はチャールズ・ヘインズに言つていた。彼はMRAは「われわれの目に見えない敵、すなわち分裂をもたらす物質主義にたいする闘いへの呼びかけ」であると評し、さらにこうつけ加えている。「それは本質的なデモクラシー擁護と新しい社会秩序のために闘っているあらゆる人たちの心に訴えるにちがいない」

「本質的なデモクラシー擁護」……「われわれの目に見えない敵、すなわち分裂をもたらす物質主義にたいする闘い」——こうした評価は労働を支配し、さらに国家を、世界を支配しようとしてやっきになっている根本的な野望を見抜くフリリップ・マレーの深い洞察力を示すものである。当時、フリリップ・マレーの同僚たちは必ずしもこうした洞察力をそなえていたわけではなかつた。

ジョン・ライフとしてはイデオロギーというものがどんなふうにも活動するかということについて、まだ漠然とした見当しかつていなかったが、相ついで起つた事件が彼に大いに考える機会

を与えてくれた。

彼は共産主義者たちが一九四一年六月二十二日まで戦争に反対していたことを知っていた。CIOによって一九四〇年に組織化された西部海岸の各工場では共産主義者たちのスローガンを見ていたからである——「ヤンキー兵は来ないぞ」というもじり歌の一節であった。そのころ彼らはMRAやジョン・ライフを「好戦論者」と攻撃していた。

ところがヒットラーがロシアを攻撃したために共産主義者たちの目に映った戦争は一夜にしてファシズムにたいする聖戦に形を変えた。そこでそれまで「好戦論者」と呼ばれていた彼、ならびに彼の友人たちは共産党の方針が変わるにつれて「反戦主義者」「ファシスト」と呼ばれるようになった。この方針はジョージ・セルディズの「事実情報」と呼ばれる一枚新聞から共産党の機関紙「デーリー・ワーカー」、「人民世界」に至るまで、アメリカ全土にわたって買かれていた。

一九四一年十二月SWOCの幹部の数人がフィラデルフィアでMRAの音楽劇「あなたはアメリカを守ることができる」を観劇した。彼らは一九四二年オハイオ州クリーブランドで行なわれる自分たちの大会にその音楽劇を上演してくれるよう依頼した。これは正式に開かれた第一回全米統一鉄鋼労働者組合大会であった。同じ年「あなたはアメリカを守ることができる」はまたトロントで開かれたAFL国際大会、およびカナダ労働総協議会、カリフォルニア労働総同盟の

大会の公式日程で特別上演された。

クリーブランドでは鉄鋼労働者、ならびにその招待客たち二千名がこの音楽劇に熱狂的な喝采を送った。

最後のカーテンが下りた後、委員長フィリップ・マレーと会計部長デイビッド・マクドナルドが舞台上に上った。マレー氏は口を開いた。「これはアメリカが求めている精神、すなわち民心融和の精神を生み出すことのできる音楽劇であります。出演者一同に幸福を与え、この人たちの演じていることすべてにたいし思みを垂れ、この人たちを守られるようお祈り致します」

デイビッド・マクドナルドは会計部長として出演者一同に手紙を書き送った——「第一回全米統一鉄鋼労働者組合大会は千六百八十九名の代議員の正式動議にもとずき、あなた方の上演された士気を鼓舞し愛国的情熱を鼓吹する偉大な劇にたいし、団体として、また個人としてあなた方に感謝を送る決議をいたしました。この決議を採択したことにはたいし一人一人の代議員は立ち上って高らかに喝采を送りました」

このときジョン・ライフは自分自身の組合の中で闘争が行なわれていることに目を開かされた。彼はその上演の前日、その音楽劇の上演に反対する匿名の電話を三回受けたということを鉄

鋼労働組合の会長のフィリップ・マレーの口から聞いて驚いた。その電話の声の主たちは「ファシスト」とか「反戦主義者」とか、そのほか左翼がよく使う、まごつかせるようないろいろの呼び名を使ったそうである。しかしマレー氏は断固としてはねつけた。彼は名も告げない電話の主たちに言った。「もしこのことで反対があるなら、上演する場所は大会の議場だから、そこで討論しようじゃないか」しかし翌日大会の席上には反対する声は一つも出なかった。劇はつづけられた。

ジョン・ライフはまた暮合中に大会の代議員の一人らしいある男が劇場の休憩室から長距離電話をかけ、上演を妨害しようとした努力が不成功に終わったことを腹立たしげに告げ、観客がみな熱狂してそれを歓迎していることに不平を並べ立てているのを発見した。自分の目の前に亡国的な陰謀がめぐらされている証拠を見せつけられたことがジョン・ライフの闘争心をあおり立てた。翌年「奉仕の闘い」と題する報告書が戦時契約の調査に当たっていた当時の上院議員ハリー・S・トルーマンの事務所から発行された。この報告の中に収録されたジョン・ライフの声明は次の通りであった。——「フランク・ブックマン及びその下に働く人たちの忠実な援助によって私自身の心構えは変った。そのおかげで私はたえず産業の平和の妨害となっている執拗なレジスタンスの隘路を打開するためにイニシアチブをとることが出来る程までになった。それ以来すべての

人びとと自分との関係は百パーセント改善された。フランク・ブックマンの下に働いている人たちはアメリカの全産業界に調和と安定をもたらすために、ほかのどんな人たちよりも大きな仕事を果している」

「この報告書の中でライフの同僚たち、すなわちCIOの副会長アラン・ヘイウッド、鉄鋼労働組合のディビッド・マクドナルド、およびクリントン・ゴールドンは、他の国民生活の指導者十八名と連名して、MRAの男女が国内、および戦場の第一線で果たしている愛国的な戦時奉仕に政府の注意をうながした。彼らは述べている。「MRAはアメリカの戦争努力並びに愛国の精神にたいし本質的な貢献を捧げている。真珠湾のずっと前からその主だった人たちはこの仕事に献身している。彼らは産業界の協力、及び挙国一致をめざす闘いを理知的に闘って成功をおさめている訓練された一つの大きな勢力である」

「ファシスト」とか「反戦主義者」というような汚名を浴びせかける出所をジョンは今にして知った。彼はその報告者もたらしたMRAにたいする国家的な認識を快よく迎えた。彼は国および世界に行なわれている争いの本質を把握しはじめてはいたが、自分自身の生涯がどれほどこの争いの焦点になるよう運命づけられていたかということについては、そのころはまだ夢にも思っていないかった。

第七章 南部諸州にたいする攻勢

そのあいだライフの家庭はジョンの組織運動の任務が命ずるままに矢つぎ早に移転をくり返していた。

ケンタッキー州アシュランドでは一家は貧民街に灰色の木造家屋を構えたが、レミントンでりっぱな煉瓦建ての家に住んだ後だったので、ずいぶんあじけないものであった。家のあじけなさはそのまま家庭生活の象徴でもあった。なぜなら一家の家庭生活は再びその輝きを失おうとしていたからである。一九四〇年以來はじめて妻のローズはひそかに衣裳に贅をつくすという昔の習慣に戻ってしまった。

ジョンは組織運動でほとんど家から離れていた。仕事のひまに夫は何をしているのだろうか……彼女が夫がまた酒を飲み出したことを知った。これからも酒を飲む機会がいくらでもあることだろう。そう思うと彼女の胸はくやしさに煮えくり返って来るのであった。彼女は疑惑のとりこと

なり、それからそれへとありもしないことを空想した。遂には面当てがましくいろいろな店へ出かけ、高価な服を買いこんでは自分を慰めようとしてみた。もちろんそんなことをしたらジョンは立腹するだろうが、それも夫の身から出た錆ではないか。

アシユランドにしばらく住んだ後、ジョンは一家を連れてペンシルバニア州ピッツバーグに引越した。彼らの植民地風の家は気持のよい川の流域に立ってはいしたが、勝手口のポーチに立てば鉄工場のスラッグの光る山がいやおうなしに目にはいるのであった。時によると汚ない煙やいぶる煙が工場から家の中まで舞い込んで来た。そういうことが起るとローズは心の中で反抗しないではいられなかった。どういふわけか彼女は汚ない煙をジョンの仕事と結びつけて考えるのであった。夫は仕事以外は考えていない。なるほど鉄鋼労働者は組織されなければならぬにちがいない。しかし、夫の頭はそれだけで一ぱいなのだ。

ジョンは仕事でベツレヘムの町へ立ち寄ることが時々あった。近くにはフランク・ブックマンの郷里アレントタウンの町があった。ジョンが組織運動の仕事でこの地方に立ち寄るごとにローズは夫と同行した。もしフランク・ブックマンが町にいたら、会うこともできてどんなに嬉しいことだろう、と彼女は考えていた。

ライフ夫婦がアレントタウンに滞在していたとき、たまたま復活祭に当たっていたが、忘れられな

い思い出となったある日の朝、思いがけなくフランク・ブックマンが一行を引き連れて彼らのホテルに現われた。ローズはすっかり興奮した。はじめジョンは黙りこんでいた。しかし、ブックマンが手品師のようにポケットへ手を突込んで美しい彩色の復活祭の卵を取り出したときには彼もうちどけて微笑した。やがてブックマンはライフ夫婦に自分の少年時代のなじみの場所を回ってみようではないかと誘った。そこで一同は出かけ、最後にシアートルスビル村にある有名なベンシルバニアのオランダ料理店に立ち寄り、大きな家族向きの食卓で盛大な手料理の昼食をとった。昼食がすむと一行は第一次世界大戦にフランスで戦没したフランク・ブックマンの兄のために建てられた記念碑を訪れ、ついでアレントタウンにいる彼の昔なじみの友人たちの家をつぎに訪問した。一同にとってその日は実に愉快な一日であった。

そのためそれから数カ月たってライフ一家がアレントタウンで一軒の家を借りることに決めたと、そのときの楽しさが思い出さずにはいられなかった。その当時ジョンの組織運動の職場がその町の近くにあったのである。

しかしそのアレントタウンの家にも長くは落着けないことになり、一家はまたインデアナ州に戻り、こんどはゴーションに引越した。

フッカー・ライフは当時を思い出して語っている。「私が十二才のとき私たち一家はゴーション

ンで最初十エーカーの農場付きの大きな化粧しっくい農家で暮らしていた。私たちは豚と鶏と、馬と子馬一頭づつ、牝牛一頭、それに『ローズベルト』と『デューイ』と名づけた二匹の兎を飼っていた。また野菜畑も作っていた。私が絶対に農夫になどなるものかと決心したのはそのときである。

父があまり家にいなかったので農場にはやらなければならぬ仕事は沢山ひかえていた。母は牛の乳をしぼり、豚と鶏と兎の世話をし、野菜畑の手入れもしなければならなかった。母の仕事はいつまでたってもかたずくということはなかった。

父が組織運動の旅行から家へ帰って来ると私たちは楽しかった。父はときどき組合の友人たちを連れて来た。その人たちは私たちの農場の卵やバターが嬉しいらしかった。しかしそのうちに私たちは母のためにゴーシエンの町の中にある家に引越した。家庭内の空気がまた厄介なことになり始めたのはその頃のことであった。父はほとんど毎日のように家を留守にしていた。私たちはみんなずいぶん我儘だったようである。エスティズと私はスポーツ・カーに夢中になり、二人でよくトラブルを起した」

まだゴーシエンの学校へ通っていた若いエスティズ・ライフは、自分は労働組合の組織者にはならないで弁護士になるつもりだということをはっきり表明した。しかし父親といろいろ話し合

ったあとで、彼は遂に父の歩いた道を継ぐ決心をしたのでジョンは大変喜んだ。

そうこうしているうちに南部諸州の労働者たちから、一家にとってはいっそう犠牲を強いられることになりそうな助けを求める呼び声がかかって来た。

一九四六年四月CIOは数百万にのぼる南部の非組合労働者たちを団結させる大運動にのり出し、パン・ビトナーを執行委員長とする南部組織委員会を結成した。彼は再びジョン・ライフを自分の補佐役にした。

フッカー・ライフに語ってもらおう。——「私たちは父のそばへ行こうとつぎつぎに家を引越して行った。いつまでたっても一家が全部そろって落着けそうにもなかった。とうとう父がうまいことを思いついた。父はある年の夏、私たちが父といっしょに動いて歩けるように大型のトレーラーを一台買った。家族全部がこれに乗りこんだ。父と母、エステイズと私、それにむろん赤ん坊のジョアンナもいっしょである。私たちは出発した。私たちは南部一帯を旅をして回ったが、主として組合の出来かかっている織物工場のある町々に立寄って歩いた。

私たち子供たちはそれがどんなに危険な仕事かということの間もなく知った。アラバマ州のある町で私たちはトレーラーを引き入れてキャンプ出来るような場所へ入ろうと午後いっばいかかって道という道を回ってみた。行く先々で私たちは追い払われた。父が労働組合の組織者だとい

う噂がひろまっていたにちがいない。

とうとうもう少しのところでありらめようとしていた日暮れの直前、私たちは泊る場所をみつけた。私たちがそこに落着くか落着かないうちにエステイズと私は六人の男が乗り込んでいる一台の自動車がいつまでたっても私たちの前を行ったり来たりしているのに気がついた。その男たちは私たちのトレーラーを見つめていたように思われた。そのうちにその車はうんとスピードをゆるめて通り、大声で父を罵倒しはじめ、もし私たちが直ぐに町を出て行かなければそのままにしてはおかないと脅迫した。

父は私たちといっしょに外に立って目を見張り、耳をすましていた。やがてエステイズと私は父のそばにいて手伝いたいと言ったけれども、父は私たちにトレーラーの中へはいるように言った。そこで私たちは父といっしょに中へはいった。私たちは父が引出しからピストルを取り出すのを見た。父はまた車から降りて行った。

つぎにそばを通ったときその自動車は停車した。こんどは先にどなったのは父のほうであった。父は大きな声で叫んで言った。『おれが組合運動をやっている時だったら君たちはおれにたいして好き勝手なことをしても構わないぞ。しかしおれの家族に手出ししてはいかん。君たちの中で一步でもこの地所に足を踏み入れる者があったら、誰彼の容赦なく一発見舞ってやるから』

父のことばは真剣だった。父は家族の私たち一同にどんな災難がふりかかって来るかもしれないと本当に心配していた。と言うのも私たちのトレーラーにダイナマイトを仕掛ける計画のあることを父は前から知っていたからである。争議に雇われた暴力団たちは父のことばから真意を悟ったのか、間もなく私たちはその自動車が立ち去る音を聞いた。彼らは二度と私たちに手出しをしなかった」

ライフ一家にとってその数年間は不安と危険の連続であった。南部の労働者たちのもとめに応じるとき、ジョンは自分の身も家族の労苦も惜しまなかった。「私が今まで協力した人の中でジョンが最も偉大な組合組織者であった。彼は自分のやりたくないことを決して人にやらせるような人間ではなかった。事件が起るとジョンはいつもこう言った。『さあ、諸君、出かけよう』そして本人が真先きになって歩き出すのである」と彼の所で働いていた一人が言っている。

「ジョン・ライフほど勇気のある人を今まで見たことがない」と南部で彼を助けていた幹部の一人が評していた。「私は彼といっしょに数々の闘争を経験して来た。彼は何ものも恐れない人間であった。私たちは今にも私たちを撃砕しようといきり立った労働者たちが満場を埋めているホールに向い合ったある夜のことを今でも覚えてる。本当に危険が迫っていることを私たちは直感した。演壇に立ったほかの連中はつぎつぎとホールから出ていった。最後にジョンと私の二

人だけがそこに立っていた。私の膝はガタガタ震えていた。しかし顔を上げてからだの大きなジョンが聴衆に向って手を振り、聴衆の聞きたがらない真理を説きながら聴衆の注目を集めているのを見たとき、ようようのことで私は勇気をとり戻した。私たちは無事に成功した——ジョンのお陰である」

一九四八年三月四日の夜ジョン・ライフは南カロライナ州コロンビアで誰ともわからない暴力団の連中に残忍な暴行を受け、死んだものと思って棄てておかれたことがあった。それまでも彼は南部組合組織運動をしているあいだに再三襲撃を受けたことがあったが、その夜の襲撃は極めて残酷なものであった。

生命をも失なおうとしたその夜の出来事はつまびらかに判っていない。なぜならその暴力団はとうとうつかまらなかつたし、その襲撃を受けたときジョン・ライフのほかに見ていた人は一人もいなかったからである。ある地方の工場にストライキが行なわれていたとき、その町の郊外の一ホールで組合の会合が開かれたときであった。それは労働者たちとその家族が出席した静かな会合であった。

その夜の会合が終わったとき、ジョン・ライフはあいまいな脅迫ではあったがいつものような脅迫を受けていたにもかかわらず、組合員とその家族を自分の車で七、八回往復してそれぞれ無事

家を送りとどけた。「大男のジョン」は何よりも先きにほかの人たちのことを考えてやるのがいつもの癖であった。自分の身の安全——そんなことに彼は心をわずらわさなかった。

最後に、彼は誰もいなくなったホールに戻り、しばらく椅子にこしをおちつけてその夜の会合の記録を読んでいた。

それから後のことではっきり彼の記憶に残っていたのは、後ろからすばやく近づいて来た五、六人の男の姿が眼鏡のはしにちらりと映ったことだけであった。彼はひどく頭を殴打された。しかしそれだけではライフは気絶しなかった。いつものように大胆不敵に彼はわけのわからないその襲撃者たちに立ち向った。しかし間もなくさすがの彼も敵の数に圧されて倒れてしまった。

ライフの同僚の一人であるジョン・ラムゼーはそのあいだに自分のホテルに戻っていた。しかし真夜中過ぎにラムゼーは妙に友達のことか不安になって来た。彼は不思議な予感を感じ、その予感に耐えかねてとうとう会合のあったホールへ戻ってみた。

彼は暗闇の中を車で急いだ。彼は人気がないホールでジョン・ライフが人事不省になって床の上に倒れ、切裂かれた頭や首からまだ血が流れ出ている姿を発見した。間もなく傷の手当を受け、ライフがどうかしてホテルのベッドへ戻ったのはすべてジョン・ラムゼーのお陰である。

ジョン・ライフは頭と両腕を繙帯に包まれ、その小さなホテルの奥の部屋で目を覚ますまで、本人は何も覚えていなかった。インデアナ州ゴーシェンの家にいたローズのもとに電話がかかれ、彼女は急いでコロンビアにやって来た。ローズが駆けつけて来てみるとジョンはホテルのゴミ棄て場の路地に向ったむさくるしい部屋に寝かされていた。それでも脅迫に脅かされている土地ではどんなホテルのマネージャーでもこれ以上の世話をする勇気がなかったろう。ジョン・ライフは致命的な重傷を負っていた。診察に当たった医者も「この傷は殺意のある人によってつけられた傷だ」と言っていた。

ローズが夫を病院に運んだとき、夫の頭蓋骨には七カ所の骨折があることがわかった。彼の右半身は麻痺していた。数十日のあいだ彼の生命は生死のさかいをさまよっていた。遂にライフの肉体と精神は勝ちを制し、彼はベッドでからだを起すことができるようになった。まだからだは多少震えてはいたが、しきりに闘争の世界に戻りたがっていた。

十分静養の後、彼は闘争の世界に戻った。

翌一九四九年の一月、「鉄鋼労働界」は非常に遅ましい顔をしたジョン・ライフの写真の下に次ぎの記事を掲げた——「『彼らは私が死んだものと思いきんで私を棄てて逃げたが、私の精神はいささかの傷も受けなかった』統一鉄鋼労働者組合国際代表委員ジョン・ライフは南カロラ

イナ州コロンビアで暴漢に頭蓋骨をつぶされ、からだ中に鉛棒と棍棒の乱打を受けた模様を語った。

彼は自分の仕事を再びはじめるだけの気力はとり戻していたが、殴打を受けた後は遂に完全な健康に戻ることはできなかった。

ジョン・ライフは四十三才になったばかりであったが、彼にはもはやわずか十年の歳月しか残されていなかった。そのわずかの歳月は叡智と実践の新しい次元の中ですごされることになった。

第八章 行きづまりに押し流されて

第二次世界大戦の終るにつれ、共産主義の世界的攻勢はその歩度を早めた。主要な組合内の指導的地位に浸透し、堅実な指導者の地位を切り崩し、分裂を早めるような問題を誘発する彼らの戦術を見抜くことはむずかしいことではなかった。一九四八年フィリップ・マレーはその阻止を叫ぶ決心を固めた。

彼はその年のCIO大会で語った。「左翼の政策は、アメリカの労働界の利益を考えず、われわれの生活の中に、退歩的な独裁制を確立しようとする一つの党の目標と野望の中にわれわれを奴隷化するであろう。私はそういうことは絶対に望まない。CIOは絶対にそういうことは望んでいない」その年のうちにCIOは左翼に牛耳られている十一の全国組合を除名した。

そのとき以来共産党の戦術が変更された証拠はあるが、その目標は相変らずおなじことであった。今なおCIOの傘下にとどまっている各所の組合内部の主要な地位にもぐりこもうとする、

仮面をかぶった左翼の長期政策は明瞭に看取できた。それに比べると人間の道義的弱点を利用しようとする彼らのやり方はそれほど目立たなかった。——健全な組合の委員たちの妻君に匿名で電話をかけ、留守中の夫たちが組合の仕事以外の事をやっていると告げる方法——大会のあるたびにその辺にうろついて、ほかの組合員たちに度を過ぎた酒の飲ませ方をするいわゆる「気前のいい男」——女を利用できる場合には魅力的な女たちをはべらせるといふ単純な手段——品行上の弱味を暴露されることを恐れている男たちを恐喝したり圧迫を加える方法——買収したり墮落させたりするやり方——人間の虚栄心や野心に訴える賢明なやり方——うしろ暗い、或は無分別な商売上の取引に幹部の人たちを巻き添えにしようという奥の間での謀略——組合を分裂させる目的で指導者間の個人的対抗心をあおり立てる方法——そのほかジョン・ライフが後になってはじめて気づいた幾つかの方法も含めてさまざまな戦術が用いられているが、それらはおのおの原子兵器の秘密の盗み出しとおなじようにアメリカにたいする共産党の一貫した戦術の欠くべからざる一部門をなしているわけである。

そうした影響は仮面をかぶり、相手に疑われることなしにジョン・ライフにも働きかけはじめた。

殴打を受けてからやっと元に戻ったかと思うころ彼はそれまでより大きな責任のある地位に迎

えられた。一九四九年七月にバン・ビトナーが亡くなった。彼はしばらくまえから病気だったのである。亡くなるわずか十日前ジョンとローズはフロリダのデートナ・ビーチで、幾分か快癒に向っていたビトナーを見舞った。ジョンはバンが全快するだろうという空頼みを棄てなかった。

彼の死去の報が伝えられたとき、ジョンは悲嘆に暮れた。「ああローズ、バンは亡くなった」ということばしか彼の口から出なかった。彼は棺の付添い人となるためビッツバーグに出かけた。

ジョンは間もなくこの偉大な指導者の肩からおろされた重任を自分が担っているのに気がついた。ビトナーの後継者であったジョージ・バルダンチは数カ月後、自分自身の織物労働者組合に専念するため辞職した。一九五〇年フィリップ・マレーはジョン・ライフを南部組合組織運動の指導者に任命した。一家はアトランタに引越した。

ジョンが回復期にあった数カ月のあいだ、ローズと彼はカリフォルニア時代にはじまった家庭内の融和の精神をとり戻そうとしてみた。しかし彼が再び仕事をはじめると、たちまち外部の圧力が戻って来た。闘争の要求は彼の家庭生活にその犠牲を求めはじめた。彼は遠方まで旅行したり、日夜家を外にしては夜の集会や、週末大会やピクニックで演説したり、家庭外の

多くの人たちの話に思いやりのある耳をかしたりしていた。

組合運動の組織者たちにとって家族と離れていることは、やむを得ない不運とあきらめなければならぬものであるから、ジョン・ライフの立場は決して珍らしいものではなかった。しかしわずかの人たちしか気づかなかつたが、共産主義はアメリカの労働界内部の大勢の人々の個人生活にますます強力な、破壊的な影響を与えていた。そしてジョン・ライフもその影響を受けた一人であった。

以前はそうした影響力にたいする防壁の役割りを果たしてくれていた心を満すような家庭生活の与える保護とも言ふべきものが現在の彼には欠けていた。ジョン・ライフは荒くれた性質の荒くれた人間であった。彼はたやすく自分自身の情熱のとりこにもなつたし、またほかの人たちが彼の前に並べた誘惑のとりこにもなる人間であった。彼のまわりに働きかけている卑劣な悪だくみを識別する力もにぶつて来たし、ほけても来た。不節制はさらに不節制をよんだ。時には彼は一日で半ガロンのウィスキーを飲みほした。同志の一人がこう言っている。「幾週間もぶつづけに彼がどこへ行つてしまったのか。何をやっていたのか。私たちには見当もつかないことがよくありましたよ」

後になってライフは、医者をやっている友人とそのころ、昼食の席で喋つた話をしていた。

「『ジョン、君は大酒を飲むのかい？』と医者が私に尋ねたんだよ。そこで私は答えてやったさ。『そうだね、先生、大酒を飲むとは言えんと思うね』」

すると先生が尋ねた。『一体一日に普通はどれほどウィスキーを飲むんだね？』そこで私は、『そうだね、私にとって普通の日だったら、まず半ガロンのウィスキーを飲んでしまうさ』と返事した。すると医者は『君は仕事をしているのかね？』と尋ねた。

私は『そうだ、私は自分の仕事をつづけているさ』と返事した。すると医者曰く、『やれやれ、私ならそんな君に働いてなんか、もらいたくないものだね』だとさ」

ジョン・ライフはそれまであれほどの心の平和や、家庭の幸福や、職場の成功や、人生の目的をもたらししてくれた生き方にとさら背を向けて暮していた。

折にふれて、ライフ一家があらためてMRAの力に接触して暮すことができそうな事情が生じた場合、希望の光がさしこんで来ることもあった。その方面の友人たちから時々はたよりも来たし、訪問も受けた。今でもフランク・ブクマンからはいつもきまったように手紙が送られて来ている。

しかしジョンは自分が正しいと知っている生き方からそれて暮していることを知り過ぎるほどよく知っていた。あの楽しくて、平和で、しかも仕事を実を結んでいた年月のことは忘れること

はできなかつたが、彼は自分で「ポーカーの賭け遊びにふけり、ウィスキーにひたり、女の子を追ひ回していた」と称していたような個人的、道義的妥協の生活に落ちこんでいた。若い時代に眞実な生き方をしていたことも、もはや忘れがちになるのであった。

彼がかつて他人のためにそそいだあれほどの深い思いやりの心さえ今では上べだけのものになりさがってしまった。もちろん今でも彼は仲間が手を貸してくれと言つて来ればいつだって助力は惜しまなかつた。しかし彼とローズがかつて他人の必要を満すために生きていた場合に経験したような喜びと満足は失なわれてしまったように思われるのであった。——しかも永遠に。

再びいわゆる「組合未亡人」となったローズはただあて推量しては心配しているだけで、ほかにはどうにもしようがなかつた。家庭のさびしさと頼りなさに耐えかねて、彼女は家庭外のいろいろな趣味に心をまぎらわすようになった。ファッション・モデルになることもその一つであつた。彼女はこう言っている。「この仕事は私には夫にかたき打ちしながら自分のはなやかな生き方を見つげ出す一番早道のように思われました。私が痩せるためにブラック・コーヒーと、レタスの葉とグレープ・フルーツしか食はず、しかもたてつづけにたばこばかり吸っていることがどんなにあの人をいつも怒らせていたか知っていましたわ。私は夫を怒らせるのを楽しみにしてくらしていたのです」

もちろんジョンがあれほど家を留守にばかりしていたことは、彼女にとってはつらいことだったにちがいない。それにしても彼女はますます自分を見じめと思い、夫を恨む自分だけの世界に慰めを求めるようになった。長いあいだ留守にした後でジョンが家に帰って来る場合、自分を見じめだと思ふローズの憤りは爆発して、ひどく怒ったり、不満を並べ立てるのであった。ジョンは時には言い返ししましたが、それより口をきかないでいるほうが多かった。

ジョンの帰宅はますますみじめで、短く、回数も少なくなつて行つた。家を出て一人きりになると彼は過去の喜びも現在の不幸も忘れようと無理につとめた。時には仕事にもっと精を出したほうが逃げ道になると思われることもあった。大ていの場合にはウィスキーがそれより容易な逃げ道を与えてくれた。

自分の夫と家庭がいまどういふふうになっているか、ローズもまたはつきり知つてはいた。しかし誇りと怒りが彼女の精神をとりこにしてしまつていた。彼女は迫つて来る破局にたいする自分の責任を一瞬のあいだも考えてみようとはしなかつた——まして、今からでも自分がそれを避ける手段を講じうるなどとは思つてもみなかつた。

二人のあいだが遂に裂けてしまうだろうということは避けられそうもなかつた。一九五二年の春、ジョンは、フィラデルフィアに開かれたCIOの大会に出かけて行つた。ローズは自分ひと

りで思い立って彼の後を追った。フィラデルフィアで二人は再びM R Aの友人たちと出会った。しかしジョンにとっても、ローズにとっても、もとの道に戻ることはむずかし過ぎるように思えた。

大会後、離婚の相互的申立書が提出された。また一つの悲劇がアメリカの破綻した家庭の数に加わろうとしていた。

しかし六月には彼女自身の恐れや憤りよりもっと強い何かの力におされ、また娘のバーバラやフッカーにもせがまれたので、彼女はM R Aの大会が開かれていたミシガン州マキノ島へ出かける決心をした。ジョアンナとバーバラが同行した。

ライフの家庭の危機には長引いている全国的な鉄鋼ストライキという暗い背景があったわけがある。ローズがマキノに着いたころ、アメリカの鉄鋼工業はすでに四週間麻痺状態にはいつていた。一九五二年のその夏には朝鮮事変も頂点に達した。国としてもこのストライキで結局犠牲になった鉄鋼生産千九百万トンの損失に困りはてていた——この数字はイギリスの鉄鋼の年間総生産高を上回るものである。そうは言うものの労使団交の席上では、ちょうどライフの家庭の場合とおなじように、戦闘態勢をととのえた人間の意思が作り出す問題は解決できそうにも思われなかった。

マキノの大会でローズは信仰をとり戻した。もし自分がジョンを責めることをやめ、自分たちの結婚の破綻の責任を自分で負うなら、まだ希望がつけられるということにローズは悟った。彼女はそれまで自分が夫をなじった時のことをすべて考え、自分の嫉妬と猜疑心が時には夫を逆の方向に駆り立てたときのことを考えてみた。彼女は自分が今までいつも夫が変わるかどうか見究めようと片目でじろじろジョンのほうも見まもっていただけだということに悟った。夫が変わってくれなければ自分も変ってやるものかと思っていたわけである。今や彼女はそれでジョンが自分のところへ戻って来ようと来まいと、とにかく自分だけで徹底的に変わろうと決意した。

自分の心の中のこの闇にもうち勝ち、過去において自分が悪かった点もはつきり認めた彼女は、早速ジョンに会って自分のほうから破綻にたいする無条件な謝罪をしたいという強い衝動を駆り立てられるように感じた。それをするため彼女はアトランタまで千マイルの道を車で急いだ。

しかし、ジョンは鋼鉄のように動じなかった。「あの人の目は青い氷のように冷たかった」とマキノへ帰ったときローズはさびしそうに言った。

しかしながら彼女の謝罪の力はすでに夫の心を動かさしはじめていた。彼女のほうで知らないだけのことであった。「大きな扉だって小さなちょうつがいでも動くものだからね」とローズは誰か

がそう言ったことばを耳にした。ジョンの目の中には「青い氷」がたたえられていたかもしれない。しかしローズが訪問した結果、曇っていた自分の心の中に、一つの道を示しているほのかな明りがいやおうなしに彼にも見えはじめて来たのであった。しかしジョンにとってはただ何か希望がありそうだという漠然とした肯定的な気持を感じただけに過ぎなかった。ジョンは妻の訪問で少しは自分の心が動かされたなどいうことは、ローズにたいしては勿論、誰にたいしても、自身身にたいしてさえ、打明けたくなかったことだろう。

しかしローズの行動がジョンの心に、やがては二人の家族全体にたいし——そして国にたいしてさえ——大きな結果を生み出す原動力を再び目覚ませたことは時が証明してくれるにちがいない。

ローズの心はまだ重かったが、彼女はたとえジョンやそのほかの誰がどんなことをしようと、自分はいくまで自分が心で正しいと確信している生き方をしようという決心にかじりついていった。

第九章 一九五二年の鉄鋼大ストライキ

そのあいだ鉄鋼ストライキはつづけられた。自分はその場には居合わせなくとも、ローズはその闘争の出来事の一つ一つをくわしく、こまかく見まもっていた。特に彼女はフィリップ・マレーの肩にかかった責任の重さをたえず考えずにはいられなかった。

もしすでにピッツバーグに行っている自分の夫が、かつて見せたような力と叡智と信念を持ってマレーを助けることができたとしたら、と彼女は考えてみるのであった。こんどの失敗はジョンだけではなしに自分の失敗ということになるのではないだろうか？ 破綻を来たした家庭生活と国家的な破綻とのあいだに密接な関連があるという認識は恐ろしいほどの真実性と力を持って彼女の頭に迫って来た。かつての彼女は何かという恐ろしい失敗をくり返したのだろうか——ジョンに対して、家族全体に対して、いやCIOやマレー氏に対してさえ、さらに国に対しても彼女は間違いをしてきたのだ。彼女は心の奥底で、今や、自分がかつて故意の毒舌や嫉妬によって、

夫の信念を打砕いた代価がどんなに大きなものであったかということに直面しなければならなかった。

さまざまな出来事が彼女に思い出されて来た——ただジョンを傷つけてやりたいというだけの理由で、高価な服を買ってひそかに復讐したいという気持で次々と店をさがし歩いたこと——ジョンの陰でしばしば不平を鳴らし、ジョンの信用を落してやるために彼の組合の同僚にさえ不平を並べたことなど。一九五一年にはアトランタで彼女はジョンが男同士でポーカーの勝負をやっているところを見つけたことがあった。彼女は無理やりにその勝負に割り込み、つづけているうちに二百ドル負けてしまった。ジョンがかんかんに腹を立てると彼女は心の中でひそかに快哉を叫んだ。そんなことや、そのほか数々のあさましい思い出が彼女の胸におし寄せて来るのであった。

今や彼女は全部の責任を身に引き受け、自分から変わる第一歩を踏み出したという真剣な気持から、今まで長い年月の自分の恥ずべき過去の償いをするため、自分の出来ることで何かこれ以上の手段がないものかどうかと考えてみるのであった。しかし何らの手段も残されていないかった。彼女はやってみた。真剣にやってみた。しかしジョンからは何の反応もなかった。そうだ。彼女はもうこれ以上どうすることも出来なかった。

しかしまだ残された道があるのではなからうか？

フィリップ・マレーはどうなのだろうか？ 自分がジョンの妻として背信的であったことはそのまま、労働運動にたずさわっている人間の妻としてフィリップ・マレーに背き、労働運動界に背いたというのが真実なのではなからうか？ それほど簡単な恐ろしいことだったのである。そのことについて何か手をうたなければならぬ。ところでどんな手があるだろう？

ある朝早く静聴していたとき、ふとある考えが彼女の頭にうかび、彼女をはっとさせた。あまりにも大胆な思いがけない考えであった。

彼女はそれを書きつけてみた。「ピッツバーグへ行ってフィリップ・マレーに会うこと——それも今すぐに」

彼女はそれを読んでみた。ばかばかしいようにも思われた。女がただ一人で出かけて行って、全国的ストライキという広い地域にわたる活動をしている百万人の鉄鋼労働者を指導している人に果たしてあえる希望があるものだろうか？

朝食の席上で彼女は控え目にその考えを数人の友だちと話し合ってみた。彼女は、国家的に行き詰った状態をやはり真剣に憂慮していたブックマン博士と相談した。

彼女にどうすればよいかなどとは誰も言わなかったけれども、彼女が相談を持ちかけた相手は

誰も彼も彼女の到達した確信に激励を与えてくれたように思われた。

そこでいよいよ彼女の決意は固められた。彼女は友だちのチャールズ・ヘインズとその妻マージョリ、及びダンカン・コーコランと一緒に行ってくれないかと誘った。数時間のうちにその四人はピッツバーグに向って出発した。

四人はストライキの五十日目にピッツバーグに到着した。全国民の気分は極度に興奮していた。鉄鋼労働者賃金政策委員会の百七十五名の全委員はウィリアム・ペン・ホテルで会合していた。その中にジョン・ライフもいた。

ローズはジョンから朝食を一緒にして話をしに来ないかと招かれたので勇気づけられた。長い朝食であったが帰って来たときの彼女はしおれかえっていた。彼はローズの新しい決心を喜ぶものの、自分としては何ら気持を変えていないということをはっきり言いきったからである。再び彼女の決意は試練にかけられた。

その日彼女はフィリップ・マレーの秘書であり、自分の昔なじみでもあったアン・ベネディクトと昼食を共にし、マレー氏に面会したいという希望を申し入れた。ミス・ベネディクトはローズに、後でマレー氏の事務所へ寄ってみたらどうかと言ってくれた。彼女が行って見たら運よくマレー氏は暇だった。彼は暖かくローズを迎えてくれた。そこで彼女は最近の自分の確信と決意

を彼に話しはじめた。

国内の各地からかかって来るストライキ関係の電話で数分置きに中断されながらも、マレーは彼女が夫の仕事の能率を低下させたことにたいする、自分の罪を謝罪する話に熱心に耳を傾けていた。彼女は南部の組合組織運動の要求がジョンを奪って行ったとき自分が怒ったことや、疑惑が舞い戻って来たこと、それもはじめのうちは見当ちがいのものが多かったが、そのうちにますます自分の方が正しいと思ひこみ、再び毒舌で彼をいじめたことなどを話した。しまいには組合の新しい仕事か夫を呼び出すことに自分はそれにたいしてあからさまな敵意を見せるようになったことなども打明けた。組合の役員の妻が夫を働きにくくするような場合があるとしたら、自分こそそういう妻であったとローズは物語った。

さらにつけ加えてローズは、今まで自分はジョンの誤ちを叱ったり責めたりばかりしていたが、最近マキノへ行ってみて、夫が南部で割当てられた骨ばかり折れ思うようにならない仕事から家へ帰って来たとき、もし自分が思いやり深く優しく迎えてやったら夫が元気と勇氣をとり戻すことが出来たかもしれないのに、自分がそうすることを怠ったことにはじめて気がついたことも話したのであった。

結論として彼女は、近頃自分は毎日のように自分の心を深くみているうちに、自分はただ夫に

たいしてだけではなしに、ライフの家庭の危機の噂に心を痛めてくれているマレー氏のような友人たちにたいしても、自分の力の及ぶかぎり誤ちを正していかなければならないという固い決心をしたことを伝えた。

彼女が話しおわるとフィリップ・マレーは静かにうなづいた。「ローズさん。こういう話を私にして下さったことに礼を言います。ほんとうに心を打たれました」と彼は言った。やがて彼は微笑をうかべてこう言った。「あなたが夫のほうの間違っていると思っっているさいに、どんな点においても夫に手をさしのべようとしなかった気持は、ちょうどいま鉄鋼会社側にたいして私たちの置かれている立場とそっくりそのままです」しばらく沈黙がつづいた。やがてマレーは考えこみながら言った。「ローズさん、あなたの話してくれた道は全く新しい道です。M R A は『骨なし』どころじゃないですね、これこそ本ものですね」

ローズがやがて帰ろうと立ち上ったとき、マレーはドアまで彼女を見送ってくれた。彼はさよならのことばをこういうふうに言った。「ローズさん、これからたびたび折衝しなければならぬ私のために祈って下さいませんか？」

ホテルに帰ったときローズの心は不思議に軽かった。彼女は自分に示された簡単なことを全部実行した。そして彼女の信仰は強められたのである。

すでに五十日目を過ぎたストライキの問題となっている主要点は打開できないほど不可能とは思えなかった。鉄鋼経営者側の中にはすでに暗黙のうちに組合側の大半の要求を妥当と認める人たちもあつた。しかし、双方が今まで各自のとなつていた強硬な態度をすてようとしなことが、この数週間、国の最も重要な産業を膠着させてしまったのである。

「ニューヨーク・タイムズ」はこの長引いたストライキを回顧してこう評している——「一つの大きな要因は、第二次世界大戦以来三たび長引いたストライキをやっているうちに鉄鋼労使関係の中に次第に生じて来た苛酷さと不信とであつた」

国内の各地から来た鉄鋼労働指導者たちがウィリアム・ペン・ホテルで会合している一方、通りを隔てた反対側のUS鉄鋼会社の事務所には鉄鋼界の最高経営陣が陣取つていた。この二つのグループを隔てていたものは道路の中と闘争のいがみ合いだけに過ぎなかつた。折衝当事者たちはその二つのあいだを往復していたが明らかにむだ骨折であつた。

この行き詰りを打開するに必要なものは何らかの新しい要因であつた。一九五二年七月の最後の一週間が始まるまで、まだアメリカ全体を困らせていたこの悲劇的な行き詰りに終止符を打たせようとして働いていた建設的な力がどれほどあつたかは完全には判らずに終るだろうが、その鍵は少数の人たちの手に握られていたのであつた。

ジョン・ライフは統一炭鉱夫組合の初期の時代からすでにフィリップ・マレーを知っていた。彼は自分の指導者がどんなふうな人間であるか知っていた。彼はまたにがい経験からストライキというものが労働者の妻や家族にもたらす苦勞や困窮ぶりも知っていた。こうしたものがフィリップ・マレーの大きな思いやりのある心にどんなにか重くのしかかっていることであろう。ジョン自身の心の中には闘いを勝ちとるまで自分の先輩を助けるといっただけではなしに、解決への道を開くことのできる何らかの啓示的な手段をさがす手助けをしてあげたいという望みがいよいよ募って来るのであった。彼の心は知らず知らずのうちにアトランタで最近ローズが謝罪したこと思い返していた。何だか妙な気がするが、ローズが訪ねて来てからのことを考えてみると、自分の暗い失望と皮肉な心の幾分かが晴れ上りはじめたことを認めないではいられなかった。事実彼はすべてのものごとにたいし今までよりはるかに気持よく感じるようになったことを突然悟った。現在の国家的な行き詰りを打開する何らかの新しい糸口をさがすということは彼が心の底から願っていることであった。

現在の情勢では「何が正しいか」ということをもう少ししよけいに、そして「誰が正しいか」ということをもう少し少しく考えることがこの非常事態から大きな奇蹟を生み出す助けになるかもしれない、と彼は思いめぐらしてみた。経営者側と鉄鋼労働者側を分裂させている係争点はもは

や純粹に経済的なものでなくなつたことを彼は見てとつた。不一致のもとになっている具体的な点は「ユニオン・ショップ」のそれでさえ、それ自体では余り小さ過ぎる問題であつた。両者のギャップは違つた領域にあるわけである——つまり強情、誇り、猜疑心、憎しみの伴う人間の意思の衝突する領域にあるわけである。それは人びとの心の中にある精神的な問題であり、それは新しい精神的風土を作り出さないかぎりとうてい解決できないものである。

利害の対立する代表者たちが一度も顔を合わせることも、人間対人間として会うこともなく、ただ任命された交渉係を通じてしか交渉していかないような場合は、分裂をおこし破壊的な結果を生む相互の憎しみの感情は避けられないものであることをジョン・ライフは悟つた。こうした事情のもとにおいては各自の側が相手側の言動すべての動機についてたえず最悪のものを臆測するような立場に立つてしまふ——事実そのとおりのことが行なわれて来た。

新しい一連の考えがジョン・ライフの心に湧きはじめた。今までと全く違つた解決の線を持ち出したなら、フィリップ・マレーはそれに応ずるかもしれない。フィリップ・マレーの性格から考え合せてみると、ライフはそれができるにちがいないという希望を持った。いずれにしても事態が今までよりぐつと悪化するとは到底考えられなかつた。

ジョン・ライフは適当な時機を待つことに決めた。もし建設的な手段をとるに都合のよい時機

が到来したならば、自分は直ぐにその時機をつかまえてやろう。

七月二十一日の月曜日の各朝刊紙は行き詰りにいまだ何らの急変もないことを報じた。その日、鉄鋼労働者組合の賃金政策委員会の全委員会で、どの道も塞がれているように見えていたとき、一枚のメモがフィリップ・マレーの手もとに回されて来た。彼はそれを読み、しばらく考え、やがて静かに顔を上げてメモの主になづいた——相手はジョン・ライフである。そのメモには各鉄鋼会社の社長たちをその日の午後の自分たちの集會に招いて合流してやったらどうかという革命的な提案が書きつけられていた。マレー会長は直ちにその提案を票決にかけた。可決である。鉄鋼工業界の指導者たちを招請する手はずはすぐさまとられた。

ウィリアム・ペン・ホテルの十七階で、経営者側からの即答が来ないままで一分一分がのろのろ経過して行くあいだ、鉄鋼労働者側はワイシャツのままピッツバーグのむし暑さにうだっていた。突然廊下にあわただしいざわめきがあった。四人の男がエレベーターから出ると新聞社のカメラはフラッシュをたいた——US鉄鋼、ベツレヘム会社、ジョンズ・エンド・ラフリン会社の最高首脳者たちである。彼らが鉄鋼労働者の部屋にはいると期せずして拍手がこだました。

経営者たちは一時間半にわたって自分たちの立場を述べた。

翌日この會合は全国の新聞のトップ記事として扱われた。

「ニューヨーク・タイムズ」の七月二十二日版はこう伝えている。

「鉄鋼界の経営者たちが組合の集會に姿を現わしたことは鉄鋼組合十六年の歴史にはじめての出来事である。フィリップ・マレーの提案により政策委員会は業界の代表者たちを午後の會議に出席してもらおうよう招請することを議決したが、彼らが受諾するとは誰しも予期していなかった。

三名の委員がホテルと街路をへだてたUS鉄鋼会社の本部に使者として送られ、業界の指導者たちはその招請を相談してみようと約束した。ステイファンズ氏は委員会を電話で呼び出し、自分と自分の同僚たちが出向いて行くことを伝えようと思った。會議で電話が全部ふさがっていることを知った社長たちは帽子をかぶり、出かけて行って予告なしにホールへはいった。

彼らのはいって来るのを見るや否や、驚いた組合側の人たちは喝采と拍手でそれを迎えた。マレー氏は微笑しながら、めいめい上衣をぬいで会場にこしをおろそうとしていた四人の一人一人と握手を交わした」

ピッツバーグの「ポスト・ストリート・ガゼット」もやはり七月二十二日版で報道している。

「組合の集會に……業界の代表者たちが不意打ちの訪問を行なったということは、鉄鋼工業界の労使関係に良い先例を残すものである

経営者たちの短時間の話は現在の行き詰りにこれと言うほどの変化をもたらすことはできな

ったが、彼らが姿を現わしたという事実が、長期にわたるストライキのかもしれないし出した緊張といがみ合いの幾分かを吹き飛ばしたことは、第三者にも明瞭にわかった」

七月二十二日、ジョンズ・エンド・ラフィン会社の会長ベン・モリイル提督は前年マキノのMRAの大会で会ったチャールズ・ヘインズとダンカン・コーコランを昼食に招待した。昼食のあいだにヘインズとコーコランの聞いた話によれば、経営者側がマレー氏の招請を受諾したことを鉄鋼労働者側に伝えようとしても出来ないでいたとき「さあ、君たち、帽子をかぶって歩いて行こうじゃないか」と言ったのはモリイルだったそうである。

昼食がすんでからモリイルと、ヘインズとコーコランはストライキの情勢全体について静かに心の奥底の声に耳を傾けた。やがてモリイルはこう言った。「私は二つのことを考えました。第一は、私の経験を通して信じているわけだが、正しさが全部一方側にだけあるということは絶対にあり得ないということです。一つの提案をそれが労働者から出たものだというだけで、突っぱねることは正しいことではない。第二に、直接にストライキと関連してではなく、産業界全般に何か新しいものを作り出すということで、私たちはフィリップ・マレーと何らかの関係を打ちたてるよう努力しなければならぬということです。私たちは国全体のために労働者側と共に生き、共に働くようにならなければならぬし、それをするためには私たちはいがみ合いと猜疑心

を棄てるようにしなければならぬと思ひます」

それから二十四時間後、モリイル氏は経営者側の最後の首脳者会議に臨むため東部に赴き、それがすんだ後でトルーマン大統領はフィリップ・マレーと、US鉄鋼会社会長ベンジャミン・フェアレスの二人をホワイト・ハウスに招いた。

七月二十四日の木曜の午後、フェアレスとマレーは協定に署名し、握手を交わした。ストライキは終わった。

翌朝七月二十五日、解決に到達するまでの事情を述べて『ニューヨーク・タイムズ』は次ぎのように報道している。

「先週の月曜（七月二十一日）鉄鋼経営者側の四名の首脳部は組合の貨金政策委員会のピッツバーグ会議に姿を現わした……彼らはその委員会を動かすことには不成功ではあったが……経営者側は会議の気分を和らげ、それが今日の解決をもたらし一助となったわけである」

七月二十七日の日曜日の「ニューヨーク・タイムズ」は最後の会合の模様を次ぎのごとく伝えた。

「フェアレス氏とマレー氏は七十分間私的に会合し、再びその後各々の随員たちと会合した。フェアレス氏は次ぎの意味のことを述べた。『私たちはお互い同志の話し合いに全く新しい手掛り

を持たなければならぬと思います。確かに何かが間違っているのです……私たちはいっしょに仲よくやって行く道を学ばなければなりません』……マレー氏はそれとおなじような主旨で答え、組合はただ単に経営陣に損害を与えることに関心を寄せているわけではないと言った。やがて両者側は直ちに協定の条項を一つ一つかたずけて行った。

業者側と組合側の第一人者たちが表明した精神こそ……彼らが一つの解決方式に到達し得た主要な原動力となったものであり……二十四時間以内に君たちはストライキを解決しなければならぬ『さもなければ』というホワイト・ハウスでのトルーマン大統領の警告は、それにくらべたらはるかに小さな要因でしかなかった、と言っても言い過ぎではない。

大きな変化は心理的戦線に起ったのであった。マレー氏はフェアレス氏が、US鉄鋼会社は強力な迫力ある組合を重んじていることを労働者各自に、はっきり判らせるような共同計画を發展させることに、純粹に関心を寄せているし、また労働者側、業界、国家の凡てに利益を与えることを意図した手段にたいし、組合側の助力を願っているのだという印象を受けたのであった。

この解決に必要なものはこれだけである。お互いの善意を信頼するということを頼りにして、二人の指導者は急速に協定に到達することができたのである」

そのあいだにローズ・ライフはマキノ島へ戻っていった。彼女と友人たちがミシガン州を通過して北に自動車を走らせていたとき、彼らは五十五日もかかったストライキが解決したことを車のラジオで聞いた。大きな扉というものは小さなちょうつがいでも動くものである、と彼女はもう一度考えてみた。その扉がどんなに大きいものであったか、彼女はただ想像してみるよりほかなかった。

第十章 一人の男を勝ちとるために

それから数週間後ローズ・ライフはアトランタの家に帰るため再び千マイルの自動車の旅に立った。今はもう十才になったジョアンナがいっしょについて行った。家ではローズの母親ミセス・スタインが二人を迎えてくれた。ジョンもやはりアトランタに帰り、ホテルに泊っていた。

しかし最初の夜、彼はジョアンナに会いにやって来た。彼は落着いた様子はしていたが、自分で張りめぐらしたくもの巢に引っかけかかってぬきさしならぬといったあり様であった。そこから逃げ出すことは不可能のように思われもした。

彼はまだ離婚をしておまおうという決心は変えていなかった。ある日の朝、離婚の書類がローズのもとに配達された。彼女はいくらか躊躇した後でジョアンナに打ち明けた。

十才の子供というものは家庭生活がうまく行っていないようなときには案外深い思いやりを持っているものである。マキノにいたころ、ジョアンナは母親の見いだした生き方の幾分かをひと

りでに学び取っていたので、今こそ自分の父を助けたいと思った。

その日の夜ジョンは晩飯をご馳走になりに来るかもしれないと言っていた。彼が来ることを考えてみると、今夜の首尾に懸っている問題はあまりにも大きかった。ローズは自分の無力をしみじみ感じた。自分に何か大きな叡智の必要さを彼女は感じた——自分の力以上の大きな叡智が。

マキノで彼女は「人間が耳を傾けるとき、神は語る」という真理を体得していた。今こそその真理を試すときではないだろうか。彼女はジョアンナを眺めた。そうだ、いま母と娘がいっしょにすわって、二人でジョンにどういふ話をしたらいいか静聴してみたらどんなものだろうか？

二人はいっしょに腰をおろした。沢山の考えは湧いて来ないように思われた——ほんのわずかだけである。二人はそれを紙に書きつけた。ジョアンナが父親の心の扉の鍵になってくれるだろうというのがローズの主として考えていたことであった。

ジョンは遂にやって来た。二人は彼をもてなした。晩飯を食べながら彼らはいろいろのお喋りをした。ローズは自分の心にさきほどまで感じていた心配や自己意識過剰がすっかり消えているのに気がついてびっくりした。静聴のため静まったさきほどの時間が、ともかく彼女に穏やかな、心の平和を与えてくれたことは確かである。ジョアンナもまた嬉しそうにしていた。晩飯が終りかかると小さな娘は言った。「パパ、わたし今日の夕方パパのためにガイドダンスを持った

の。パパはいま浮砂の上にかかったぐらぐらした橋の上にいるのよ。でも向う側へ渡って行けば固い土の場所へ出れるの。パパは急いで向う側へ行かなきゃいけないわ。だって神さまは待っていて下さらないもの」これは彼女がさっき書きつけておいたことばであった。

ジョンはその明快な子供の考え方にびっくりした。娘のことばを聞いて彼はいろいろのことを考えさせられた——自分の生活の目茶苦茶さや、心の中で自分が再び待ち望みはじめた解決の方法や、あらゆる方面の道義的妥協を打ち破るために、必要な決意のことなど。

彼は娘の顔を眺めた。「お前の言うとおりだろうと思うよ」と彼は言った。

ジョアンナはことばをつづけた。「パパがいないととてもさびしいのよ。パパに家へ戻って来てもらいたいわ。ママはもうずいぶん人が変わったし、家の中もいろいろ違って来ているのよ。家へ帰っていらしてパパがご自分の目でごらんにならないければ、お判りにならないと思うの」

「お前のママが私に帰って欲しいかどうか私にははっきり判らないんだよ」と彼は言った。それからこうつけ加えた。「実は私もいろいろ考えているんだ。明日そのことをお前たちと相談してみたい。マリエッタでちょっとした会食と大会があるから、お前たちにも私といっしょに行つて欲しいと思っているんだ」

帰るとき彼は優しい笑顔でジョアンナにはっきり話をしてくれた礼を言った。

夜中の二時半に電話のベルが鳴った。ジョンからだった。彼は息子のエステイズのことが心配でたまらないうとローズに言った。いまフロリダ州のタンバで労働組合のオルグになっているエステイズがビールスの感染で病院に運ばれたのであった。

彼はいつも長男のことは真剣に心配していた。それは恐らく長男の性質が自分にそっくりだったからなのかもしれない。小さいときからエステイズは継母のローズにはどうしてもうちとけにくいと思っていた。一九三七年に父は再婚したが、彼は父の新しい妻をつめたい目で見つめていた。一九四〇年頃の家庭の融和した雰囲気の中で、少年の心の傷も癒えはじめたことは事実であるが、腹違いの弟フッカーとは仲よくやっけて行けても、ローズにはどうしても心からなじめなかった。

いま一九五二年のこの真夜中、ジョンはエステイズのことが心配でとても眠れそうもなかった。そこで、ローズに電話しているうちに彼は突然、マリエッタの会食の後でローズとジョンナも自分といっしょに飛行機でタンバへ行かないか、と思いがけないことを提案した。ローズはその場で承知した。

マリエッタとタンバへの旅は変わった旅であった。彼らは自分たち三人の胸に一番気にかかっているたった一つのことを除いて、いろいろなことを話し合った。しかもエステイズの見舞は大成

功だった。そして彼がもう危険状態を脱したことがわかったので彼らは家へ帰ることに決めた。

しかしタンバの飛行場に向って三人が帰途についたとき、ローズは勇気を奮い立ててジョンに、こんどは具体的に、過去において自分のどこが間違っていたかくわしく話し出した。ジョンはじっとそれを聞いていた——実にもの静かにそれを聞いていた。

アトランタに着いたとき、ジョンはいっしょに晩飯をやらないかと言ひ出した。ジョアンナはすっかり喜んでしまった。食卓で娘は急に顔を上げて、父の顔をのぞいた。そしてこう尋ねた。「パパ、わたしたちがこないだお話したこと、あれからお考えになった？」

ジョンはしばらく黙っていた。やがて彼はゆっくり、手短かに答えた。「ああ、考えたよ、なとかして家へ戻る手配はできると思う——もしお前たち二人とも私に帰って欲しいのなら」

ジョアンナは飛び上り、テーブルのまわりを走って、父に接吻した。彼はローズに向って言った。「ママさんもそれでいいのかい？」ローズは手を伸ばして彼の手を握った。

すばらしい瞬間であった。もうそれ以上何も口をきく必要もなかった。ジョンの心はこの数週間のことを思い返しているうちに不思議に穏かになって来た。自分の心にどういふ変化が起きたのかあまりよくは判らなかつた。その時は、はねつけたのであつたが、ローズが謝罪したのが転機となつたわけである。

ジョン・ライフは誇りの高い人間であった。謝罪などされてはたと当惑したのであった。だからあのときは何も言わなかったわけである。

しかし彼は謙虚な女を恨んだり、いじじになってやりこめることの出来るような人間ではなかった。気をもんでいる謙虚なこの女は実際新しい別の女のようなようだった。彼女はライフの心の中にそれに応ずる気持を目覚ませたのであった。そのとき以来、彼がそれまで長い年月のあいだ感じていたかたくなさも、心の傷手も、絶望感も、次第に解消して行ったのである。彼は自分で意識的にその心の変化を助長するために大いに努力したと言いきれなかった。彼のとったただ一つ的手段——経営者たちのことでフィリップ・マレーに提案したこと——はこの上もなく建設的なことであった。しかしそのことは彼自身の生活の上で個人的な決意をすることは関係がなかったので、やりやすかったわけである。

今となっても彼はまだ自分自身の生活上の誤ちについては黙ったままではいたが、少なくとも自分の誤ちを正しく、公平に眺めはじめようになつた。この長い年月のあいだ、ローズはどんなに苦しい思いをして暮して来たことだろう——たえまのない家庭の心配ごとが自分の肩一つにかかっていたし、金銭上の苦勞のたえまもなかったし、彼の素行についていまわしい噂もいろいろ耳にはいつて来たし、最近は特に酒に溺れて家族に迷惑をかけたりのだから。もしも「婦

人と子供を虐待」という理由で家庭にビケットを張っていいものなら、彼の家庭こそそうした家庭であつたのだ。

自分自身の罪悪感はまだ完全に目覚めていたわけではなかったけれども、自分自身を恥かしく思い、妻と小さな娘がこれほどまで身を棄てて、ひたすら自分のことを心配してくれる気持には、これ以上反抗できないことを悟れないほどの我儘はもうはっきり棄てていた。

ジョンアンの願いに答えて家に戻ることを同意したということは、ジョン自身の誇り高い城砦が完全に降服したことを意味していた。

今この瞬間こそ、彼が今まで何が起っていたのかも知らず、自分がどこへ行くのかも知らない暗闇の中から旅路の終りにたどりついたようなものであった。いま彼は光明の世界に足を踏み入れたことを感じた——しかしどうしたわけか、まだ旅路が先きにつづいているようにも感じた。しかしこれからはもう一人旅ではないのである。彼はすでに自分といっしょに旅をしてくれる二人の道づれを得たのである。

ローズはまだ決して申し分のない寛容な人間になつたわけではないことを彼は知つた。幼いジョンアンもまだ手に負えないような場合もあつた。ローズの母親のミセス・スタインは、昔から彼と意見がいつも一致するわけでもなかつた。しかし彼は悪い面ばかり見てそこから逃げ出した

りなどしないで、自分の家庭の最善を見つめて、そのための闘いを再び一身に引き受けたのだと自分に言いきかせながら微笑した。

ところで家庭生活というものはいい加減の妥協の上に築かれてはならないもので、お互い同志の誠実と裸の心の上に築かれなければならないものである。ジョンは自分もそういうやり方をしようと決心した。彼はこれからまだ沢山のことを学ばなければならなかったが、いまの場合彼はそこまですか判らなかつた。

もちろん、このような破局の経験は持っているが、それにはたいする解決を見つけたというような家庭は、おなじような問題を持っている他人の家庭を助けることができるものである。

しかしそんないろいろのことは今のジョンには考えられなかつた。この瞬間はそれだけで十分なほど満されていた。しかもジョンはフィリップ・マレーと会うためにピッツバーグまで旅行しなければならなかつたので、家庭へ戻るといふ目の前の計画さえ延ばさなければならなかつた。

それから二日たつてからフィリップ・マレーとジョン・ライフは二人きりでマレーの事務所に向い合っていた。二人は最近のストライキのことを検討していたのであった。突然フィリップ・マレーはこう言った。「ジョン、君は知っているかしら。あの日、私はローズさんの訪問を受けたのだが、あんな経験は私にははじめてだったよ」ジョンはマレー氏が何を言い出すのか待って

いた。彼は言った。「ジョン、君の奥さんはすばらしい人間だよ、君は奥さんのところへ帰ったほうがいいと思うがな」

ジョンは答えた。「喜んで下さいよ。ここへやって来る直前、私たちはアトランタで、もとどおりよりを戻して、いろいろ相談しました。その前に私たちは重態だったエスティズを見舞いにフロリダのタンパへ行つて来たんですが、帰りの道でローズは、ストライキの始まったころ、マキノからアトランタへ自動車でやって来たときとおなじように、自分のそれまでの数え切れないほどの誤ちをどんなに申し訳ないと思つてゐるかということを私に話しました。ジョン・アンナも私たちといっしょにタンパへ行つたんですが、あの子は私に考えさせるようなことを言つてくれましたよ」

ジョンはなおも話をつづけた。「私自身にも大きな責任があつたと思つています。とにかく私たちは本当に、もとどおり一緒に暮すことに決めたのですから喜んで下さい。ローズはマキノ島で開かれたMRAの大会へ出てからというもの、心から変わろうと努力していることを私は信じています。離婚することはやめました」ジョン・ライフは顔を上げてフィリップ・マレーの顔を見た。マレーの目には涙が光っていた。

二人はCIOと国にたいして切望していることなどを話し合つた。ジョン・ライフにとっては

忘れられない思い出である。生前のフィリップ・マレーに会ったのはそれが最後であった。彼はフィリップ・マレーが話したことは、しかも感情をこめて話した一つの何でもないことばが一生
涯忘れられなかった。「ジョン、私たちがもし家庭の中の融和カミかできないようだったら、工場の中ミキシンの組合などとうていできるものではないよ」

ジョンは勇気づけられ、決意をいよいよ固めてホテルへ戻った。

その夜、彼はローズに電話した。「明日家へ帰るよ」と彼は言った。

翌日ローズとジョアンナは彼をアトランタの家に迎えた——彼の家庭である。しかもこんどは永久にであった。

長いあいだの心をはりつめた生活や別居生活の後で楽しい日々がつづいた。或る日の朝、朝飯を食べていたとき、自分の家族を見回しながらジョンはいかにも感慨深そうに言った。「お前たちみんなの心を痛めさせた私の過去のことを、自分でどんなに後悔しているかお前たちにお詫びしたいと思うよ。ローズ、この長い年月のあいだお前がどんなに苦しい目に会って来たか、神さまは知っていらっしやるだろう。しかしこのことだけは言っておきたい——お前がマキノからアトランタへ来たとき、私はお前にずいぶん冷淡な態度をとったね。それについて私はいまお前にお詫びするよ。そのころ私は何が何だか分らず混乱していたんだ。こんなことを言ってお前の慰

めになるかどうか判らないが、あのときから少しずつ気持が落着きはじめたことは事実なんだ。だからあのときのお前の長途の旅も結局は決してむだじゃなかったと思う」

ローズがまた昔のように集会や、会食や、大会の席にジョンの横に坐るようになったので、二人の友人たちはこの上もなく喜んでいた。

ライフの顔つきからして今までとは違って来た。彼がウィスキーを相手にしなくなったことは誰の目にもついた。「ジョン、飲まないのか？」とほろ酔い機嫌の知り合いの一人が尋ねた。

「飲まないよ」とジョンは答えた。「もう十日も飲んでいないが、前より気分がいいので、もう少しつづけようと思っている。今に君も酒が少しもよくないということに気がつくことがあるだろうよ」

ローズはアトランタで催された翌年のCIOの宴会に自分が再び出席したときのことを今でも忘れずに、こんな思い出を語るのだ。「ディナーの前のカクテル・パーティーで私は隅っここのテーブルでジンジャー・エールを飲んでいましたの。するとはじめは一人、それからつぎつぎと昔の友達が椅子を寄せて来て、みんなでジョンと私のあいだのいきさつを聞きたいと言いますのよ」

宴会の席でジョンは組合運動で働いていた大勢の人たちを紹介してから言った。「私の右に坐

っている女を紹介する必要もないと思うが「妻のローズだよ」一同は喝采した。ジョンはことばをつづけた。「私は妻に感謝していることを諸君一同の前で伝えたいと思う。今晚みなさんのご覧になられているとおり、私たちがこうしていっしょになれたのは妻のお陰なのだ。私はただ家庭においてだけではなしに、仕事の上でもどれほど妻の助力が私に必要であるか、自分にもはっきり判って来たのだ。それがどんな力になるものか大方の諸君にもお判りだろうと思う。

過去において私たち二人はずいぶんひどい喧嘩をして来たが、これから先はいっしょになって正しいもののために闘うことを妻にたいし、諸君一同にたいして誓いたいと思う」再び来客一同は心から喝采を送った。

和解の後の幾週間は、ジョン・ライフにとって決定的な毎日毎日であった。そこへまるで雷でも落ちて来たように歴史の突風が突然見舞って来た。それは労働界にショックを与え、国民の心をゆさぶった。それはジョン・ライフの心の奥底まで震わせた。それは彼の愛し、信じていた指導者フィリップ・マレーの死であった。一九五二年十一月のことである。

フィリップ・マレーという人はその姿がその場から消えて、はじめてその高くそびえていた全貌が人びとにはっきり認識されるというような、そういう岩山にも似た人格を持っていた。カトリックの信仰という土に深い根をおろしていた厳しい性格の持主であったため、彼はCIOの中

心ともなり、どんな試練、どんな緊迫した事態の中でも彼はその品性を堅持していたのであった。

フィリップ・マレーの亡くなった直後、ちょうどクリスマス前、ジョンは心臓の発作に見舞われて入院しなければならなかった。南カロライナで殴打されたときの打撲傷がいつまでもたたっていたわけである。病院で静かに横臥していたので彼には考える時間が十分あった。このクリスマスが彼の生涯の中で最も意義があるものになるということを本人はあまり知っていなかった。

病院の一室でクリスマス夜の夜、彼は横になっていたが目は冴えていた。彼の頭も心もさまざまな思いにいっぱいになっていた。彼は家庭を築き直したことをありがたいたいことだと考えていた。そのときフィリップ・マレーと最後に話し合ったことを思い出した。彼は労働界の開拓者たちの特徴である精神の尊厳と高貴さにみちあふれたフィリップ・マレーの生涯をつくづく考えてみた。彼は自分もほかの大勢の人たちとおなじように、フィリップ・マレーの生涯の単純ではあったが偉大な、さまざまな特性を、その一つ一つが自分に対する挑戦であるというふうに考えずに、あまりにも軽々しく考えていたことに罪悪を感じた。

彼はフィリップ・マレーが自分の信念を述べて、これほどまで自然の恩恵に豊かに恵まれているアメリカは、あまり恵まれていない国の国民たちを援助する道義上の責任があると言ったこと

を思い出した。しかもそうした援助は狭い意味の経済的・政治的目標のものであってはいけないのであり、それは国としてのヒューマニティの心のほとばしりと神の計画にたいする信念から出たものでなければならぬと言った。マレーの信仰はつねに彼に貧困は神の意思にそわないものだということを教えていた。職がなく、腹を空かした子供たちをかかえている男の姿は神の意図にたいする嘲笑であり、神は決してそのような計画されたわけではないとマレーは信じていた。

ジョン・ライフはよくこのフィリップ・マレーの信念と、フランク・ブックマンがいつか自分と話した新しい時代の構想とを結びつけて考えるのであった——つまり「空の手には仕事を、空の腹には食物を、空の心には本当に満足するような思想を満たしてくれる時代」のことである。

ジョン・ライフの考え方によればフランク・ブックマンとフィリップ・マレーの二人は或る種の偉大な特質を共通に持っていた。二人とも人びとにたいし、大いなる憐れみの心を持っていた。二人ともその心に多くの人たちの必要とするものを担っていた。二人とも人びとの中の最上のものが表に出るようには絶えず闘っていた。二人とも貧困、搾取、非人情を憎み、ほかの人たちがやむを得ないものとしてあきらめているそうした悪を世界から追放しようとする自分たちの一生涯を捧げていた。

そのクリスマスの夜はそうした考えがあらためて執拗に彼の頭から去らなかつた。ライフはビ

ツッパグで行なわれた葬式のことを思い返していた。その教会に集った数百名の指導者たちの中には将来のことを心配する者が多かった。フィリップ・マレーが居なくなってしまうば、彼の代りになることの出来るような人物は一人もいないのではないか。そこに来ていた大勢の人たちとおなじように、ジョン・ライフも自分はこの指導者の偉大な品性の幾分でも自分の身につけて、フィリップ・マレーの死によって残された空隙を幾らかでも埋める努力をしようとする自分に誓ったのであった。

どんな人物が、一人とは限らないが、あれほどの道義的指導の役割を引き受けるのだろうか？ マレーの性格にそなわっていたあれほどの道義的規範と、彼があれほどうまく指導していた組織団体に浸透していたあれだけの道義性を、一体誰がアメリカの労働界に与えるのだろうか？ それが一人の人間でできることだろうか？ それともそれだけの犠牲を払ってその仕事を引き受ける人たちの集りでできることだろうか？

ジョン・ライフにとって、今この大きな人物が亡くなったために生じた労働界にたいするこの挑戦に対応する道はただ一つしかなかった。フィリップ・マレーの思い出の一つ一つが決意に拍車をかけてくれるのであった。こんどこそは今までのように中途半端な努力では絶対いけないのである。

彼は自分の家族のこと、労働運動をやって来た友人たちのこと、階級と世界中の国民とのあいだにある厳しい闘いのことを思いめぐらした——今にして彼が理解しはじめたイデオロギーの闘いである——遂には悲惨な戦争を招く可能性のある闘いである。

よりよい賃金や生活条件を獲得するための闘いは確かに必要であったが、ジョンが十分心得ているように、そうしたものを勝ち取ることで自体は決して労働者の忠誠や信頼を増すことにはならなかったし、また労働者の責任感と融和をもたらすことにもならなかった。何かそれ以上のものが必要なのであった。何か心に訴えるものが必要なのであった。かつて彼の母が読んできかせてくれた古い聖書の文句が彼の頭にうかんで来た——「もし全世界を手に入れても自分の魂を失なつたならば、その人にとってそれが何の益となるだろう？」

そのクリスマス夜の夜、ジョン・ライフは自分が憎しみの気持から全く解放されているのに気がついたのであった。こんなふうになつたということでは自分でも驚くほどであった。ほかの囚人たちといっしょに一本の鎖でつながれたこと、監禁されたこと、殴打されたこと——彼は人間らしく世を怨む理由はあり余るほど持っていた。しかしどうしたわけか世を怨む気持はもはや全然消滅していた。

しかもこのように心の自由を得たということは彼の物質的条件が改善されて起つたわけではな

かった。南部組合組織運動の指導者として金回りのよかった時代でさえ、彼は焦躁に身をやつす、世を怨む人間であった。法律を作ったり、決議案を通すことでは、そういう気持は得られなかったのである。彼が通って来た一つの経験が人間の心を根本的、徹底的に解放してくれるのであった。

世界の融和というものは道義的標準に立ってはじめて作り出すことのできるものである。立法化だの、組織化だの、改革だのでは融和は決して作り出せない。

そうした背景の前に立って彼はもう一度労働界を新しい光に当てて眺めることを始めてみた。彼は組織化された労働界というものは、個人的、派閥的、或いは国家的嫉妬心によって分裂されるものではなく、また憎しみと便宜主義によって動かされるものでもなく、あらゆる人と人のあいだに、融和と信頼を作り出すためのものであり、また全世界の要求を満たし、新しい社会を作り出すために、すでに世界に存在する一つの潜在力であるべきものとしてこれを眺めたのであった。

ジョン・ライフはCIO自体のことを思いめぐらしてみた。

彼の働いているこの偉大な団体はフィリップ・マレーの指導の結果、強固な道義的性格が、この団体に強烈な人道主義を与えている。その規約は「人類家族の中には人種的迫害も、頑迷な精

神も、利己主義も、貪欲も住む部屋があつてはならない」と明記している。

もちろんこの話も額面通りとはいえないことをライフも知っていた。個人的野心のために自分の職分を見失なつた組合幹部や、組合が自分のために獲得してくれたものを何ら感謝の気持もななくことごとく受け取りながら、更に欲ばつてそれ以上を欲しがる組合員——そういう人たちは労働組合主義の真の意味を忘れていたのである。責任感と個人的道義というものが急速に消失しかかつていることをジョンはつくづく考えてみた。労働者側にとつても経営者側にとつてもおなじように、道義的妥協ということが不幸にして当り前のことになりかかつている。すべてのものごとくに絶対正直という立前で生きて行こうと決意している人間は、急には仲間たちから支持してもらえない場合が多いのではなかつたか。自分たち本人が道義的責任感に乗っている人たちは、他人が道義的責任感を持つことを必ずしもいさぎよく認めてやろうとはしないものである。

とは言え、ジョンはらかな妥協というようなものにはいりこむ余地を与えてはならないことをつくづく悟つた。過去十年の経験が彼にそのことを教えたのであつた。人間のあいだにも社会の中にも一つのはっきりした選択の機会というものがある——全面的に崩れさるか、或いは徹底的に大掃除をして、まず個人からはじめて正直な、責任感と信頼のある、新しい社会を作り出すかである。その解答は一つであると彼は自分に言いきかすのであつた。

人間の同胞愛という考え方は労働組合の人たちにとっては、はじめてのものではなかった。ジョン・ライフの心がこの新しい期待と見通しに向って手を差し伸べたとき、部屋の静けさも暗さも光を発し、ほとんど白熱して輝くように思われるのであった。人間の同胞愛——融和した世界——それが労働者たちの本当の運命なのである。世界の労働界にとってそれが次ぎに登るべき段階である。それが労働界の任務である。それが労働運動における彼の任務なのである。

これは「神に導かれる労働界は世界を導くことができる」と言ったフランク・ブックマンが当初から目ざしていたことである。

クリスマスの長い夜をこめて彼の心の中には闘いがつづけられて行った。彼はこう言っていた。「私は生れたときのままの、澄みきった、きれいな水たまりを見たような気がした。ところが歳月が過ぎて行くあいだに、ガラスの破片とか枯葉とか、あらゆる種類のごみ屑がその水たまりに投げ棄てられてしまった。私は自分がそのごみ屑をさらい上げて過去を洗い清めることもできるし、或いはそのごみ屑の中にとどまって、その下に吸い込まれてしまうこともできるということを知った。いまの私は神の恩恵と寛容とを受け入れて、過去の償いをするのがどれほど大きな意味があるかということを知っている」

喋ったり考えたりするだけでは十分ではない。彼は今までの生涯を通じ、ただ喋ったり考えた

りだけしかやって来なかった。為すべきことは決意をすることであり、しかもいま決意をするこ
とである。

時間のたつのも忘れて彼は長いあいだ心と意思の中で、こうした妥協のない、逃がれる道もな
い道義的決意をするために、支払わなければならぬ代価を数えながらあえいだ。彼がかつてフラ
ンク・ブックマンから学んだ道義的規準——正直、純潔、無私、愛の絶対標準に立って生きるた
めに。あらゆるものごとの中に神の導きを求めるために。人びとの本当の問題と取り組むこと
ができるように。敵にたいしても心からのへりくだりと本物の憐れみを寄せるほどの気持を見いだ
すために。上から下まで国を浄化するために。新しい確信を持ち、自分の家族の心にまで届くよ
うな洞察力を持てるようになるために——彼がいま欲しがって求めていたのは、そうした信念の
贈り物だったのである。彼がいま二度と後えひけないような決意をしようとしていたのはそうし
た事がらだったのである。いま——そしてこれから先きも永遠に！

これだけの決心を固めて、心静かにきおい立つこともなく、彼は自分の生涯を神の宥恕と指導
にゆだねたのであった。奇跡的にも、長年の肩の重荷は取り払われてしまった。春の朝の光をあ
びて重い冬の外套を脱ぎ去ったような思いであった。神の実体と力が彼の心の中に押しよせて来
るように思われた。それとともに深い喜びと、幸福感と、人生の目的が入って来た。彼は神の存

在を感じる事ができた。そして慰めと自信を与えてくれる神の存在の前に立って、彼は自分の将来の生涯が、自分より偉大な叡智に、素朴にかつ、心の負担なしに従うような生涯になるだろうということを知った。

長い年月がかかったが、かつてフランク・ブックマンが自分の意思を神の意思に全面的に降服させていると言った意味が今になって彼に判って来たのである。ここに秘訣は発見された——この降服は敗北を意味しているわけではない。神の意思から引き離されていた彼自身の利己的な意思は、これまでの彼に苦勞と心痛のほかなにももたらさなかつた。いま新しい自由が発見されたのである——彼が今まで知らなかつた、とても新しい心の自由である。

朝になると真先きにローズが見舞いにやって来た。彼女もまた眠れない一夜を過ごしたのであつた。彼女は言いようもなく苦しうかつたが、それでいて希望と期待に満ちた最近の数カ月のことを考えていたのであつた。彼女は過去に起つたすべてのことに感謝の気持を感じていた。彼女の必要としていたものも、家族の必要としていたものも奇跡的にかえられたのである。しかしいま彼女は過去に起つたすべてのことは、それより大きな冒険の序曲に過ぎないことを察した。

彼女にとつてもジョンの場合とおなじように、過去の決意はいまの彼女が向い合っている決意

にくらべたら、とるにも足りぬほどのものであった。ただ一つ暗い影がまだ残っていた——最近の数週間のあいだでさえ彼女は自分の浪費癖のことはまだジョンにはっきり打ち明けていなかった。過去において金銭的な苦勞が多かっただけに、彼女も言い出しにくかった。その問題も彼女はいま正直になった。しかし彼女はそれ以上にジョンに話すのであった。

ジョンも自分の決意を彼女に話してきかせた。ローズは耳をすまして聞いていた。何という奇跡の一夜だったのだろうか！ それこそ彼女が世の中の何ものにもまして、ぜひ聞きたいと思っていたことではないか。

ジョンが話し終ると彼女は自分の決意を話すことによってそれに答へた。その決意はただ彼女一人にとどまらない広い影響をもたらす性質をもっていた。それはなるほど自分たちの結婚生活と家庭生活のための決意にはちがいがなかったが、それはもはや単に自分たちの幸福と満足のためだけの独占的なものと考えるわけにはいかなかった。その決意は、いま数えきれないほど沢山あるほかの家庭の不和を癒やしてやるために十分活かし、そうすることによって彼らを分裂させて、国を分裂させている冷酷な、利己的な物質主義に答えるために活かさなければならぬ。

枕に頭をつけて横になっていたジョンはうなづいて嬉しそうに微笑した。彼は理解した。

第十一章 新しい次元

ジョン・ライフは基本的な決心を固めてしまっていたが、それがどういう結果にまでひろがるものか、まだあまり見当はついていなかった。

新たに純粋な動機をもち、人びと、特に労働者たちの必要としているものを、はじめて世界的観点に立って考えた彼は、イデオロギーを持つアメリカの労組指導者となったわけである。この夢を実現するためにどんな好機が前途に待ちかまえているだろう、と彼は考えてみた。

彼がそういう決心を固めてから間もなく、しかもまだ心の中でそのことを考えめぐらしていたあいだに予想もしなかった出来事がつぎつぎと起り、そのため彼は高い地位に押し上げられてしまった。このことが彼に、労働界のため、また自分自身のために彼が夢に描いた仕事を実現に移す好機と責任の二つを与えた。

彼は病院を退院した直後、たまたま友人たちといっしょにフロリダのマイアミに静養に出かけ

た。一九五三年二月のある日の真夜中、電話のベルが鳴った。それはアトランタからの悲しい知らせであった。彼の親友であり、同僚であり、CIOの専任副会長でもあり、役員会議理事長でもあり、「ミスターCIO」と呼ばれていたアラン・ヘイウッドが、その日の夕刻、ペンシルバニア州ウィルキス・バールで急死したのであった。

ジョン・ライフはその知らせに深く心を動かされた。彼は言った。「アランは若いころからいっしょに働いていた鉱夫の一人だ。そのころの仲間に残っている者はもう少なくなった。でも私はアランがまだ達者でいたあいだに、私たち二人のあいだにあったわだかまりを解消するチャンスがあったことは、せめてもの幸いだと思っている。パン・ビトナーが亡くなった後で私が南部を引受けたころの私の生活をみて、あいつはさぞ胸の痛むことが多かったにちがいない。私は病院を出てからアランと心ゆくまで、話し合った。南部の組合運動を指揮していたころの最初の数年間の自分の暮し方について、自分がどんなに濟まないと思っていたかということをあいつに話すことができて嬉しかった」

彼はヘイウッドの葬式に参列するため北部へ出かけ、また南部組合組織運動の指導者としての仕事をつづけるためアトランタに帰った。このとき局面は重大な転回を見せた。

ヘイウッドの後任候補は恐らくジョン・ライフだろうという噂がCIOの役員のあいだに流れ

はじめた。全国各地から彼のところへ電話が来るようになった。本当ですか？ 私たちでお手伝いできることはありませんか？ そういう問い合わせのすべてにたいし、彼はその地位を引受けることは気がすまない。なにしろその地位につけば当然激務を要求されることは判っているし、自分の健康がそれに耐えられるかどうか疑わしいから、と弁明するのであった。

ジョン・ライフは、ウォルター・ルーサー会長がCIOの全面的責任を担っているほかに、全米自動車労働組合の責任者として、自分の組合を指揮するために当然かなり莫大な時間をそれに向けなければならないということを知っていた。その結果、毎年の大会及び常任委員によって決定された政策に応じてCIOを運営するという毎日の仕事は、実際において全部専任副会長の肩にかかって来るはずである。

その頃ジョンの心の中にはいろいろの感情がうず巻いて去来していた。彼はそのすべてを家族に打ち明けた。健康の理由から躊躇する気持と並んで、自分が承認されることを待ち望む大きな期待も当然心に抱いていた。とは言え最近固めた決意のおかげで、彼の心はたえずそのどちらの気持をも超越した、大局からの見通しをつかまえようと努力していた。今もしその地位につくことになるなら、彼はその任命に神の手が加えられていると感じることだろうし、従って彼はその任務の遂行に当って神の計画を第一義に求めることだろう。その結果、彼はまじりけない本物

の心の自由を見いだし、そのためか、彼は目に見えてほがらかに落着いていた。もしその地位が彼のところへ転がりこんで来るなら、彼はそれをすばらしい賜物であり、人びとの彼に対する信頼であり、かつは大きな目的を遂行する好機であるとして、信仰の中に邁進することだろう。自分一個の野心から解放された彼はまた自分一個の憂慮からも解放されていた。

その地位につくかもしれないと考えたとき、受諾するにしても、拒絶するにしても彼自身の動機に焦点が合わされて来た。どちらに決めるか、いずれにしても困難な問題である。しかし心の中で成長していた新たな道義的な確信をもって、彼は遂に固い決意に到達した。ジョン・ライフがそこからどんな利益を得るか、或いは引受けたとして彼個人にどんな事態が起るか、そういうことは考慮の外に置くこととした。もしその地位が舞い込んで来た場合、彼がそれまで以上に労働界のために尽すことができるかどうかという点だけを彼は真剣にとりあげることにした。

まだ組合を組織していない人たちに今までよりもっと有効的に手を差しのべること、自分の同僚のあいだに見受けられる対立や嫉妬を和解させ、それによって真の目的を達成するために労働運動の統一を強化すること、人間の心の奥底にある精神的要求に解答があることを自分自身の経験から割り出して他人にも明らかにしてやること——もしその地位が提供された場合、こんなことがジョンの予め考えていた任務であった。

「もしそれが正しいことなら」と彼はローズに言った。「もし私とその地位につくことを神が望んでいられるなら、私は喜んで受けよう。私のやることはただ出来るかぎり神の導きに従うことだけだ。私は自分の力の足りないことを感じている。なぜなら組合を組織する仕事と平行して、アメリカの労働界に基礎的な融和を作り出すためにやらなければならない、ものすごく大きな仕事かひかえているからである。しかし私はこの国の労働運動にその融和を作るため人びとが渡って行けるかけ橋に自分になりたいと思っているのだ」

ジョン・ライフは任命されるために何らいわゆる裏面仕事をやらなかった。また応援を求めるため人に連絡をすることも一度もしなかった。

事実四月にその任命をめぐってCIOの常任委員会が開かれたとき、会議室の外でいっしょに待っていた同僚の一人が大声で言った、「驚いたねえ、よくも君はのんびりかまえて、ぜひこの地位についてやろうなどと指一本上げないでいられたもんだねえ。ほかの人だったら誰だってあわただしく駆け回り、人を呼びとめては談じこみ、副会長たちを電話に呼び出し、支持を得て了解してもらおうとつとめるだろうのに。ところが君は一人の人間もまだ呼び出したことがないと皆が言っているよ。逆に皆のほうから君を呼び出したっていうじゃないか！」

委員会の決議は間もなく発表された。委員会は万場一致でジョン・ライフをアラン・ヘイウツ

ドの後任としてC I Oの専任副会長兼役員会理事長に任命した。

今やジョン・ライフは大きな善事も大きな悪事も為すことができるような権限を持った地位についた。その職責にたいし、彼はほかの人とはくらべものにならないほどの心の準備をそれまでやって来た。C I Oに属する五百万人の組合員にたいする全責任を、身に引受けた。彼は自由なそして開かれた心でそれを遂行することができた。彼はこう言っていた。「私は経営者や政治家たちをこっぴどい目に会わしてやれるような力——彼らが犯したと私の信じている罪の償いをさせてやれるような力——を持ちたいものだときから思っていたし、いつかはぜひそういう力を持ってみせるぞと誓っていた。ある程度までそうした力を持った今日、私は誰にたいしても仕返ししてやりたいなどという望みを持っていないことに気がついた。私は経営者代表の誰にたいしても、どんな政治家にたいしても、少しの憎しみも感じていない。人がもしその心に敵意を抱いているなら、口先でどんなに平和を喋ろうと何の役にも立たないことを私は知っている」

新しい任務につくためアトランタを出発するに先立って、ジョンとローズは友人たちを夕食に招待した。その席につらなつた八十名の来客の中には大勢のC I Oの役員とその妻たちの顔も見えた。ライフ夫妻はそれぞれ自分たちの身の上で起つたことどもを話した。C I Oのフロリダ州

支部長はその夜の会の終るとき立ち上って言った。「ある詩人の言っているように、私は嘲けるつもりでやって来て、ひざまづいて祈った愚か者だったような気がします。私はこの友人夫妻の身に起った話にいたく感動しました」 ついで彼は自分と自分の同僚の一人とのあいだにわだかまっていた激しい反目が、その同僚が心から自分に詫びたため解消したという話をした。ジョンの哲学はすでにほかの人たちにまで浸みこんでいたのである。次第に人を動かしていたのである。

それから間もなくライフ一家はワシントンの郊外に当るバージニア州アーリントンに引き移った。ジョンの新しい事務所に近かったからである。

専任副会長として新たな責任を負うた最初の数週間のあいだ、彼の心の中にはあらためて闘いがつづけられていた。「私は眠ることもできなかつた」と彼は、そのころを思い出して語っていた。「なぜなら私は役員たちの中のいろいろ違った性格の人たちや、いろいろ違った努力のあいだに困難な問題や、不和や、敵対意識がわだかまっていることを知っていたので、たえずそのことばかり考えていたからである。しかし『お前は労働運動に最善を尽し、人間の必要を満たすこと、ただそれだけのためにこの地位にいるのだぞ。自分一個の成功を求めるためにこの地位にあ

るのではないぞ』という考えがはつきり心に浮んできた。そう考えると私の心は安らかになり、子供のように寝こむことができた」

たちまち彼は手に負えそうもない組織上の任務に直面した。会長のウォルター・ルーサーはだいぶ前からCIOの大がかりな編制替えを考えていた。州によってはCIOの地方機構がすでに厄介なものになっている州が幾つかあったからである。ある地区では二つか三つの違ったグループの役員たちが別々の運営の仕方をし、時にはお互いのあいだに競争しあい、しかもその全部の人たちが本部からかなり莫大の給料を受けていた。そういう状況であるから情実とえこひいきが横行し、給料と手当での制度は手もつけられないほど矛盾だらけであった。ウォルター・ルーサーは全国を通じて地方組織を円滑にし、安定させ、統一する必要があることを悟った。そこでいよいよ州及び地方の支部長、事務所の数を今までの半数以下に減らすことになった。

ルーサーの案は紙上計画としても、また実際においても明らかにりっぱなものにちがいがなかった。ただそれを実行に移すことが問題なのである。それは単に行政的手腕を必要としただけではなしに、人事を処理するに当ってよほどの勇氣と分別とすぐれた靈感を必要とする滅法もない大事業であった。

大勢の役員たちは自分たちが格下げの対照になっていることを知った。このとき全国のCIO

の下層部に分裂の危機をはらむ気運がকাশし出されるかもしれない情勢となった。CIOの上層部はこのことを悟った。

新しい地位についたジョン・ライフがはじめて手をつけた大きな仕事は、この編成替えを実施することであった。

手っ取り早く言うならそれは道義的勇氣の試金石であった。会長ルーサーの計画が首尾よく実施されるように取計ろうということが、専任副会長と役員会理事長という二重の役目を引き受けたライフの公の責任となった。とは言え彼が左遷された支部長たちを始末するという厄介な仕事をほかの人たちに代ってやってもらったとしても言い訳の立つことかもしれなかった。彼には有能な助手が沢山ついていたのであるから。

しかし彼は相変らず「自分のやりたくないことは決して人に頼まない」人間であった——「君たち、さあ行こう」と言って自分から真先きに出かける「人間であった——むづかしい仕事を引き受ける人間であった。CIOのためにジョン・ライフは人びとの反発と文句を言われる相手になることを自分一人の身に引き受けるべきだと決心した。

そういう決心を胸に抱いて彼は幾たびか違った地方を巡り歩き、ワシントン、アトランタ、シカゴ、デンバー、サンフランシスコ、ニューヨーク、その他の都市の関係役員たちと会合を重ね

た。もちろん彼の助手たちも彼といっしょについて廻った。

「私たちは彼が『気の毒には思うがこれは誰それが考えてやったことだ』などという言い方をしたのを一度なりとも聞いたことはなかった」と助手の一人は言っていた。「ジョンはこの計画がCIOのために正しいことだということを知っていたので、その責任を一身に引受けていた。彼は常に本部にいる同僚たちの意見とおなじ立場をとって責任をにならっていた。彼は常に『私たちが皆で決めたことだ』という言い方をしていた」

助手はさらにことばをつづけて言った。「不思議なことは、大勢の人たちはこの再編成に感情を害していたのに、ジョンの誠実さと謙虚な気持の中にある何ものかがその人たちのとげとげしい気持を棄てさせたことである。人びとはジョンに接して感じ、理解のある正直な心の暖かさにふれると怨みも怒りも解けてしまうものと思われる」

新しい地位についた彼の前に立ちはだかっていたもう一つの大問題はAFLとCIOの二つの組合のあいだにわだかまっている支配権の争いであった。この争いはすでに二十年來つづけられて来た。古くからの敵意、いがみ合い、不信、競争心が不和のきざしを悪化させて来た。CIO側の組合がAFL側の組合を襲って、その会員を奪って来ようとするれば、相手側もおなじ仕返しをするのであって、たとえ襲われた組合が雇用者側と正式な契約を結んでいようと、そんな

ことにはおかまいなしであった。

AFLとCIOはそうした同士討ちのために、すでに数百万ドルの金を使った。その間に全国労働関係局はAFLとCIOの両者側が主張している三十八万五千人の労働者をどちらの組合が代表するかということを決定するために幾度か投票を行なった。そうした一進一退の決戦を重ねたあげく、AFLの組合側はCIOから四万人の組合員を獲得し、CIOはAFLから四万四千人の組合員を獲得した。ことばをかえて言うなら、この二つの組合連合は正味約四千人の組合員交換に数百万ドルの金を使ったことになるわけである。

こうした争いのためにしばしば支配権に関連したストライキが起り、経営者側は対立する二つの組合にはさまれて身動きができなくなり、その結果は数百万ドルに及ぶ生産と給料の損失を招いたのであった。

CIO自体の内部ではすでに一九五二年以降、多くの組合が相互に「切り崩し反対」をとまえ、合同協定を結んだほうが有利であることを証立立てた。両団体の指導者たちは早くからそうした切り崩しに終止符をうつような何らかの協定を結ぼうということをお口にしていた。AFLの会長ジョージ・ミーニイも、CIOの会長ウォルター・ルーサーも、またほかの人たちも、そうした協定をどんなに待ち望んでいたかジョン・ライフは知りぬいていた。彼はまた専任副会長とし

て、役員会理事長としての自分の任務の性質から考えても、そのことを実現させる特別の責任が自分にあることをさとっていた。

一方AFLとCIOのあいだには今までより大きな全国的不和のきざしが不気味な姿を現わしはじめていた——一九三〇年代の半ばころのあの激しい争いがあって以来、十八年という長い年月のあいだアメリカの労働界を二分していたその仲間割れのつづきである。幾度か統一に向おうとする努力が繰返されたのであるが、その度ごとに昔ながらの仲たがいが、相互の不安、猜疑心、個人間の対抗心、衝突という暗礁に乗り上げていたのであった。今や新しい人物たちが表面に顔を出し、ジョン・ライフは職務上AFL・CIO統一促進委員会の委員の一人として、一つの解決方式を求めようという交渉に乗り出した。一体何がその鍵となるであろうか？

彼が組合の切り崩しという問題と、それよりもっと大規模なAFL・CIOの統合という問題の二つを考え合わせていたある日の早朝、静聴していたときのことであったが、一方がもう一つのほうの解決の鍵になるという確信が、はっきりした力強い形をとって彼の頭に湧き起って来た。つまり実効の上るような組織不可侵協定を結んだならば、それがAFL・CIO統合のなめ石になるということである。今までよりもっと大きな目標をとらえ、労働界の全国的な分裂が国に与える犠牲のことを思い合わせるとき、その考えは新たな力強さで彼の心を占めるのであつ

た。

個人的野心をみじんも持たない心境に達していたために、彼はその考えを実行に移す際に強い原動力となった。ジョン・ライフは組織不可侵協定や、その後のAFL・CIO統合にたいしても、夢にも自分の大きな功績を誇ろうとはしなかった。しかし彼の同僚たちの多くは彼がこの問題でみんなに最高の目標を失なわせまいよう、しかも謙虚な気持で奮闘したその力の偉大さを証言していた。

会談や交渉を幾回も重ねた末、ようやくのことで二人の会長が一堂に会して、そうした協定にサインするというところまで漕ぎつけた。

当の本人のライフはその問題を——そしてその解決のことを——次ぎのように説明していた。「私が就任したとき、私たち、すなわちCIO側とALF側は全国で同士討ちの争いをつづけていた——まるで戦争みたいであった。時には撃たれる者もあった。私が調べてみたところ、CIO側の自分たちはこの争いで、すでに九百万ドルの金を使っていることがわかった。それがアメリカ国民に与えた損害は、支配権争いや、ストライキや、生産低下などで実に数千万ドルに及んだ。

私は毎日のように、この二つの団体のあいだに何とかして統一をもたらしることができないもの

だろうか、心に導きを求めていた。私は会長ルーサーと幾たびか相談した。私たちは国のために、単に労働界内部だけではなしに、産業界の内部においても、どうしたら両陣営のために統一された労働運動ができるか検討してみようと、幾たびかいっしょに集会をやった。

私たちは組織不可侵協定を成立させるためにできるだけのことをやってみようと決意した。

そして数週間前、私たちは組織不可侵協定にサインした。これがAFLとCIOの協力のはじまりである」

またそのときミーニイとルーサー両会長は共同声明を発表して組織不可侵協定の意義を次のように強調した。

「この協定の意味するところは休戦である。この休戦期間に共同のAFL・CIO統一促進委員会は、この二大労働連盟を合体させて単一の連合労働運動に結集させるため、それに関連した雑多な問題の解決を進めて行くはずである……われわれの代表する労働者諸君、並びに国民全般の利益となるこの目標を、われわれは休戦期間の切れないうちに達成できるものと信じている」

役員会の理事長としてジョン・ライフは自分の幹部職員たちといっしょに、この新しい条約を実施に移すため心から仕事にかかることができた。

彼はこう語っていた。「自分のところの幹部諸君と毎日のように計画を練りながら、私はみんな

なに不和から生まれる損害を説明し、人間が変りさえすればどんなに私たちが今までと違ったふうにものごとをやって行けるかという実例を示してやった。一九三六年の決裂以来、十八年目にはじめてAFLとCIOは以前にもまして協力し合い、過去にあったあのような高価な襲撃はもうやらなくなった」

一九五三年クリーブランドで開かれたその次ぎの大会は万場一致で「支配権の争いに関する協定の実施を促進して好成績をあげたことにたいし専任副会長及びその幹部職員」を推賞する決議を行なった。これでその後一九五五年にこの二大労働連盟の合同への踏み石が確立されたわけである。

ジョン・ライフは再組織に関する新しい政策を説明するため、全国各地を遊説して、支部長や幹部と会見するたびに自分自身の改変の体験を語り、労働界としても国全体に新しい方向を与え得る好機であると語ることを忘れなかった。

ジョン・ライフがほかの連中といっしょになって全国の組織の中へ持ちこんだ秩序の強調と風紀の高揚は、組織運営の費用を数百万ドル節約する事に実際的に大きな働きをした。それまで自分たちの州や地方会議に生ぬるい態度をとっていた労働組合連中はその事実を知るに及んで、五十万人の組合員を率いてCIOの団体に加盟することを決議した。CIOの歴史を通じ一年間に



ジョン・ライフ



右 ベンシルヴァニア州ベッレ
ムにあるベッレム鋼鉄会社
ジョン・ライフは鉄鋼労組組
織委員として1940年から41年
にかけて組合を結成した。

左下 工場に入ろうとする自動車
を阻止する労働者。

(W・W・P提供)

右下 スト妥結をピケに報告する
ジョン・ライフ。

(U・P・I提供)





ベツレヘム鋼鉄会社との交渉成立を鉄鋼労働組織委員と一般鉄鋼労働者に報告するジョライフ。

(W・W・P提供)

SWOC MASS MEETING

For Bethlehem Workers of Williamsport

Your Union is ready to Request a Labor Board Election in Williamsport. You will have a chance to vote for the SWOC as your sole Agency for Collective Bargaining

COME AND HEAR

MR. JOHN V. RIFFE

National Director of Bethlehem Organization who will be here to

Speak to Wire Rope Workers

At TRINITY HOUSE

844 West Fourth Street

Tuesday, October 28, 1941

At 8:00 P. M.

Come to this Meeting. Bring Your Friends. Get a New Member. Let's show Our National Director a Real Membership in Williamsport.

Steel Workers Organizing Committee

201 Campbell Street

-12-

Williamsport, Pa.



1942年クリーブランドでの全米鉄鋼労組第一回年次大会でMRA劇を上演後、舞台上立つ鉄鋼労組委員長フィリップ・マレーと財務兼書記長ディビッド・マクドナルド。

観劇する人びと、前列にはクリントン・ゴルドン夫妻、フィリップ・マレー夫妻、ヴァン・ビトナー、R・J・トマス、ジェームス・ケリーの諸氏。



A PATRIOTIC REVUE
FOR TOTAL VICTORY

You Can Defend America

Public Auditorium, Cleveland, Ohio

May 20, 1942



STEEL WORKERS
ORGANIZING
COMMITTEE

務兼書記長のディビッド・マクドナルドはの一文をよせている。「鉄鋼労組組織委員を代表して、私はこの年次大会にこの劇の演を可能にして下さった多くの人に感謝す。この劇にあふれている精神は組織労働者最高の努力のかけにあるものとは同一であることを信ずる。この精神をいかに発揮するとが、さらに新しい安定した世界を築くことである。

左 クリーブランドでの鉄鋼労組の第一回年次大会当時のMRA劇のプログラム。

下 プログラムに寄せられた鉄鋼労組委員トフィリップ・マレーとアメリカ陸軍のパーシング大将からのメッセージ。

"YOU CAN DEFEND AMERICA" REVUE AND
VICTORY HANDBOOK WHICH INSPIRED IT

★ ★ ★ ★

PHILIP MURRAY

PRESIDENT, CONGRESS OF INDUSTRIAL ORGANIZATION,
CHAIRMAN, STEEL WORKERS ORGANIZING COMMITTEE

"YOU CAN DEFEND AMERICA" brings us all back to fundamentals. It charts in brief, compelling outline a practical program for home, industry and nations. It is a call to action against the divisive materialism which is our unseen enemy. It must appeal to all whose fight is for a new social order as an essential defense of American Democracy.

PHILIP MURRAY,
President, Congress of Industrial Organizations,
President, Steel Workers' Organizing Committee.

★ ★ ★ ★

GENERAL JOHN J. PERSHING

GENERAL OF THE ARMIES OF THE UNITED STATES

NONE can fail fully to endorse its ultimate objective—the preservation of our precious heritage. It invokes the principles of good citizenship and the spirit of '76 and of '17 in this new emergency confronting our great Democracy. How each of us can do his part in the home, in industry, in every walk of life, is indicated clearly and forcefully. I commend its message to every American.

JOHN J. PERSHING,
General of the Armies of the United States of America.



CIO会長並びに全米鉄鋼労組委員長をかねるフィリップ・マレーは同組合年次大会でM
RA劇が上演された後で語る。

「この劇は、アメリカが求めている融合をつくり得る示唆に富んでいる。劇に関係してい
る人びとの上に神の祝福のあらんことを。」



サラ・アン・ライフ

「私の両親は素晴しかった。私が共産主義者にならなかったのも二人のおかげである。どう考えても共産主義が解答だとは思えなかった。」



「融和した家族」子供たちと孫に囲まれるジョンとローズ・ライフ
(A・J・C提供)





上 1953年CIO専任副会長に選出されたジョン・ライフ。ウォルター・ルーサー会長とジェームス・ケーリー財務兼書記長とともに。

(W・W・P提供)

右上 全米鉄鋼労組委員長ディビッド・マクドナルドとジョン・ライフ。

右 著者を囲むアメリカ、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、南アメリカの労組代表たち。





運輸労働者組合委員長ウィラード・タウンゼンドとジョン・ライフ（1954年）

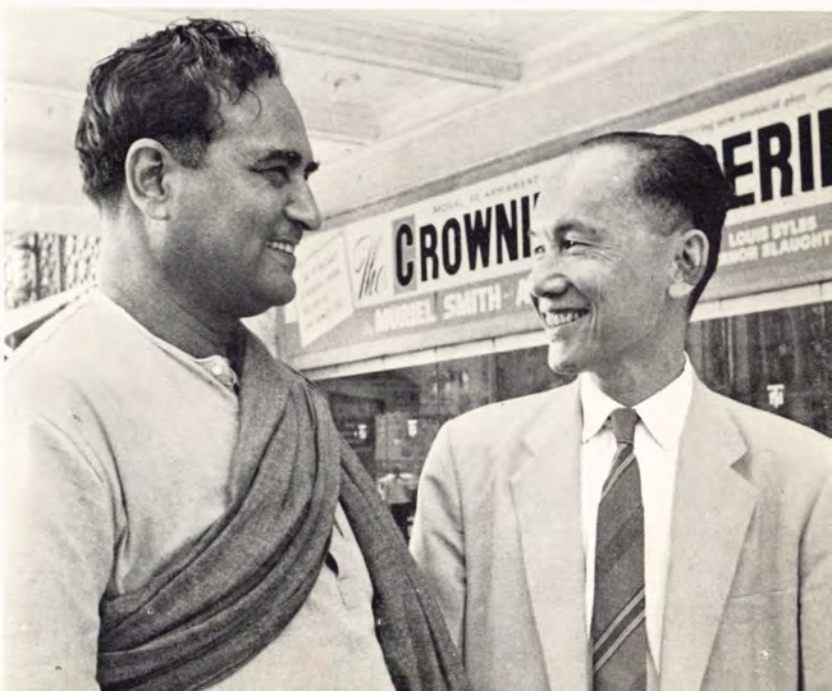
フロリダ州C I O支部長ウィリヤム・グローガンからアイルランド独特のつえをもらうジョン・ライフ。（1953年）「このつえはアイルランド独特のもので紛争の解決を意味します。何が正しいかを求めるあなたの闘いの象徴として差上げます。」

（L・F・L提供）





ジョン・ライフとフランク・ブックマン



右 「神に導れる労働者は世界を導く。」

1956年マキノ島で開かれたMRA世界大会に集うインド、ナイジェリア、南亜、ブラジル、グアテマラ、英、米、独、仏、伊、日本の各国労働運動指導者とフランク・ブックマン。

左下 1954年、マキノ島のMRA大会で有名な黒人教育家メアリ・マクロイド・ベスーンを迎えるジョン・ライフ夫妻。

右下 メアリ・マクロイド・ベスーンの一生を劇にした「わが生涯最高の経験」のワシントン上演のとき、ナショナル劇場の前で。

インド社会主義同盟のシブナス・バナジーと香港労働会議書記長フング・ホイ・チュウ。





マキノ島のMRAセンターの壁画のジョン・ライフの肖像の前で、ジョン・ライフの遺家族。左からローズ・ライフ、バーバラ、ジョアナ、ジョンの弟シャード、ジョン、エステイズ。椅子に腰かけているのはローズの母スタイン夫人。もう一人の息子のフッカーとその妻もこの大会に出席した。

それほど大量の組合員増加を見た年は一度もなかった。

一九五四年の四月オハイオ州のある集会で会長ウォルター・ルーサーは次ぎのような報告をすることができた。「財政的にも組合員数においてもCIOはこれほど強大になったことは今までなかった。CIOに属する労働組合はすべて統一され、CIO傘下の大組合である鉄鋼労組、自動車労組、ゴム労組、その他すべての労組はよりよき世界を築き上げるために一つにかたまつて前進をつづけている」

第十二章 イデオロギーに生きる人たちに

フィリピン労働組合協議会の十名の本部役員がワシントンでジョン・ライフと昼の会食をした。その中の一人が急にからだを前にのり出して彼に尋ねた。「あなたはMRAの絶対の道義標準をよく労働運動に当てはめることがおできになりましたね？」ライフは即座に答えた。「労働運動に当てはめるのじゃないんです。逆にそれによって労働運動をよくするのにふさわしい人間になるんです。それまでより責任を感じる有能な指導者になれるのです。私の身にそのとおりのことが起ったことを自分は知っているのです」質問したフィリピン人はしばらく考えていたが、やがてこう言った。「今度、私たちの国へ代表団をつれておいで願えませんか？ 私たちの労働運動はあなたの持っていらいっしやるものが必要なのです」

ジョン・ライフの生き方は同僚たちの好奇心をそそり、いろいろの論評を受けた。一人はこう言った。「ジョン、君に反対している人たちもあるにはあるが、それは君のイデオロギーが間違

っているからではなく、正しいからなんだよ」

またある一人は言った。「はっきりに得心がいったよ。これまでジョン・ライフを見て来て、いま私の言えることはただ一つ、つまり彼のやることにこれっぽちの間違ひもさがし出せないということさ」

ジョン・ライフといっしょに働いている人たちは違った人間になった。頑固で気むづかしいという評判をとっていた彼の職場幹部の一人は、自分の指導者と接触しているうちに驚くほど人間が良いほうに変わった。その指導者であるライフ本人がこう批評している。「この男は以前はとても気むづかしかったので、どういう方面にこの男を使っていいか見当もつかなかった。いまこの男は違った人間になろうと真剣につとめている。私はいま国中のいろいろ違った方面の人たちから、自分たちのほうの組織運営上の問題を解決する手助けに、この男をよこしてくれという依頼を本当に沢山受けている」

ジョン・ライフの死後、この話の当人が書いている。「ジョンとつき合っているうちに起った出来事で、いま自分の頭に思いうかぶことは無数にある。ちょっとした出来事に過ぎないものもあるが、中には震天動地の出来事もある。すべてが人事に関係していることであり、その出来事のすべてに一人の偉大な人間の姿が反映している。それは神に従って世界の変革に一身を捧げた

一人の人間である。世界はジョン・ライフのお陰で、より住みよい世界となった。彼は大勢の人たちの生活に影響を与えた。私自身が彼の影響と彼の思いやりのおかげで、それまでの習慣や、考え方を変えた人間の生きた証人である。私は彼のお陰で以前よりは良い人間になったと思つてゐる。彼は私に大きな影響を与えてくれた人間であり、私にとっての一種のインスピレーションである。神の導きをうけて決断を行なう場合の彼の勇氣は、恐るべきものである。避けようと思えば避けることもできたような決断を彼が下すのを私は幾度もくり返し見て来た。人気がないような公職も、引き受けることが正しいという理由で、彼が引受けるのを私は幾度もくり返し見て来た。黙つて控えていたら衝突も避けることができたような場合でさえ、彼は倫理上の問題であつて有力団体に反対し、そのために組合側の非難をその頭上に受けたのを私は幾度もくり返し見て来た。ジョンの勇氣とゆるぎのない正直さが、アメリカの方々の地区で起つた出来事の全面的な方向を変えた場合も多かつた。

人種問題について彼の態度は一步も譲らぬほどはっきりしていた。彼の心には優越感も憎しみもみじんもなかつたので、彼は一つの特定の派閥や、或いは一つの特定の人種の利害を超越した、もっと広い視野に立つてものごとを眺めることができた。ジョン・ライフの精神は階級や人種よりも大きかつた。彼はどんな人間にたいしてもその態度を変えなかつた。

ライフは人がめったに持っていないような偉大さと、謙讓さと、誠実さと、献身とを持っていた。彼のお陰で世界は少しは住みよい所となった。神が彼を天国に連れて行かれたというのは、よほど彼をよびたがっていられたのに違いない」

ジョン・ライフは自分がかつて徹底的な正直さで自分の卑しい動機に真向から立ち向ったことがあるので、人間の卑しい動機は理解していた。野心の多過ぎる一人の役員に向って彼はこう言った。「君は煙草の煙の立ちこめている奥の部屋などに引きこもって、人をおとし入れる策動をするようなことをやめたら、今までよりずっと良い仕事ができるよ」そう言われた男はびっくり仰天した。「私が策動していることがどうして判ったんだい？」と彼は尋ねた。「自分でもちよくちよくやったんで判ったのさ」というのがライフの返事であった。「そんなことをしたってどうにもなりやしないよ。いま私の知っていることは、労働界なり、ほかの人間なりを何か実のある永久的なものに向って推し進める以外にないのだ。それには人びとの動機を正しくすることと、人間同志のあいだに健全な関係をつけてやることよりほか方法がないということだよ」

とは言うもののジョン・ライフは他人の弱点を同情の目で眺めることができたのである。なぜなら彼自身がある同僚のことばによれば「偉大なる罪びと」だったからである。彼は他人が誘惑にかかる気持も理解できたし、またこういう気持を直す方法もはっきり教えてやった。

彼の部下で南部諸州の組合組織のために働いていた二人が浮かれ騒いだことがあった——酒と女と賭博と、最後には警官ともんちゃくを起してしまった。彼らはライフに文句を言われて首を切られる覚悟をしていた。ところが驚いたことに、ライフは最初に彼らの問題をいろいろ問いただしていたが、やがてそのうちに自分の過去の突飛な行為の話をはじめ、自分が過去にどんなに間違ったことをやっていたかという話をした。そして自分の発見した新しい道を彼らに説いた。

覚悟した叱責を受ける代りに、深い思いやりと理解とをもち、はっきりした態度で話をしてくれたことが、その二人の男に深い感動を与えた。二人のどちらも問題を起したのはこんどがはじめてではなかった。以前の場合も二人とも組合の上役からひどいことばで辱しめを受けたり、どやされたりして来た——その結果、これから先き絶対にかまるといふようなへまはするまいと決心していた。それでこんなふうに使われたのははじめての経験であった。

「こんなふうには私たちが扱ってくれる人間はCIO広しといえどもあなたただけでしょうね」とその一人は言った。「今まで私はあなたのをやっていたことが理解できませんでしたが、いま私にもわかって来ました」ともう一人のほうも言った。「私はあなたと、あなたの生きかたを支持します」二人とも今までの生き方を変えようと決心した。その後、何らのいざこざも起きなくな

った。

南部の幹部の一人はうすら笑いをしながらこうもいった。「私は労働指導者として、何でも知っていると置いていたが、ここ数カ月のジョン・ライフのまわりに起っているいろいろのことを見て、私が知っていると思つてゐることが全部でないことが分つてきた。私も教えられることがある。実は労働運動そのものの問題よりも私自身のことと悩むことがあるからね」

全国の労働指導者たちはみんなジョン・ライフの言行や性格についての何かしら新しい噂をそれぞれ耳にするようになった。中には深く感動する人たちもいた。鉄鋼労働者組合の副会長であり、CIOの歴史の上でも最も名誉ある指導者の一人であつたクリントン・ゴルドンは言つていた。「彼ジョン・ライフが南部組合組織運動をやつていた時代、私は彼の行動についての噂を聞いて残念に思つていた。そのうちに私は彼が變つたという話を聞いた。私はいわゆる神信心をするような人間ではないが、罪のあがないをすることは立派なことだと思つてゐる。だから私はジョンの身に起つたことを聞いて嬉しいことだと思つた」

ジョン・ライフが變つたという話を聞いて疑う人もあつたことは当然である。彼らがそれまで知つていたライフという人間は無作法で、強情で、ひどい酒呑みで、無鉄砲で、感情を抑えることを知らないような人間であつた。これが一体おなじ人間なのであろうか？ コロラド州の一支

部長のごときは、ライフが自分といっしょに仕事をしていたころ指導者として怠慢だったと、本人の口から自分に詫びられた後でさえ、いつまでも信じようとしなかった。ところがある役員大会の席上でも、彼はやはり人を動かさないではおかないほどの誠実な気持を表にあらわして、おなじ詫びごとをくり返した。その支部長は立ち上って言った。「私は今までジョン・ライフがこんなふうに変ったということを非常に疑っていました。しかし、今ここで彼のことばを聞いて私が彼、並びに諸君一同に言えることは、私も彼がいま見せたような勇氣と謙讓な気持を持ちたいと神に祈っているということだけです」

ライフ直屬の幹部たちはワシントンの本部にいる者も職場に出ている者も、間もなく新しい雰囲気を感じるようになった。健全な雰囲気である。多くの大きな組織を分裂させる、耳うち、陰口、中傷、責任転嫁、というようなものは影をひそめてしまった。あらゆる人の個人的問題もジョン・ライフの問題であった——彼はどんなに忙しくとも一人の人と手を取って悲しみ、一人の人と手を取って喜ぶ時間を惜しむようなことはなかった。

職場回りの彼の助手の一人はテキサスを回っているあいだに自分の妻の母がセント・ルイスで亡くなったという知らせを受けた。その話を聞いたジョンは直ぐその男にこう言った。「君は妻君といっしょにセント・ルイスへ行かなくちゃいけない。CIOは君が自分の家族のことを心配

してやるその気持だけ、かえって強いものになるよ。私も君の家族のためにお祈りしよう」

未組織労働者たちが貧困と搾取にあえいでいることが絶えずジョン・ライフの心を悲しませた。彼はこう言っていた。「私たちはこの国で大きな労働運動をやっていると自慢している。なにしろ凡そ千六百万の、いや恐らく二千万人の労働者が加入しているのだから。しかし私たちの組織の中にさきを争ってはいって来なければならぬはずの四千万ないしは五千万人の人たちがまだ残っている。この組織にはいれば、彼らは単に金の面や、短い労働時間の面だけではなしに、彼らの生活の最も深刻な問題に対しても解決してもらえらるだろうから。しかし、私たちはまだそうしたことには手をつけてはいない」

これがAFLとCIOの合同を達成しようとして働いていたあいだ、ライフがやむにやまれぬ気持で慎重に考慮していた問題の一つであった。もしも労働運動が統一されたならば、今まで労組同士のいがみ合いを見て時には迷い、時には反感さえ抱いていた下積み労働者たちにも、もっと力強く訴えることができるはずだ、と彼は考えていた。

ライフは根本的な融和というものは組織して出来るものでないことを知っていた。彼は部下の幹部たちに言っていた。「喧嘩したり口論したりしても、そこから何も生まれて来るものではない。私たちはみんな何か新しい方法をみつけなければいけない」

彼がその新しい方法をみつけたということは彼の同僚の多くの証言するところであった。新聞の論説担当者たちが予言した分裂や不和が発に終わった場合、実はそれは舞台裏で一人のからだの大きな口の重いケンタッキー人が静かに人から人を歴訪し、逆立っていた羽毛を撫でてやり、いがみ合っている個人同士、グループ同士がお互いに詫言ひ合って仲直りするよう努力したお陰であることを彼らは知っていた。

どちらも大きな全国的な労働組合の指導的立場に立っている二人の長老が、お互い同士の嫉妬と猜疑心から対立していた。二人はもう幾週間も前から一度もことばを交わしていなかった。ジョンは二人を説きつけて会合させることにしたが、最初のうち二人はお互いに数人づつの応援を同席させると言い張っていた。ライフはこの二人が、二人きりで昼食を共にすることが明らかに大切なことだという主張のために断乎としてゆづらなかつた。そうすることで二人は自分たちの食い違っている点を正直に話し合うことができたのである。その次ぎに行なわれたCIO執行委員会には二人とも出席し、十数週間ぶりにはじめて二人は力を合わせてできるかぎりの奮闘をした。

あるときジョン・ライフはCIOの中間の指導者たちから罐詰労組に関するある噂を調査してもらいたいという依頼を受けた。彼はその組合の大勢の個人個人に会ってみた。彼の質問ぶりは

ぶっくら棒で手ひどいものであった。そのあいだにC I O委員会はその組合の問題になっていた点の疑念を晴らしてしまっていた。ジョン・ライフはほかの連中の依頼を受けて行なった調査について申し開きする立場に立たされた。何の躊躇もなく彼は罐詰労組の年次大会に出席し、自己一人で全部の責任をかぶった。C I Oの上層幹部にたいする同組合の悪感情は解消した。罐詰労組の指導者たちは後になってジョン・ライフのことを深い感動をもって話していた。

しかしジョン・ライフは事が融和のためのはっきりした闘いという段になれば何らの手ごころも加えなかった。一九五四年ワシントンに会合を開いたある重要産業の全国労働組合の役員たちは、いやというほどこのことを思い知らされた。彼らの会長は別の労働組合と合同しようとして開ったかどで、自分の組合の一部から攻撃を受け、足もとをすくわれるような目にあわされたのである。ジョン・ライフはその労組の会合に出席した。発言を求められたとき、彼はその会長とほかの役員たちに向って用いられた分裂をひき起すような戦術に触れて遠慮会釈もなく突込んで行った。

「これから私の言おうとすることは或いは諸君の気に入らないかもしれない」と彼は口を開いた。「しかし、私は言わずにはいられない。事実私は諸君の中の誰か、或いは諸君全体の気に入ろうと入るまいとちっともかまわない。ともかく私は自分の心の中にあることはすっかり喋るつ

もりだ。諸君はこの組合のために尽す正しいことに心を向けなくて、自分の個人的の誇りや利己心に心を向けていられるのではなからうか」

彼はことばをつづけた。「もうそろそろ諸君はすべて自分たち自身と自分たちの動機に真剣な目を向けて、自分たちが何というあさましいことをやろうとしているかということに気がつくころだと思ふ。諸君はこの労働組合を破壊しようとしているのか？ もし諸君がこの組合を破壊したいというなら、さっさと今やっているやり方を押し進めたらいいだろう。しかしCIOはそんなことに片棒かつぐわけにはいかない」

「諸君はいま役員を変えてやろうという大運動を開始している」と彼は声を張り上げた。「一体それが何の解決になるのだ？ このまえ君たちは一体何の解決をしたのだ？ これではまるで妻にがみがみ小言を言われている亭主みたいなものじゃないか、或いは酒ばかり飲んでゐるか、或いは自分の望むように家庭をきりもりしてくれない妻をかかえている亭主みたいなものじゃないか。亭主は離婚しようど決心する。亭主はほかの女と会う。私にはわかつてゐる。私の身にそういうことが起つたことがあるからだ。『俺はほかの女といっしょになるつもりだ』と亭主は言う。そうして亭主は離婚して別の女といっしょになる。こんなことをしたって何の解決になるものか。再婚して何よりさきに判ることはこんどの女だっておなじことだということではないか。

だからそんなことをしないで亭主はこしをおちつけてこういうことを言おうと思えばできることじゃないか——『ねえ、お前と俺は協力してこれこれのことをやったほうがいいんじゃないかなあ？……俺たちが幸福な家庭を築こうと思うのなら、協力してこれこれの点でお互に交って行かなくちゃいけないね』これが事態を改善して行く道だ。

私たちが野心と誇りにばかりこだわっていたら、ほかの人たちを踏みつぶし、その頭の上に登ることになるではないか。しかも国中の女や子供がどうなろうと、どうでもかまわん、ということになるではないか。

私は一週間だつてつづけて君たちを反駁することができない。しかし私は君たちを憎もうとも思っていないし、ここを出がけに君たちに不利なことをして帰って行くつもりもない。私の真心も、私の希望も、私の夢も、私の祈りも心の底に流れている。私はこの組織（CIO）に生涯を捧げている。私たちは心を入れ替えて協力し、お互い同志でいがみ合いをやめなければならぬ。私たちが歩調を合せて闘わなかったら、それこそ大変だ。組合を破壊することのできる唯一の人間は組合員ではないか——役員と組合員ではないか。労働組合とは役員と組合員のものではないか」と彼はことばを結んだ。

ジョン・ライフのことばが終ると、あっけにとられたような沈黙がつづいた。やがてその組合

の会長は立ち上った。「もし私たちが団結しなければどんな事態が起るか、私たちはいまはっきり言われた。昼食がすむまでこの会議を散会したほうがいいと思う」と彼は言った。みんなは何かに打ちのめされたように散会した。たしかに何かに打ちのめされたわけである。

その会議は組合員が身にしみて訓戒を学びとった。セント・ルイスで開かれたその次ぎの大会には万場一致の決議が行なわれた。一九五五年三月、古くからCIOに属していた二つの労働組合が単一の組合に合併した。

一九五八年ジョン・ライフの亡くなった後、この組合の役員たちは彼の未亡人に打電した——「ご主人の名声は労働者が組合のホールに集まるごとにこれからさき永久に語り草となることでしょう」

ライフが人びとを和解させる力は、すでに述べたAFL・CIO組織不可侵協定にたいする彼の謙遜ではあるが力強い仕事振りに見られた。二大組合の合併を実現させるための舞台裏の活躍振りの中にもおなじようにこの力が働いていた。もしも合併が実現されたならば自分自身が現在の高い地位を失なうということはジョン・ライフも承知していた。しかし一九五六年に彼が何の私心もなく専任副会長の任命を受けたときと同じ心構えで、彼は今アメリカの労働戦線統一を達成しようとして闘っていた。これこそ自分に与えられた大事業の一つであると彼は信じていた。

これを達成するためには、彼自身の利害のごときは全く考慮のほかであった。

一人の同僚が書いている。「個人の野心を放棄してしまったジョンの最大の役割は、彼が心に何のわだかまりもなく、お互いの確信と野心の食い違っている人たちと個人的に話し合いができる場所にあった。彼は内輪に個人的に話し合いをしたので、不和が表沙汰にならないうちに解決する場合が多かった。彼が個人的野心を全然持たないということが、他人と話し合いをする場合の彼のことばに権威を与えた。彼はほかのどんな人たちにも出来ないようなやり方で他人と渡り合い、その人たちの動機を明らかにすることが出来た。あまりにも大勢の人たちが権力を握ろうとしてひしめきあっている現在の労働界では、このことが私たちの最も必要なものなのである」

自分たちの役員にたいする全面的退職案を用意していたAFLは合同にそなえて、CIO側にたいしても古手の役員たちの退職を依頼していた。当時のCIOにはそのような退職案はなかった。初期のころのCIOの地方機構再編成の場合のように、こうした手段は大勢の不幸を伴う悪であるとはいえ、やむを得ないものであった。数人の長老たちはその槍玉にあげられようとしていた。「俺は絶対に退職しないぞ」とアメリカ労働争議界の古つわ者であるアドルフ・ガーマーは語っていた。「俺は戦場で死ぬ」

またまたジョン・ライフはこの不愉快な仕事を引受けた。一人づつ順ぐりに彼は古手の役員たちをワシントンに招いた——全部で九人である。当時彼自身は病気にかかっていたが、その一人一人に彼は直接なり、或いは助手を通じて心からの慰藉を与えた。

その結果この人たちは全労働運動界にたいする昔ながらの忠誠心がむしろ強まるのを感じた。彼らは快よく承諾した。中には遂にその考え方がまるで自分たち自身の発案であったように思いこむ人さえあった。自分自身の退職の通告に悲しんだことは悲しんだが、彼らのうち誰一人としてジョン・ライフの事務所を出るとき怨みに思っている人はなかった。

合同の当時、戦闘的なアイルランド生まれの会長マイケル・クイルに統率されているCIO運輸労働者組合は、それまでのアメリカ労働界を毒していた三悪——すなわち人種差別、切崩し、脅迫の三つを追放するある種の保証を要求した。クイルとその仲間たちはその三つの点を非常に重大視していたので、はたしてこの運輸労組がたとえ初期のころからCIO内の最も強力な、最も戦闘的な組合の一つであったとはいえ、この労働戦線合同に踏みきるかどうか、かなり疑わしい点があった。ジョン・ライフはもし運輸労連が脱退したら、合同にとって非常に大きな損失になると痛感した。そのためCIOのほかの上層部役員たちといっしょに、彼は運輸労連の指導者たちのところへ出かけて行って話をした。

ライフの勧告ははっきり筋が通っていた。

「私は委員会並びにクイル氏に、運輸労組の組合員たちが合同労働戦線に踏みとどまる決議をするよう勧めていただきたいと非常に強く勧告して来た。運輸労組が踏みとどまることは健全な策でもあり、また全体にとって利益になると私は考えている」彼は運輸労組の代表者たちに向けて胸を開いて誠意を披瀝した。そして例の三悪の問題については原則として彼らに賛成さえしたが、統一組合の内部から三悪追放の闘いをつづけてもらいたいと強調した。一九五五年十二月八日の「ニューヨーク・タイムズ」はその会合の模様を次ぎのように伝えている。「この合同によって自分の地位を失なう唯一人のCIO専任副会長ライフ氏がその勧告を披瀝しているあいだ、クイル氏はそのそばでおだやかにこしをおろしていた。クイル氏はイエスとも言わなかったし、ノーとも言わなかった。彼の言ったことはただ委員会はその勧告を考慮して態度を決めようということだけであった。クイル氏は言った。『ライフ氏の伝えたメッセージは私たちがここ十日間にきいたものの中で、はじめてしっかりした論議を尽している』」

結局全組合員の万場一致で運輸労組は新しい合同に参加する決議を行なった。

それから一カ月たってクイル会長はジョン・ライフに手紙を送ってこう言った。「私は運輸労組の国際委員会の席上であなたに申し上げたことばをくり返すことしかできませんが、私たちは

あなたが労働運動に多大な貢献をなすたと固く信じています」

それから十八カ月後、ニューヨークで開かれた全運輸労働組合全国大会での万場一致の歓呼の声を裏がきするジョン・ライフへの電報の中で、会長クイルその他の人びとは、「AFLとCIOの歴史的合同」を達成するためのライフの「不撓不屈の尽力」にたいし心からの賛辞を送ると申し送った。

合同の前夜、アメリカ労働界が踏み出そうとする歴史的な一段階について、ライフは深い感慨をこめて語った。「明日私は暖い心と冷静な頭を用意しなければならぬだろう。私たちはこれから新しい世界を築くことを目ざさなければならぬ。そうしたとき、私たちは目的においても、名前と、数に匹敵するような大きな、新しい労働運動を展開することができるであろう」

合同が遂に達成された後、もはや直接その衝に当たっていなかったにせよ、アメリカ合同労働戦線の成功をめざすジョン・ライフの事実上の世話をつづけられた。彼のもとに働いていた元の組織運動幹部たちも、いよいよこれから新しい役員を戴くことになった。過渡期というものは容易なものではない。自分の幹部たちとの最後の会合は、ただ一つの目的だけを目ざさなければならぬ、と彼は心に決した。つまり彼の幹部たちが彼に仕えていたときと同じように、新しい役員にも信義を守り、力いっぱい働くよう、その点をはっきりさせることである。

彼はその点については前々からよく考えていた。

その会合の日の前夜、彼は再び心臓の発作に襲われた。朝になると痛みは薄らいだので、彼は起き上って服を着換えた。

「私は行かなければならん。大丈夫だということには判っている」と彼は言った。

その日、ジョンの最後のことに聴き入っていた幹部たちの中で、彼が自分たちのために出かけて来て心の底から話をしてくれたことが、実はどれほどからだの無理をしているかということを察した者はわずかしかなかった。

融和を生み出すライフの簡単な秘訣は容易に人びとも理解された。西部海岸AFLの連盟役員をやっていた音楽家労連のエルマー・ハバードは書いている。「私はジョンが自分の組合員に謝罪し、自分が誤ちを犯していたことを認めたときのあの声が、今でも私の耳に聞えるような気がする。私は彼のあっぱれな実例にひどく感動していたので、私もこの週末には自分のほうの会議の席でおなじことをやって、私たちのある地方支部の役員たちみんなの面前で謝罪した。その場合には以前分裂騒ぎや争いごとが絶えなかったのである。だから私たちの仲間の多くは、当時その地方支部の役員たちが反逆分子と闘うことに気乗りがしていなかったことをにがしがしく思っていた。私が謝罪した後で会議がどんなに私の気持に答えてくれたか、自分の耳で聞いていた

が、実に心のあたたまる思いがした」

肉体的にいろいろ活動を制限されていたとはいえ、ライフの心のおだやかさは、その勇気が常に誰にもはっきり判っていたように、特に彼といっしょに働いている人たちにはっきり判っていた。彼がみんなに語ったところによれば、彼の決意は「決してかんしゃくをおこしてどなり散らさないこと、雇業者や政治家たちに対して事態を都合よく糊塗することでもなく、またそんなふうにして点を稼ぐことでもない。常に自分の心をさぐり、正しいものを見究わめる」ことであつた。

ジョン・ライフは、一九五六年、インドの最大の新聞「ヒンズー」に寄せた文の中に書いている。「私は自分が四つの絶対的道德基準にもとづいて暮している場合、それは常にほかの人びとも影響を与えていることを発見した。私たちの組織の全国的指導をやっている人たちのあいだに、その影響が感じられた。健全な、強力な組合を築き上げるためには、労働指導者たちが健全な道德基準を守ることが絶対的に欠くべからざる要件である。組合員の水準が指導者のそれを上回ることはないだろう。私はウィスキーや徹夜のポーカー勝負は、組合を健全にするためにも、国を強くするために何ら寄与するところのないことを発見した。勿論幸福な家庭を作るために寄与するところはない」

ジョン・ライフの力はカナダの労働者やその指導者たちのあいだにも少なからず感じられていた。カナダ労働連盟の本部役員の一人は、ジョン・ライフのカナダ訪問の最後に言った。「ここに滞在していられたあいだに、あなたはほかの誰よりもカナダ労働界の融和のために効果をあげて下さいました。それがMRAのお陰だとしたなら、私がこのつぎワシントンへ行ったとき、もっとそのお話を承りたいと思います。私たちはこのつぎの大会にはぜひあなたに来ていただきたいお話を伺いたいと思います」

長年のあいだカナダ労働連盟の財務部長をつとめ、後にワシントンでカナダ労働界駐在代表となったパトリック・コンロイは、ジョン・ライフの生涯を次ぎのことばで言いあらわしていた。

——「彼の最大の勝利は自己に打ち勝ったことである。それが彼にあれほどの威厳を与えていたのである」

第十三章 経営者側にも

舞台はフロリダのバーム・ビーチにあるきらびやかな有名なブレイカーズ・ホテルであり、そこで全国に広く手をのばしている、ハースト新聞網の副会長メリル・メイグズ及びその夫人ブランチ主催のディナー・パーティーが一九五三年三月に六十四名の客を招いて催された。それはジョン・ライフとローズのために催されたもので、その日がジョンの誕生日に当り、たまたま彼がCIO専任副会長に任命される直前であった。来客の中には全国的に名のある会社の社長連の顔が大勢見えている。ライフ夫妻といっしょにメイグズ氏に紹介された主賓のもう一人はリチャード・バード提督であった。

その後につづいた歓迎会には四百名以上の客が参集したが、夫人や家族を連れだしたアメリカ産業界のお歴々ばかりであった。その人たちはこのCIOの指導者が話を始めると熱心にきき耳を立てて聴いていた。大抵の人は今まで労働界の指導者に面と向って会ったことが一度もない人たち

であった。

ジョン・ライフはケンタッキーの炭鉱で働いていた十四才のころのことからの身上話をはじめた。当時の迫害や不正な待遇に対抗するために強力な労働組合を作ろうとして闘った話をした。その頃のことについてあやまっているのではない、と彼は語った。しかし彼は自分自身の組合組織の中でさえ、資本家たちにたいして感じていたと同じにがにがしい気持を同僚の幾人かに対して感じ、仲違いするようになったのである。社会の必要に応えるものとして政党もまた自分を失望させた、と彼は一同に語った。

静まり返った来客たちは憎しみや分裂にたいする解決策をみつけ出した彼の話に聞きほれていた。「私はかずかずの苦しい闘いを経験して来ました。そしてかつては私の中で経営者たちにたいし深い憎しみや怨みを抱いていたこともありました。たとえば鉄鋼会社の場合などでした。ところで私が自分自身に答をみつけた場合は、とりもなおさずそれが妻のローズのための答ともなつたし、娘のバーバラ、ジョアンナのためのものでもあつたし、息子たち、孫たちのための答でもあつたのです。そして私は心の平和を得て家庭内に起るいがみ合いを治めることができたのです。あなた方の家庭でもたまには必ずやそういうことが起るにちがいないと思います。

あなた方の場合も、私の場合も、憎しみにたいする答は私やあなた達の心に生まれて来るもので

す。こうした経験で結びついた人たちが遂には一つの大きな力となり、その力が私たちや、私たちの国や、多くの国々に答をもたらしした例を私は自分のこの目で見て来ているのです。

自分がどんな職場にしようと、自分が誰を相手に話をしていようと、あるいは自分がどんな問題に直面していようと、私は常に経営者側の顔をまともに見つめて、自分は何が正しいかのために闘っているのだと話すことができますし、どんな交渉の場合も正直に、公明正大に振舞うことができます」

彼はなおもことばをつづけた。「私たちがいま努力していることは、私たちが落着いて労使双方にとって正しいもののために心を合わせて働くことのできるような、そうした国家全体のためになる融和の気持を経営者側とのあいだに生み出そうということです。私たちは今その途上にあると信じています。私が幸いにもこのたび任命された地位にとどまっているかぎり、自分の列席するあらゆる団体交渉の会議の席にこの精神を持ちこむ努力をして行くつもりです」

これまでかずかずの苦しい組織運動のために身を粉にして働いて来たし、しかも本人自身も貧困と不正に苦しめられて来ているながら、いま露ほどの怨む気持もなしに、暖い率直なことばで話をしている、この労働界の大立物の一人の話を聴くということは、気持の硬化していた産業資本家たちにとっては全くはじめてのことであった。そのときメリル・メイグズが評したように、この人

こそ本当に「偉い人間」である。謙遜で、まがいものではなく、心には一点の憎しみの気持も抱いておらず、それでいて各自が心の中で今でも生きていなければならないものと信じているアメリカの精神的遺産を、あらためて各自の心に思い出させるほど力強いものを持った人間である。

メイグズ自身も戦時中は政府の役人として、そして後には出版界の重役の一人として、それまで数多くの争議を扱って来た人間である。しかし彼にとってジョン・ライフは事に当る場合の新しい道を示してくれたわけである。後年になって彼は論争の種になっている事件を正しく解決するためにジョン・ライフを尋ねて忠言と援助を求めたこともあった。そうした経験から二人のあいだには長つづきのする深い友情が生まれた。

その夜ライフは経営者側にはそれまで必ずしもはっきり判っていなかったような新しい考え方にまで話を持って行った。来客たちの多くはそれまですべての労働者側の人間を、敵意はないとしても猜疑の目で見て来た。しかしジョン・ライフが話をしていくうちに、そうした感情は彼らの心から消えてしまった。彼らは現代の世界に対処する自分たちが、労働者とともに果すべき真の任務が判りはじめて来た。労働界の一人物におのおのの心の目を開かれた彼らは、それまでの偏見を棄てて理解と理性に目覚めるようになった。そしてこれらの人たちは新しい次元にはいって行った。

メリル・メイグズも彼の友人たちもその夜のことはいつまでも忘れなかった。ワシントンへ出かけた場合、彼は常にジョン・ライフのアーリントンンの家庭で大切な友人として歓迎された。

ジョン・ライフが亡くなったとき、メリル・メイグズは飛行機でシカゴからワシントンに飛び、葬儀の席で人の心をうつような弔辞のことばを述べた。

あるときジョン・ライフは語った。「労使双方が団交の席に向い合った場合、どんな場合でも冷戦とか、或いは熱戦をつづける必要はないと私は思っている」

彼ほどのにがい経験をなめて来た人間からそういうことばを聞くことは驚異に値することである。しかし後年のライフはそれが真理であることをたび重ねて身をもって証明した。彼が闘争精神を失なってしまったというわけでは決してない。むしろ彼には以前にもまさる力強い威厳がそなわって来た。それは隠すことを心に少しも持たない人に——個人的或いは派閥の利害を超越した人に——憎しみも、貪欲も、恐怖も少しもない世界を築き上げようという一つの目的によってすべてのものごとを進めて行く人に自然にそなわるものである。

彼は何よりも先ず自分の組合の同僚たちにそうしたことを進んでやって貰いたいと念願してはいたが、それと同じ目標に経営者たちの目を向けてやりたいとも思っていたのである。

彼はただ単にそれ自体のための産業平和を念願していたわけではなかった。彼はいい加減に譲歩するというような考え方は絶対に排斥した。産業平和それ自体ではあまりにも小さな考え方であることを知っていた。そうした関係は単に、昔ながら人間の心に巣くっている利己的な動機を交えることなしに、産業界の歩調を合わせることを目的としているからである。彼はすでに新しい時代にはいるために、人間の動機の革命の必要を認識していた。

彼はたえずこういう質問を自分に向けていた——あらゆる人間の必要を満すという観点に立って眺めた場合、資本家側にとって何が正しいのであろうか、労働者側にとって何が正しいのだろうか？

一九五三年にCIO副会長に就任した後で彼は述べている。「私は自分の組織の専任副会長として、大きな仕事と巨大な責任を持っている。CIOについて少しでも知っていただける諸君はすべて、これまで自分たちが長年にわたって決しておとなしい組織ではなかったことを知っているらると思う。私たちはこれまで常に進んで、喜んで闘って来た——時には多少行き過ぎがあったかもしれない。私たちはまだそういうふうな組織なのである。

しかしながら今日私たちは恐るべきイデオロギーの闘いに直面しているのである。これはただ共産主義に対応するためばかりではなしに、私たちの心の中に、私たちの下部組織の中にまで、

国の利害を個人の利己心や派閥の利己心に優先させるための闘いである。MRAは私を狭い世界から救い出し、労働界指導者としての私に、自分たちの仲間だけではなしに国家全体の必要を考えるようにさせてくれている。イデオロギーの闘いにおいてのアメリカの実力は、私たちのこの闘いの成果にかかっているのである」

階級闘争に取って代わらなければならないと彼の確信していた考え方はこれであった。また人間の動機の革命がどこで始まらなければならないかということについて彼ははっきりしていた。彼は言っていた。「私は自分の心に起った革命は単に一労働指導者の心に起ったものではなく、人間の本性の中に起った革命であることを知った。同じ革命は経営者にも起り得るのだ。私たちはみな人間であるから。それがどこの人から始まるかということは問題ではない。それは下部に始まって上部にひろまる場合もあるだろうし、上部に始まって下部にひろまる場合もあるだろう。重大なことはただそれが始まるということだけである。

自分以外の人間及び国にたいする絶対の正直と思いやりを持つてば、不信、恐怖、憎しみが生みだす莫大な通常経費を排除してくれることだろう。こうして年々数百万ドルの金が節約されたときのことを考えたら！ またこの基盤に立って事を行なったならば、経営側と労働側がいっしょになって世界にたいし共産主義よりはるかに偉大な解決策を与えることができるであろう。しかも

それは誠実な、理想に燃えた共産主義者ならば誰でも心の中で望んでいることではなからうか」
こうした見通しを持ったとき、ライフは経営者側の頭脳とエネルギーと資力と、労働者側の熱意と考えとが力を合わせて地球上の数億の人のために働いたならば、どんなことを成し遂げることができるといふことは考え出していたのである。

ジョン・ライフはいま自分の知ったことを労働者側の任務として大胆に声明した。

一、「自分たち仲間の融和を達成することによって国の融和の模範となること」

二、「デモクラシーのよさが分るようなチームワークの模範を産業界にうち立てること」

三、「労使の融和した力をもって全世界のすべての国が納得するような外交政策の面で政府を援助すること」

こうした新しい見通しを身につけた彼は経営者側の中から喜んで自分の呼びかけに応じようという大勢の協力者を得た。彼らはあらゆるところの、貧困、搾取、不正、分裂などにたいする解答を打ち出そうというライフの挑戦に応えた。

あるウォール街の会社の社長であるウィリアム・ウィルクスはジョンの親友となり、彼を尊敬するようになった。二人はお互いの心と同じ革命の熱意に燃えている似かよった精神を認め合った。

今までしばしば冷酷な圧迫者、搾取者として共産党の宣伝にうたわれていたウォール街の人の

中から、利益追求の目的よりもっと力強いものをみつけ出した人が現われたわけである——どんな経済生活をしている人の必要にも心から関心を示す人が現われたわけである。ウィルクスはライフに自分の階級がやった罪悪を正直に認め、その階級の一員として自分の動機と行動を徹底的に変えたいという自分の念願を話した。

ウィルクスが銀行家たちの言っている「変わる必要のあるのはわれわれではなく、労働者側だよ」という話をしたときライフは「それは私たちの仲間が銀行家たちにたいして言っていることばとそっくりですな」と言って面白そうに笑った。この二人の人間はいっしょになって一つの結集した力を形成した。彼らは銀行家側も労働者側も一方が始めるのを待っていないで、両方とも変る必要があるという本当の直理をよく知りぬいていた。

ウィルクスが亡くなった後、ライフは彼について言った。「ウィルクスという男はあらゆる人間が変わる必要があることをいつも考えて行動していた人間である。彼は私に新しい信念を植えてくれた。それは私たち労働界の人たちが、日常私たちの敵とみなしている人たちの中にも信頼できる人物があるという信念である。彼は労働界の指導者も、銀行家も、産業経営者も、すべての人が変って新しい世界を築き上げるようにと闘った。彼が私に向かって、率直に自分は資本家の一人として変る必要があることを認めると言ったとき、それは私にとっても一つの挑戦だっ

た。誰だっぺこういう人間なら信頼できる」

経営者陣営の人たちもジョン・ライフの底力にはいやおうなしに感服しないではいられなかった。ここにまたデトロイトの銀行家でH・H・サンガーという人が現われた。この人は銀行関係の友人たちには心の暖いおだやかな人間で、もの固い誠実な人間であるとして知られていたが、ほかの人たちにはサンガーは引込み思案の内気な人間のように思われていた。ジョン・ライフのかくし立てのない謙虚な正直さと、おどろくべき変化とがサンガーの心の扉を開かしてしまった。二人だけで話をしていくうちに彼は、ジョン・ライフに自分の心の底まで打ち明けてしまった。それは階級を超えた友情であった。

こういう暖い関係を結んでいるうちに、古くからあったどちら側の偏見も消え去って行った。ジョン・ライフはよくこう言った。「私は共和党を心から憎んでいた。私は彼らが世界最悪の罪悪を犯していると思っていた。私は最悪の罪悪がこんなところに——と言って自分を指さしながら——あるとは一度も考えていなかった。『自分から始めなさい。ほかの人を指さしてはいけません』と神は私に告げたのだ。」

私は激しい憤りでポップ・タフト——前上院議員——を憎んでいた。やがて私はすっかり変わってしまった。近年は幾度かポップのために祈った。彼が亡くなった日、私は彼のために祈りなさいと

いう神の導きを得た。私は共和党の指導者たちのために、アメリカの大統領のために、上下両院議員たちのために祈り始めるようになった」

それ以来彼はつとめて共和党の指導者たちと知り合い、労働者の見解を判らせるようにつとめ、さらにいっしょになって彼らの責任感を最大のものにするために働きだした。

一九五四年の春のある日、ジョンのアーリントンの家の電話が鳴った。バーバラ・ライフが電話に出た。

「そちらはC I Oのジョン・ライフさんのお宅ですか？」と男の声が尋ねた。

「そうですけれど、どなた様でしょうか？」とバーバラは答えた。

上院の事務局員であった。

「大統領がライフさんにお目にかかりたいと申されています」

そこでジョン・ライフはアイゼンハウワー大統領に会いに出かけた。彼らは一時間近く話し合った。

ジョンは後で家族の者にその会見の模様を話したが、簡単なことばの裏にも感謝の気持が表われていた。「大統領は労働界の人間としての私のものの考え方に興味を持っていられた。私は大統領に労働界は国内と世界の融和を求め一つの勢力になるべきだという現在の私の信念を伝え

たよ。大統領は私にずいぶんいろいろな質問をされた——りっぱな質問ばかりだった。

大統領は聞きたがっていられたよ。私のようなれっきとした労働畑の男が、自分の仕事と上役たちにたいしてこんな今までと違った態度を取るようになったのは、一体どうしたわけかね。大統領が『自分はこのなふう^ぶに落着いて頑固な民主党の人間とあけすけに話をする事が出来るというようなことは珍らしいことだ』と言いだしたときは二人で大いに笑い出したよ。

大統領が一番興味を持たれたのは、共産主義者たちがMRAを知って変って来ているといういろ私が話したことだった。私たちは共産党の人間の心を変えるに必要なものは何だろうということと話し合った。

私はまた大統領にMRAがそれとおなじ解答をアジアとアフリカに与えていることについても話をした。この二つの大陸で起ったことは全世界に影響を与えるだろうということが大統領にも判ったと見え、これからまた情報はいったらたえず自分に手紙でも知らしてくるようになると私に頼んでいられた。実に楽しかったよ」

そうしたさまざまなたちとの接触からジョン・ライフと雇用者側の幾人かは新しい社会の出現を悟った。一体産業デモクラシーというものはせいぜいうまくいっても、たえず悪性インフレ

に悩まされながら、常に内戦状態にあるか、或いは雇用者側と従業員側のあいだが不安な休戦状態にあるというような、そういう分裂した社会である必要があるものだろうか？ 恐らくマルキシズムも資本主義もつまるところ、人間の本性は利己的なものだという同じ前提のもとに出発したものかもしれない。いわゆる啓発された利己主義よりもっと強力な動機を与えることはできないのだろうか？ またそういう動機は労働者とおなじように雇用主の心をもつかむことができるだろうか？

スターリンはかつて共産党の指導者たちに向けてモスクワでこう言ったことがある——「もしも資本主義がその生産を最大の利益追求に向けないで、大衆の必要に応ずるように向けることができるなら、何らの危機も生じないであろう——しかしそうなったら資本主義は資本主義ではなくなるだろう」ライフは共産主義者ではなかったけれども、スターリンとおなじように労使双方が全く新しい動機をみつけ出すことができるとは思っていなかったし、また、人間の心が世界の多数の民衆に奉仕するために自己追求から自己犠牲に変わり得るものだとも思っていなかった。

カナダの産業経営者の一人である、バーナード・ハルワードの経験はライフに、こうした強力な動機が可能であることを信じさせた。この人もまた経営者たちの罪悪を認め、勇敢にそれに立

ち向った資本家の一人である。ライフの聞き知ったところによれば、ハルワードは絶対の正直を
実行するため、申告しなかった個人的の輸入品に対して実際支払わなければならなかった関税一
方二千ドルの小切手を、自分から進んでカナダ政府に送った人である。

ライフはこの人こそ信頼して労働者側と十分に、誠実に交渉できる人であり、この人こそも勞
働者の望むものも、必要としているものも知っている人だということを感じた。ハルワードが勞
働界の人たちと会って話をしたとき、その人たちは彼のうちに新しいタイプの経営者を見た。

このことはイデオロギーの激しく闘われていたヨーロッパのある地方で十分に証明された。ド
イツのルール工業地帯にコミュニズムが恐ろしい勢いで侵入していた戦後の危機をはらむ時代
に、ハルワードはドイツの各都市を歴訪して数千人の労働者と会い、労働者と経営者の双方にと
ってコミュニズムより偉大なイデオロギーがあるということを、自分の経験から割り出して説い
て回った。その結果、マルキシズムに訓練された大勢の労働者たちが共産陣営から脱出してMR
Aのデモクラシーへの闘いに参加した。

そのカナダ人は言っている。「私のような人間はジョン・ライフの生活から多くのものを学び
取ることができると思う。彼は工業界の現状では一種の内戦が必然のものであるというような敗

北主義的な態度をうけつけなかった。私たちに必要なのは、彼の妻が先ず自分を変え、そして夫の変るのを助けてやった、その謙讓な気持と勇氣とである。彼ら夫婦は先ず自分たちの家庭から出發して融和をつくり出した。そうした融和の精神は各自の動機の根本的改変と、その結果各自が見いだす相手にたいする信頼に根ざしていたわけである。工業界の場合も家庭の場合とおなじことである。どんな職場にしようと、動機の改変と相互信頼の樹立なしには人間同士のあいだの融和はとうてい得られるものではない。

マス・コミは日に増し世界を縮めている。日に増し私たちがどうしたら仲よく暮して行けるかという問題が切実になって来ている。工業化された国々に住んでいる私たちにとって、工業界の融和——つまり経営者同志、経営と労働との融和——が国家の存立条件となって来た。

ライフ夫妻の見いだしたものが、私たちの工業界の今日直面している新しい情勢を開く唯一の確かな鍵であると、私は深く確信している。大きな事業は大きな労働組織と同じように日増しに大きくなって行く。経営側も労働側も今日では一様に、どんな技術的訓練をもっても解決できないような、あまりにも大きな、そして深刻な諸問題に直面している。技術的訓練だけではこの時代における工業の根本的の必要は解決されない——そうしたものは信頼できる人間を作り出すわけではないから、人間同士のあいだの信頼を作り出すというわけにはいかない。工業界にた

いし、また経営者側とひとしく労働者側にたいし、ジョン・ライフが寄与したことは、彼が信頼できる人間になったということである。ケンタッキーの鉱山で最後まで彼を推進させてくれたその頑強さは一つの勇気となり、その助けによって彼は岩山のように自分の主義の上に頑張っていたのである。工業界の真の任務について私がどんなに彼と話し合いをしても、私たちのどちらかが国家への責務を見失っている派閥的権利を擁護するような議論に迷いこむ心配は全くなかった。

頑強で根強い労使対立という考えから全く解放されていたということが、彼の会う経営者たちの考えを変えさせずにはおかなかつた。私のような人間は誰でも、産業界の私たちの多くが学ばなければならぬものを、彼から学び取ることができた——つまり、個人の改変が産業界変革の条件だということである。彼は謙讓な、それでいて人を信服させずにはおかない態度で、私たちすべての人たちの心に起る個人的改変なしには産業が大衆の人たちの必要をかなえてやるという天与の使命を全うするに必要な融和を作り出すことができなことを教えてくれた。ジョン・ライフにとって産業はもはや衝突する意思と解決できない諸問題の闘いの場ではなく、あらゆる種類の人間が一つに結束した世界を築くために、それぞれの国内で融和を作り出す豊かな土地なのであった。

経営者としての立場で、私はジョン・ライフのような人間の生活の挑戦を全面的に受け入れている。人類の必要のすべてにたいする世界的責任を引き受けることは、特にこうしたイデオロギの時代においては、経営者たちの義務である。それ以下の考え方は、すでにほかのイデオロギに向おうとしている大多数の人たちの心をつかむには、あまりにも小さすぎると言わなければならぬ。経営者側の私たちがこの挑戦を受けて立たないかぎり、私たちは出場しないで勝負を棄てたことになるだけの話である。もし私たちが本当にそれを受けて立ったならば、経営者側はジョン・ライフのような器量の人物たちの尊敬と協力を得るだけにはとどまらないだろうと思う。彼らは必ずや労働者側の歴大な力といっしょになって、自由人の自由意思から生まれる夢想だもできないような豊かな、ダイナミックな社会を世界にたいして与えることが出来るし、また必ずそうなるにちがいない」

ライフ自身の属している鉄鋼労働組合の会長ディビッド・マクドナルドは、一九五六年、アメリカ経営者協会の会議で次ぎのような演説を試みた。「労働組合も経営側もどちらも、争いをやめていっしょに仲よく暮す方法を学ばなければならない、という共通な自覚がいま盛り上って来ている。これを達成するために、私たちは基礎的な哲学を必要としている。それは今なお多数の労働者並びに経営者たちの頭を支配している、階級闘争というマルキイストの考え方は絶対に

ない。支配権を奪おうとする闘争の生み出すものは、ただ争いと、憎しみと、不安と、その結果の災害だけである」

マクドナルドの話をうらづけたのはジョン・ライフや経営者たちの中でも正しい考え方をする立派な人たちである。その鍵はライフが自分の経験から悟ったように、新しい基礎的な哲学を實行して行くには新しい人たちが労働者側、経営者側双方から現われることが必要なのである。

「私たちに必要なのは、橋わたしをする人たちであり、道義的指導精神を自分も受け入れ、人にも与える人たちである」とライフは自分のC I Oの先任者アラン・ヘイウッドの死去の報を受けたとき語った。「私たちはそういう人たちをC I O内にたった今必要なのである。そういう人たちが現われたならば、C I Oにも、アメリカにも、私たちの文明にも、もはや崩壊の危険はなくなるにちがいない」

第十四章 コミュニスト並びに反コミュニニスト

にも答はある

世界におけるイデオロギーの争いの本質がジョン・ライフにはっきり判るようになって来た。

一九五四年のはじめ、彼はアメリカの一流人たちや、自由陣営のその他の国々から来た外交官を交えた聴衆の前で演説した。「ただ反共産主義者であるというだけでは無益に等しい」と彼は一同に語った。「ただ単に演壇や新聞紙上で共産主義者を攻撃したところで答は生まれるものではない。私たちはCIOでは共産主義を排除する方法を持っていると考えていた。一九四八年と一九四九年のあいだに私たちはCIOから百五十万人の組合員と役員、及び十一の国際労働組合を排除した。私たちはそうして共産党の牛耳っている組合団体を追放したのである。私たちはただCIOから共産党の勢力をつまみ出せば、二度とわずらわされることがないと考えていた。私たちは彼らを変えさせる方法を知らなかったのである。私たちは彼らを追放した。それで問題は解決すると思っていた。しかし彼らは今なお私たちの組合の中で活動をつづけている。今なお

私たちの労働組合を手中に収めようと全国的にもくろんでいる」

「私は以前口先きでは反共のために尽していた」と彼はことばをつづけた。「それでいて私は特に労働運動内で分裂をひき起すような生き方をしていたのだから、私もこの国内の破壊的勢力の一部だったわけである。しかし私はいま、どんな所に暮しているどんな人にも融和をもたらずような世界を再建しようという、一つの最高の目標を発見した」

ライフは多くのアメリカ人が今でも考えているように、自由世界における共産主義ははるかに政治的陰謀以上のものであることを痛感した。多数の共産主義者たちは熱烈な信念、激烈な献身、そして時には根強い理想主義によって動かされていた。こうしたものを打ち砕くということはその本来の性質上、とうていできるものではないことをライフは知っていた。反共産主義者たちの暴露戦術や、決議や、弾圧は、時によればかえってそうした確信を強化させるだけに終る場合が多かった。それに対応する道はただ一つ——つまり共産主義者にそれにまさるイデオロギーを与えることである。

彼自身は以前から理想主義に近い気持を心に抱いていたし、正しい社会にたいするあこがれをもっていた。共産主義はそうしたあこがれが実現することをいたずらに約束しているのであるが、一方彼らは人の心の憤りや失望の気持をかき立て、それを利用するのであった。ライフはそ

うした感情も経験していた。憤り、貪欲、憎しみ——こういったものは以前から彼自身の生活の中にあつたものである。一度はそうした気持から彼も共産党にはいつていたかもしれない。彼はそのことをよく心得ていた。だから彼は共産主義を理解するには都合のよい立場にあつたわけである。

いま自分の心からそういう動機は一掃されたことを感じながらも、社会正義にたいする熱望は以前にまして強くなつて来るのを知つた彼は、共産主義者を動かしているものが何であるかを悟つただけではなく、そうした献身的な革命家たちの心をつかみ、変えさせて行くためにはどういうものが必要かということを知つた。

一九五三年にモスクワとタシュケントから放送されたのであるが、モスクワ自身がその価値を認めて全世界の共産主義者たちに警告した「MRAは過激な、革命的な人の心をつかむ力がある」ということばはジョン・ライフに多大な興味を与えた。自由世界では今までこんな認められ方をしたものはほかには絶対になかつた。世界共産主義の心臓部にこういうすばらしい認め方をさせたというのは、一体どんな出来事が原因となつたのであろうかと彼は不思議に思つた。

彼はドイツの工業地帯ルールから、北部イタリアから、フランスの繊維工業地帯から、イギリスの造船所や炭鉱から、ブラジルのサントスの造船所から、日本の造船労働者たちから実状の報

告を集めてそれを検討してみた。すべてそうした国々には、烈しい、きたえられた共産主義者たちがMRAの影響により、共産主義を棄てて真のデモクラシーの社会を求め、闘いに走り、物質主義的なイデオロギーを棄てて自由と信仰のイデオロギーに走り、分裂と絶望の革命から融和と希望の革命に走っているという明確な証拠が現われて来た。

ドイツの炭鉱夫であり、前に共産党宣伝員をつとめていたウィリ・ベネデンスのことばを読んだとき、ライフはひどく心を打たれた。ベネデンスは言う。「MRAは世界の社会問題を解決するだけではなしに人間の心の奥底にある根強い必要を満たしてくれるものである」

共産主義者を理解し、その心をつかみ、その人を変えようということは、ジョン・ライフのそれまで考えたこともない問題であった。思想を変えた共産主義者たちの噂を人づてに聞くことと、その一人に直接会おうということは全く違うことである。そこでライフはより大きな革命に転向した、れっきとした革命家たちの一人に会いたいものだと思願していた。その機会は間もなくやって来た。

一九五五年のある日、ドイツの炭鉱夫であり、以前共産主義者であったポール・クロフスキーがワシントンへやって来た。彼は一九二三年以来共産党の一員だった。一九二六年から一九三三年まで彼はルール炭田の中心地帯で宣伝工作の責任者をつとめていた男である。第二次世界大

戦後、彼はその地区の思想教育の仕事を担当させられた。彼は東ドイツでソビエトの監督下で三カ月半の特別教育を受けた二人きりの西ドイツ人の一人であった。

クロフスキーとライフはワシントンで会った。昼食の席上から午後全部をつぶしてクロフスキーは自分の経歴を話した。ほとんど年ごろの同じこの二人は、自分たちに共通した点が多いことを知った。クロフスキーは十四才のとき、ライフと同じく炭鉱で働くようになった。労働者の家庭に生まれた彼もまた貧困と差別待遇に苦しめられ、何とかして社会を変えようと決心した。そんなことからクロフスキーはライフとは反対に、ついには一九二三年には共産党の黨員となった。しかしはじめのうちは彼のことばによれば「自分はイデオロギーのことは大して知らなかった」というのである。

ジョン・ライフは熱心に耳を傾けていた。クロフスキーが現実に関産主義を受け入れたことに別にすれば、このドイツの労働者の経歴は自分の経歴と言っても差支えないほどだった。

そのころ自分は熱心に共産主義の古典の研究を始めたところからクロフスキーは語った。「私は歴史の背後にある推進力が何であるか見つけ出したいと思ったのです。共産主義のイデオロギーは私に社会の発展にたいする満足な説明を与えてくれました。私の疑問のすべてに解答を与えてくれました。それは私に歴史を解釈する哲学を、世界を変革する熱情を、それをいかにして実行に移す

かという計画を与えてくれました」と彼は説明した。

「私はあらゆる人間に正義と充分な物を与える新しい世界を築き上げようと思っていました。しかし一個の人間の、或いは単なる一つの国の繁栄だけでは繰返し起る経済危機や、生産過剰や、失業や、搾取や、帝国主義などの解決にはならないのです。このことを達成するためには、世界的概念にもとづいた社会の全部門の根本的変革が必要だと確信するようになったのです。

ところが第二次世界大戦の終りころ、私はひそかに、心の底から、自分のいま歩いている道が正しいかどうかと疑ってみないではいられないような幾つかの事にあいました。ドイツにおける赤軍のやりかた、東ヨーロッパから少数民族であるドイツ人の追放、ソビエトから返されたドイツ人捕虜の実情——そういうものが私の心を強くゆさぶりました。しかし現実には彼らのイデオロギーに代るべきものも見当らなかったのです、私もそういうことはやむを得ないことだとあきらめて、その罪をヒットラーの戦争のせいにしてしまいました。

やがて一九四九年、私はMRAの劇に招待されました。私が遠い理想だと思って、ただ夢見ていたことを、自分たちの生活に実行している人たちが世界の各地から集まっていましたので、私はその人たちに会ってみました。あらゆる民族、あらゆる国、あらゆる階級から出て来たその人たちは、私がいつも歌っていたインターナショナルを現実の生活に実行していたのです。彼らは

自分たちの個人的な誤ちも、国や階級の誤ちも正直に認めていました。彼らも私のように新しい世界を築くことに身をうちこんでいました。しかし彼らは私のように、自分の高い理想に反するような生き方はしていなかったのです。そのことが私の目を開いてくれたし、私に決定的な決心を与えてくれ、そのために私は自分の哲学全体を考えなおし、自分の生活を変えるようになったのです。その結果私は党から追放され、私の地区にいた党のほかの役員たちもつぎつぎと追放されました。

私はそれまで資本家を憎んでいました。彼らの制度の不正と利己心に対してです。しかし自分の心を全くはだかにして見たとき、自分も不正で利己的であることを認めないではいられません。なるほど、私は労働階級の団結融和のために闘ってはいましたが、自分の同僚たちや自分の妻リナとのあいだに私は融和を見いだしてはいませんでした。私は世界を変革チェンジさせるために自分の精力と、自分の時間と、自分の金をつぎこみました。しかし私は自分の変革チェンジは行なっていませんでした。

左翼の物質主義は右翼の物質主義に反対しています。しかし本当の悪は両陣営の人びとの心の中にある物質主義なのです。人間の動機が根本的に変わらないかぎり、新しい社会はありえないのです。共産主義が解答を持っていない理由はそれなのです。多くの革命家たちが清算されなければ

ばならなかった理由はそれなのです。

そういう理由だから反共は必ず失敗に終るのです。現状を維持しようとしている個人は、世界を征服する目的のためにあらゆる相手の弱点、あらゆる争いごと、あらゆる手段を利用しようとしている一つのイデオロギーの戦術と力には、とうてい対抗できないはずで

ライフはこの目の鋭い、痩せたドイツの炭鉱夫のはっきりしたものの考え方に心を締めつけられる思いがした。それはアメリカ人として彼がまだよく知らない領域の話であった。またしても彼の心は未知の不安を感じるのであったが、クロフスキーの言ったことが否定できないことを彼は知った。それは世界情勢にたいする根本的な、現実的な判断であり、そういう判断を下す純粋さや勇気を持っている人が少ないということも彼は認めた。彼はクロフスキーの変り方が労働者のための闘いにどんなふうな影響を与えたか聞きたいと思った。

その返事は突き刺すようなことばだった。「そのために闘いは高められました」とクロフスキーは答えた。「私はいま社会の根本問題を解決するというより大きな革命の仕事にとりかかっています。まず手始めに自分の妻に対しても、また自分の生活のあらゆる問題にたいしても絶対に正直になるという基本的なものからはじめたのです。絶対の道義標準の上に立って、はじめて私はあらゆる人間が変るというための闘いをつづけることができるようになったのです。」

私はまたコミニズムを恐れていた資本家たちも彼らの資本を世界全体の人たちのために豊かな時代を築くことに使用できるよう彼らが動機を改め、世界的な規模で献身することによって新しい力を得るのを知りました」

ジョン・ライフはクロフスキーとのこの会談から、自分がすでにMRAの中に今までの歴史に見られなかったような階級闘争にたいする解決策を発見していたことを身にしみて感じた。彼はいま、大多数のまじめな共産主義者たちは反共には背をむけてもこのより優れた思想には心を開くことを知った。

彼はまもなくこのことを自分自身に証明する機会にめぐりあった。

ある州で二つの労働組合が争っていた。——一つは反共産主義で、一つは共産主義系ということであった。ジョン・ライフはその労働者たちに会いに出かけた。その大部分は炭鉱夫であった。「炭鉱夫の生活がどんなものか私はよく知っている」と彼はみんなに話した。「坑内へ降りて行くとき、君たちが何を考えているか私は知っている。炭鉱夫の生活ほど苦しい生活は国内を見渡してもほかには見られない」

彼はみんなに自分の経験を語った。十四才のとき坑内へ降りて行ったことや、労働組合を組織するための長年にわたる激しい闘争のことなど。「そうした闘いを通して炭鉱夫たちは『俺は炭

欽夫であることを誇りに思う』とやっといえるようになったのだ」

彼は家族のことにも触れ、コミュニストが戦術として家庭生活をどのように破壊しているかを話すのであった。「この労働者とその妻や子供たちはある人たちがコミュニストの牛耳る労働組合をのさばらしているために苦しんでいる。そうすることは外国勢力の独裁に従うことになるのだ」と彼は言いきった。「私たちはいかなる独裁にも屈してはならないのだ」

やがて彼は自分の家庭のことや、自分が見つけ出した融和について話した。彼はみんなに自身が階級闘争のイデオロギーにたいする解答を見つけ出したことを物語った。

「諸君は家庭を健全なものにしないかぎり、決して健全な労働組合を築けないだろう」と彼は言った。

話し終ると労働者たちは彼のまわりに集まった。反共労働組合の指導者の一人はほかの連中が立ち去るまで待っていた。

彼はジョンに近づいた。「車で飛行場までお送りしましょうか？」と彼は言った。「あなたとお話したかったのです。あなたなら助けて下さるだろうという気がしたものですから」

ジョンを車で送る途中、彼は口ごもりながら自分の身の上を話した。「私の家庭はちょうど昔のあなたの家庭とそっくりなのです。妻は私を乗せて出て行きました」彼は自分の結婚が次第

に破綻を来した話をつづけた。「あなたはむかし酒で問題を起したことを話されましたが、私にもその問題があるのです」

彼は長いあいだ黙りこんでいた。ジョンはこの新しい友達がつぎに言い出すことばを待っていた。やがて相手は口を開いて、自分は反共産主義者だという評判をとっているが、内密にはまだ党を離れているわけではないという話をした。

「私はどうしたらいいのでしょうか？」と彼は尋ねた。

ジョン・ライフはその男に自分が変わったころのことをさらにくわしく話をし、正しい解答を得るために静かに静聴するやり方を説明してやった。しばらく沈黙がつづいた。やがてその男は言った。「自分がどうしたらよいか判りました。もし私が妻の知らないことを正直に打ち明けたなら、良心をごまかすために酒を飲む必要もなくなるのです」さらに彼はしばらく考えていた。

「私は組合の同僚たちに自分が共産党にはいっていることも正直に打ち明けたほうがいいと思います。なまやさしいことじゃないでしょうが、それがただ一つの正しいやり方です」

思い切った決意をいろいろしたが、その男は忠実に全部それを実行した。そのため彼はしばらくその州を去らなければならなかったが、ジョン・ライフが正直に自分の話をしたおかげで、その健全な組合に分裂の危険が忍びこむことは避けられたのであった。今はもう共産主義者でも、

また狭量な反共主義者ではなくなったこの男は、後にこういうことを言っていた。「MRAは共産主義や反共産主義と並んだ第三の道ではない。これは人類を救うことのできる一つ上の道である」

ジョン・ライフはすでにフランク・ブックマンから学んでいた。「情熱は情熱によつてのみいやされる。争い合うイデオロギーで分裂している世界を救うものは、全世界に通用するより優れたイデオロギーをおいてほかにない」

コミュニズムがアジア、アフリカ、ヨーロッパ各国の組織労働者の心を擱もうとして一生懸命なことをライフは知っていた。そこで彼はアメリカの労働界指導者としては珍らしいことをやつた。彼を尋ねて来る大勢のアジアや、アフリカ、ヨーロッパの労働指導者たちに、マルキシズムよりも、コミュニズムよりも、或いはまた気楽ではあるが墮落しているアメリカの物質主義よりも大きな考え方を話してやるのだった。

彼はこんな風に言っていた。「私は自分たちから先ず変つて、共産主義者を知ると共に彼等を変える方法を学ばなければならぬことを学んだ。それ以外に道はない」

第十五章 世界労働戦線の指導権争い

一九五三年に世界のイデオロギーの闘いに不吉な転回の起ったことに気づいたジョン・ライフは奮い立った。この年、世界のコミニズムはMRAを撃滅しようと大攻勢に乗り出したことが明らかとなった。

理由は明瞭である。MRAの世界的勢力が存在しつづけ、拡張をつづけているかぎり、階級闘争の世界的前進の成功は覚束ないからである。それだからMRAは排撃しなければならぬ。こゝとばを変えて言えば、ジョン・ライフや彼のような数千人の人間を何とかどけてしまわなければならなかったわけである。

ジョン・ライフはじっと手をこまぬいて自分が排撃されるのを待っているような人間ではなかつた。

彼は言った。「こんなふうにもMRAを攻撃して来るということに私は大いに興味を抱いた。労

働組合内のたかりやゆすりについて最も声を大にしてわめき立てている新聞や雑誌が、きまっただように私の個人攻撃や、MRAの道義標準を生きようとする私の信念を攻撃してきた。私はべつに驚いてはいない。というのはこういう人たちは寝る間もなく、たえず活やくしているのを知っているから。

私はよく部下のオルグたちに言ったものだ。『もし君たちが共産党の人たちのように真剣に働き、共産党の人たちが闘いの目的を信じているほど労働運動のために真剣に信念をもっていたら、われわれの労働運動ももっとずっと大きくなっていただろうと思うよ』

MRAにたいする攻撃は今後もつづけられるだろう。ますますひどくなることだろう。一人ひとりが考えて対処しなければならぬことだ。われわれの大会でも反対されるかもしれない。そのときは私がそれに答えよう。彼らがまちがった目標のために闘っていることを私はよく知っているから、はっきりと誤りを指摘することができる。私はこのたびの攻勢にべつにあわててはいない。私たちが解答を生きることそれ自体が解答であるのだ。

私をはじめMRAに会ったとき私の胸を最も強く打った唯一つのことは、それが単なる反共グループの人たちではないということであった。演壇や新聞でコミニズムといくら闘っても解決をもたらすものではない。解決は先ず私が神に支配されることから始まらなければならぬ。

解答の出で来るところはそこしかないのだ——君たちの一人ひとり、そうだ、君たちと私から。私はこの闘いをやりぬく。そりゃ自分の地位のことも考えないではない。年収一万八千ドルを貰う地位のことを。しかしこれに乗てなければならぬなら、それでもよい。その決心はずっと前からできてゐる。友人の幾人かが私から去って行くなら、私の心は痛むにちがいないが、仕方があるまい。私は日夜神からの導きによって前進しつづけて行かなければならぬし、またそうするつもりである」

一九五三年と一九五四年という年はジョン・ライフの生涯にとって、ひいては自由世界にとっても、闘争と信念のあわただしい年であった。

その話をこれから語らなければなるまい。

ジョン・ライフはそれまで一度も Kommunismus に同情的だったことはなかった。もし尋ねられたならば、彼は共産主義の哲学は民主制度と相容れない敵意あるものとして反対であると答えたであろうが、彼は組織団体の仕事で忙し過ぎたので Kommunismus について、大して考えても見なかった。一九四五年までに Kommunismus は、アメリカの労働界にすでに三十年間も滲透し影響を

与えていたのである。大半のアメリカの労働指導者たちはコミニズムがアメリカの労働界に政治的進出をはかることに對しては敏感に反對していた。しかし世界的なイデオロギーとしてのコミニズムを理解する人は少なかった。

ジョン・ライフは自分の生活を変え、自分の家庭内の道義的敗北と、自分の仕事をつらぬいて
いる憎しみと階級闘争に解決を与えようと決心したときに出あった、激しい反撃にはすっかり驚かされてしまった。なぜなのだろう——共産主義者たちが権力を握ろうとした大っぴらな政治的戦術に自分が反對したときにはなぜ特別の攻撃をうけなかったのだろうと彼は不思議に思った。なぜ自分の全生涯と仕事に妥協のない道義標準を当てはめようと決心した今、急に激しい、そしてあくどい全面的攻撃を突然うけるのだろう。

むしろ彼は自分の新しい生活によって道義的に挑戦された人たちから攻撃の火の手が上がるものと覚悟をしていた。それは当然だった。しかし今はじめて彼はMRAのイデオロギーの絶対道義標準が、世界コミニズムの基礎をなしている階級闘争の進行に大きな障害なのだということ
を悟りはじめた。CIOの専任副会長という新しい任務についてみて気づいたことは、労働戦線
内部や、労使間の分裂や対立を解決しようとして闘うことに、彼は常に誰からか攻撃されるとい
うことであつた。その結果、彼はコミニズムの本質や、自分に加えられたこうした攻撃の理由

さらに歴史の現段階におけるMRAの意義を理解するようになった。

ジョン・ライフがCIO専任副会長に任命されたのは一九五三年のことであった。一九四六年から一九五三年にわたり、七十五カ国の全国労組指導者、地方労組役員、職場代表、一般労組員たちは、スイスのコー、ミシガン州のマキノ島、あるいはそれぞれの国のMRAセンターで訓練を受けた。彼らは総計七千万人以上の組合員を持つ労働組合団体にそれぞれ属していた。

世界中の労働者たちは、はじめて、コミユニズムの世界的進出に挑戦する積極的なイデオロギーのよびかけに応じて立ち上りだしたのであった。世界共産主義がこの事実を認めていたという証拠は歴然としていた。

たとえば一九四七年に世界労働組合連盟の人でヨーロッパのあるコミunistが日本を訪問した。彼は大勢の日本の労働組合指導者に会ったが、その中で彼は二つの警告を発することを忘れなかった。一つは「アメリカの帝国主義」であり、他はMRAであった。彼にいわせると第二次世界大戦直後、北部フランスの鉱山地帯ですでに計画されていた内乱と共産党による占領が、労働指導者と雇用主たちの共同作戦によって撃退されたが、その人たちはことごとくMRAで訓練を受けた人たちだったということであった。

ドイツのルール工業地帯にまたがっている北部ライン・ウェストファリアの共産党の議長は、

一九五〇年に、自分の執行委員会の全委員が「MRAのおかげで役に立たなく」なったので入れ替をしなければならなくなったといっている。

ルール炭鉱労働組合代議員の共産党の票が一九四八年の七十二パーセントから一九五〇年の二十五パーセントに落ちたとき、ドイツ鉱山労働者組合の執行部の一人であるフーベルト・シュタインは述べている。「これはMRAに負うところが多い」一九五二年にはすでにその率は九パーセントに落ちてしまった。

フランス工業界もまた影響を受けていた。フランス繊維労働者組合の書記長モーリス・メルシエは一九五二年に国家的にこの人ありと知られている経営側、労働側の人たちと七十以上の工場から選ばれた労働者たちをふくむ繊維業界の強力な代表団をスイスのコーにつれてきた。

メルシエ本人は第二次世界大戦までの長い年月のあいだフランス労働組合界の指導的共産党員の一人であった。大戦中彼はフランスの地下運動を指揮した八名の中一人であった。しかし大戦直後、彼はコミュニケーションに幻滅を感じ、もっと内容のある、もっと納得のいくようなイデオロギーを探し求めているうちにMRAにぶっつき、心の底から転向してしまったのである。コーへ代表団をつれてきたことは彼の努力の賜物である。

代表団がフランスに帰国した後、長年低賃金の繊維工業界にわだかまっていた憎しみが消え、

その代りに経営者は労働者の要求を素直に理解するし、労働者も産業界の問題を理解するようになったことが注目された。何回か交渉をつづけるうちに組合側と経営者側はこれまで結んだことがないほどりっぱな契約を結び、六十四万八千人の労働者が十六パーセント半の昇給を受けることになった。この契約はフランス及び他のヨーロッパ諸国の工業界のモデル・ケースとなった。この契約は後に更新されたが、労働条件は更に改善された。賃金は三十六パーセント上りながら、生産費は十五パーセント下った。労使双方の少数の指導者たちが動機を根本的に変えたことによつて、「誰が正しいかではなく何が正しいか」という政策に到着したことが、この工業に新しい精神的、経済的雰囲気をもたらすきっかけとなったのであった。

メルシェ自身一九五三年にはっきり述べている。「現在一つの革命がフランスの産業資本家と労働者のあいだに進行している。MRAがその人たちを一つに結び、その考え方を一つの方向に導いている。憎しみの叫び一つ起らず、労働時間は一時間も失なわれず、一滴の血も流されない革命——MRAが諸君に呼びかけている革命はこれである」

ヨーロッパの自由諸国だけではなしに、すべての大陸にも見られるこれと同じ動向は、新しい要素が活動している証拠である。この要素は何ものにも反対せず、それでいてマルクスの経済理論よりはるかに根本的で、はるかに実地的であることを証拠立てている。

それゆえ共産党の反撃は覚悟しなければならなかった。

一九五三年の春モスクワ及びタシュケントのラジオから、MRAに反対する九つの放送が行なわれた。タシュケントはインド及びパキスタンの国境に近い、ソ連国内の強力な宣伝発信地である。

その放送の一つは世界の共産主義者たちに向って叫んだ。「ここ数十年来MRAがイデオロギ―戦線に活躍している。それは過激な革命精神の持ち主をかちとる力を持っている。これは階級闘争を善と悪との永遠の闘争に置き換えている。……それはすべての大陸に橋頭堡を築いた……それは現在世界全体にわたり全面的拡張の決定的段階にはいつている」

モスクワの新聞「ブラウダ」、「イズベスチア」及び労働組合の機関紙「トルウド」はソ連の内向けにそういう攻撃を繰返していた。ついで世界中の共産党役員及び党の指導者たちは、「階級闘争に危険なもの」としてMRAを攻撃するよう指令を受けた。彼らは直接には、あるいはなるべく疑いを受けないような「同志」を通じて、自由諸国のあらゆる生活部門にはいりこんでいるMRAの計画を妨害するよう命令されていた。

また各国のマルクス主義労働指導者たちも、その多くは共産党員でもなく、またある者は反共主義でありながら、ただ彼らが階級闘争を信じているという理由で、本人が意識していようが、

いまいが、MRAにたいする共産党の世界的攻撃に利用された。

この戦術のつぎの攻撃目標が反共産的なICFTU（国際自由労連）の一九五三年ストックホルム大会に集中したことは多くの人にとっては大きな驚きであった。全体会議の始まる直前、書記局のあるメンバーたちによって準備された一つの報告書が執行委員会に提出され、論議された。この報告書の中にはモスクワとタシュケントのラジオ放送、及び世界各国の共産系新聞が行なったMRA攻撃の線に忠実に沿った各種の主張が収められていた。しかし執行委員会は何らの決議も行なわなかったし、この問題は全体会議の席上には全然持ち出されなかった。それにもかかわらず、それと同じ主張をおりこんだ報告書が世界中の新聞に発表され、しかもそれが大会の承認を得たICFTUの公式の方針であるという印象を与えるような方法で伝達された。

この話はその背後に何が隠されているのか、或いは自分たちがどういう方法で共産党の戦術家たちに利用されているのかという思想的背景に無知な多くの新聞によって、世界中に伝えられた。

しかし編集者たちの中には目の開いた人たちもあった。「ICFTU公報の中にあるこの報告書の出所はどこなのだろう？」とスイスの首都ベルンの最大の新聞「デル・ブンド」の外務担当記者は知りたいと思った。

「これは宣伝法をよく心得ている共産側の流した虚報である。相手とMRAの双方に疑惑を起させて混乱させる意図のもとにモスクワが他人の巢の中に生んで行った郭公の卵である。

ノルウェーでもオスローの日刊新聞「ファールト・ラント」の編集者が一九五三年九月二十五日附で書いている。「MRAはかつてヒットラー、ヒムラー、及びその仲間に相当な心痛、頭痛のたねを与えたが、現在はモスクワを中心を置く世界共産主義がそれを引きついでいる……」その編集者はいわゆるICFTUの報告書なるものは、「共産党の宣伝料理が、世界中にくばられたもの」であるときめつけていた。

世界中の全国的労働組合指導者たちからこの報告書にたいし嵐のような抗議が巻き起こされ、労働者の良心と信念の自由に干渉するものとして、それぞれ個人的にICFTUの役員や世界中の新聞社に送られた。

イギリスの全国労働組合役員の一団は、当時運輸有給職員協会の全国会長であり、イギリス労働党の全国執行委員であったジェームズ・ハワースを代表者として、直ちにイギリスTUCの議長トム・オブライエン卿に当ててつぎの電報を送った。「その報告の意図するものは不正、かつ虚偽であり、その発表時期も当を得ていない」

アメリカではニューヨークの社会民主主義の週刊紙「ニュー・リーダー」の主筆ウィリアム・

ポーン博士はそれから数カ月後に書いています。「昨年の夏以来、ほとんど世界中のあらゆる国々でMRAの実体とその功績についての論議が沸騰している……その結果MRAは大体勝っているようだ」

表面上ICFTUというようないに尊敬されている団体の支持のもとに発せられたあしした非難は、世界の各地に多大のショックを与えたが、時がたち、新しい事実が明るみに出て来るにつれ、その衝撃の影響も薄らいで来た。

「反共主義のICFTUの書記局がMRAに向けた非難をモスクワも踏襲していることは考えさせられることである」

各国の労働組合の人たちは、階級闘争がもはやバリケードを敷いた市街戦ではなく、原子戦争と世界の破滅を意味しているような時代においては、その思想は時代後れであることをますます確信するようになった。はじめて彼らは、世界の労働者たちの本当の任務は人びとを分裂させることではなく、融和させることだということを悟ってきた。

しかしながらこのストックホルム報告書は世界共産主義がMRAにたいして慎重に準備していた攻勢には実に都合がよかったのだ。それが世界の新聞に発表されてから二日後、ジョン・ライフは、彼がMRAと関係しているという理由で槍玉に上げられ、ニューヨークのいくつかの新聞

紙上で手ひどく攻撃された。

これはアメリカの労働戦線にたいし攻撃の火蓋が切られたようなものであった。アメリカ国内各地の論説寄稿家たちはその非難に同調して攻撃を開始した。各新聞紙は急に労働運動の成否にたいして極度の関心を持つようになった。常に広い見解を持ち、その間の事情をよく知っている人たちには、これが計画的な中傷によるものであることは誰の目にも明瞭になって来た。

一九五三年の秋、CIOの大会がクリープランドで開かれた。出席している代議員の多くはその事実を知らなかったが、世界各地ではこの大会を見守っていた。表面上いつもの通りの大会の議事の背後には、イデオロギーの問題が数多く含まれていた。特にその一つの問題の中心は専任副会長選出の問題であった。前年の春ジョン・ライフがその地位に昇進したのは、任期中にアラン・ヘイウッドが死んだのでその空席を埋めるための任命によるものであった。今はじめてライフの選挙の問題が大会に持ち出されたわけである。

CIO自体もいまだかつてない危急存亡の段階に達していた。フィリップ・マレーの有能な指導のもとに、この団体はアメリカではもちろん、世界労働界の中も最も強力な勢力の一つとなっていたのであるが、前の年にフィリップ・マレーが死んだために、偉大な高潔さと精神力をそなえた中心人物が欠けたのである。彼がCIOを構成している多くの違った分子を一つに融和させ

た力は多くの人の想像以上のものであった。

なるほど一九四九年には共産党に牛耳られていた十一の労働組合がCIOから追放された。しかしアメリカ労働界内部ではイデオロギーの闘いは継続されていたし、事実、表面では反共主義者だと公言しながら、心の中ではやはり階級闘争に身を捧げていた人たちによって、巧妙に手際よく、むしろ強化されていたのである。

大会の始まる前の週には執行委員、本部付役員、CIO幹部たちの集会が行なわれた。だれもが専任副会長選出の問題を考えていた。しかしその思想的意義を把握していた者はわずかしかなかった。ジョン・ライフとMRAとの関係が問題になった。ある者は賛成し、ある者は反対していた。そのときになってもまだ執行委員の中には、この大会に先立って左翼の過激分子たちによってライフをおとしられるため、どれほど沢山の虚報や不明朗な宣伝が州から州へと流されていなか気がつかない人たちもあったのである。その人たちはまた彼が今までそうしたものと同様に、どれほどの時間と勢力をむだにさせられていたかということにも気づいていなかった。

当日の成行きは多くの人たちを驚かせた。その模様は当日列席した人たちの中の数人がつぎのように、手にとるように語っている。

まずCIO国際部長が年次報告を発表した。ストックホルムで行なわれたICFTU大会につ

いては単に「MRAに関する報告書が提出された」という一行でかたづけられ、その他のことは少しも触れなかった。

しかしそれに触れたということで十分であった。すぐ幾人かが起立した。ジョン自身は無言で席についていた。

「これはわれわれがICFTUのMRA非難を支持しているということではないんですか」とある全国組合の会長が叫んだ。

「ちがいます」と議長は答えた。「その問題はただICFTUの執行部で論議されただけです。

ICFTUがMRAを非難した事実はありません。大会の議題にさえ出されませんでした」

「ジョン・ライフはMRAに深入りしすぎている」とまた一人が不平を訴えた。「私はどんなことがあっても彼に反対する」

「イギリスの労働組合総協議会もAFLもこの問題では何らの態度をも取りませんでした」と議長は反論した。「われわれだけがそういうことをする必要がどこにあります？　みな個人の良心の決定にまかしています。私はこの問題を小委員会に付託することを提案します」

「いや、みんなにここで話して貰おう。私は喜んで聞こう」とジョンは言った。

「こういうような話はこの席で言うべきではない。混乱を引き起すだけだ」と別の組合の会長が

抗議した。ほかの二人の組合会長もこの問題を取り下げにしたいという申し立てを支持した。

すべての人がその言いたいことをいい尽したとき議長はジョンのほうを向いて言った。「専任副会長もこの機会に自分の立場を説明すべきだと思いますが」

ジョンは静かに口を開いた。「あなた方の中にはMRAの人間に会ったことのある人もいるし、またまだ会ったことのない人もいるでしょうが、いま諸君の目の前にいる人間もその一人です。諸君はみんな私を知っている。私が諸君にまじってウィスキーや、ポーカーや、すべてのことをやって暮していたことも知っているはずだ。しかし私も諸君の多くとおなじように母の膝下で聖書や、祈祷や、道徳基準を信じるように育てられて来たのです。ただ諸君とおなじように成長するにつれ沢山の余計のことも学んだのです」

会場は今や静まり返っていた。

「もうずいぶん昔の話ですが、事態が絶望的になり、どうにも身動きができずに困りぬいていたとき、私はMRAにあって自分の問題の答を得ました。しかし私は全面的に変ったわけではなく、ある程度はもとのままでした。そのことは今でも私の良心をとがめています。諸君は私がフリップ・マレーとパン・ビトナーを応援していなければならなかったときに、徹夜でポーカー勝負に耽り、翌朝赤い目をして起き出したことも見ていられるはずです。しかし一年前、私は

絶対の正直、純潔、無私、愛の道義標準に直面し、毎日神の導きを受け入れようと決心しました。

それ以来あらゆることが違って来ました。私は心の平和と幸福な家庭を味わっているばかりではなく、新しい責任感と、自分の仕事と労働界のために献身する熱意を見いだしています。私はいま自分の全能力をあげて生きたいと思っています。

「私たちは世界平和についていろいろ話します。しかし平和というものは単なる観念ではなく、私のような人間が違った人間になることだということを痛感しています。手始めは自分の心の平和を得ることです。どんな決議をしたにしても私を変えることはできなかったのです。神が私を変えて下さったのですから」

誰にしるジョン・ライフが正しくないことをやめ、ウィスキーとポーカーを棄てたことに反対することはできないはずです。もし私のような組合の人間がMRAにあって正直なまともな人間になり、仲間の人たちに私欲のない愛をもって対する人間になれたとして、それが労働界の邪魔になるでしょうか？ もしそれによって私が再び幸福な家庭をとり戻し、これまで以上の責任感を持って自分の仕事に当るようになったとしたら、それが労働界を傷つけることになるでしょうか？」

「アメリカの私たちの仲間の多くはMRAを信じています。MRAの信念が間違っていると
人はこの部屋に一人もいないでしょうが、はたして何人がその信念を生き
ていまして。私たちはコミニズムに反対する決議をします。しかし、こ
こに一つの力があります。これこそコミニズムを変えることによって
コミニズムを解決する力です。さて」とライフはことばを結んだ。「私
について諸君がどのような決定をされようともそれは自由
です。諸君がどう決定をされようと私は恨みに思わないし、常に諸君
の友人でありたいと思う私の決意は変わりません」

彼が話し終ったとき誰も口をきく人はなかった。やがて沈黙を破
って執行委員の一人が立って言った。「専任副会長のことばを
みな聞いたわけだ。われわれはこの人の生き方を見てきてい
るし、この人の生活の質を知っている。私は自分もそういう生き
方ができたらと思うだけです。次の議題に移ることを私は提案す
る」

嵐はおさまった。その大会が終ってから数日のあいだ彼の同僚の
多くがジョン・ライフにそれぞれ個人的に深い感激のことばを伝
えた。CIOの副会長の一人は翌日彼をわきへ呼んで言った。「私
は昔から君を信頼していたが、昨日君が自分の年俸一万八千ドル
の地位を棒に振っても構わないという態度をみせたとき、君のい
つも言っていることが判ったよ。ジョン、私は君を尊

敬する。私はいま君をこれまで以上に信頼するようになった」

また別の全国組合の会長も彼に打明けて言った。「あなたの昨日言われたことばは私たち大勢の者の心を深く感動させた。たしかに私は心の底まで感動させられた。今まで私は嘘をついていた」

ジョン・ライフは驚いた。「君は私に一度も嘘をついたことがないじゃないか」と彼は言った。

「そう。しかし、私は神に嘘をついて来たからね。妻が今年の夏病気になったとき、私はもし妻がよくなったら自分は今までと違った生き方をする」と神に約束したのに実行しなかった。私はそのことで良心に咎められている。私もあなたのような心境になることができたら、とと思っているのだが」とその男は言った。

それにたいしてジョン・ライフは答えた。「君にだってできるさ。君は今まで自分の妻君にたいして絶対正直になったことがあるかね？」相手は頭を振った。「そこから始めるのさ。私もそうしなければならなかったんだよ」

大勢の人たちの必要を満たそうというジョン・ライフの努力は、こうした攻撃を受けている間にもつづけられていた。

三人目の男は彼に言った。「私は昨日までさっぱり分らずにいた。君があれば本気だということも知らなかった。私たちの大部分の者は知らなかったよ。実は昨日まで私は君がこの地位にとどまることに反対していた。私は自分がおとなしく黙っていたら、ひょっとしたらこの地位は自分のところへ回って来やしないかと思っていたんだよ。ジョン、いま私は君を支持しているよ」

ジョン・ライフの飾り気のない正直さのおかげで問題の真相はすでに明らかになった。CIO執行委員会での彼の同僚である運輸サーヴィス労働者組合の会長ウィリアム・タウンセンドは後に「ピッツバーグ・クーリア」の自分の担当欄に（一九五四年四月二十四日）書いている。「MRAは献身的な運動であり、組織労働界がMRAに対する立場を再吟味することはりっぱに役に立つことだと思われる。それはMRAの利益になるというよりはむしろ組織労働界自体の必要を満たすためである」

タウンセンドは、これまでジョン・ライフを攻撃していた人たちは、ニグロの労働指導者である彼自身が、幾年も前から疑わしいと思っていた人物ばかりだということに急に思い当って驚いたのであった。

執行委員と幹部たちの会合があつてから一週間目に開かれた一九五三年大会で、ウォルター・

ルーサーはCIO会長に、ジェームズ・ケアリは財務部長に再選された。専任副会長の候補者推薦が要求されたとき、鉄鋼労組の全国会長ディビッド・マクドナルドがマイクの前に進み出た。

「私はわが良友ジョン・ライフを推薦する」と彼は言った。

ほかに候補者推薦がなかったので、ジョン・ライフは万場の喝采を受けてCIO専任副会長に選出された。

このようにジョン・ライフにたいして圧倒的な擁護が行なわれたにもかかわらず、世界の二、三の国々には直ちにこの事実を歪曲しようという試みが行なわれた。CIOの選挙から二日目、ブリュッセルでイギリスの運輸有給職員協会全国会長ジェームズ・ハワースは、明らかに虚報を信じていたらしいICFTUの事務総長から「あなたはクリーブランドのCIO大会がMRA反対の決議を通し、ジョン・ライフはそれと手を切る条件で選任されたことを聞かれましたか？」という質問を受けた。幸いなことにこのイギリスの労働組合指導者は事実を知っていたので、その事実を説明してやった。とは言ふものの誰がこういう噂をひろめたのか、どうしてこんなに早くブリュッセルにまでその噂が届いたのか、彼は不思議に思わずにはいらなかった。

ジョンはそういう誤った噂がたっていることを知らされた。彼は直ちにICFTUの会長と事務長に打電した——「CIOがMRA反対の決議を行なったと諸君は聞かされたらしいが、それ

は事実ではない。また私がある条件のもとに選任されたと伝えられているらしいが、条件など一つもない。わがC I Oの規約もアメリカの憲法もすべての人間に良心の自由の権利を認めている

しかし虚報はあくまでも自由諸国全体にひろまった。数カ月後、ワシントンに駐在していたヨーロッパのある大使が、M R Aが世界労働界に寄与している事実の報告を求めたとき、この大使館付の労働問題担当官はさきにブリュッセルに伝えられたと同じ話をして大使を誤解させようとした。しかし幸いにしてその場に居合わせたほかの大使館員たちがジョン・ライフ自身から送られた証拠書類を持ち出した。大使は納得し、驚いたが、偶然のことで外交団内部にまでそういう勢力が網を張っていることをいま更のようにはっきり認識した。

翌年、ロサンゼルスで階級闘争に解決をもたらそうとしたジョン・ライフの闘いを阻止しようという企てがさらに行なわれた。ロサンゼルスのC I O執行委員会のある会合で、以前彼を攻撃したと同じ人たちがライフを窮地におとし入れようとした。執行委員の大半はこういう攻撃は不当であるばかりではなく、C I O役員の言論の自由に干渉するという危険な先例を残し、かつ、個人の精神的信念にたいするゆゆしい侵害であると感じた。

ライフ自身は動じなかった。彼は自分たちが生活の中で道義的混乱を起しているために、故意

の宣伝により歪められた情報にまどわされている同僚に大胆不敵に挑戦した。そういう中の一人に向って彼ははっきり言った。「君は自分で道義的基準に基いて行動しようとしたことがないから、判るはずはない。君は労働にたいする道義の必要について長々と演説するが、君自身に道義の必要はどうかね。君は鼻づらをつかまれて引き回されているだけだ」

とは言え、彼は同僚たちにたいしゆるぎのない信頼と忠誠を傾けていたのだ。彼らの一人びとりが最高の目標に従ってものごとを考え、断乎として行動するよう助けることができた。彼らのは多くは心から人道主義と理想主義に動かされていたので、冷酷な「骨肉あいむ」世界よりも優れた世界を念願していることを彼は知っていた。彼はその人たちのなし得ることを信じ、たゆまず彼らの見解を広める努力をした。

その中のある者に向って彼は次のように書き送った。「もしアメリカ労働界の私たちが、理解と変革の雰囲気を作り出そうという目的を持つこの積極的な力に反対しただしたなら、私たちは平和と正義のため闘っている全世界の労働者の信頼を失なうであろう。同時に私たちはたとえそういうつもりはないにしても、神を信じないマルクス主義者とコミニストたちの味方をしていることになる。彼らこそMRAが強調する道義標準に誰よりも反対している人たちなのである」

疑惑の雲も晴れて、ジョン・ライフは再び万場一致で専任副会長に選出され、一九五五年十二

月、AFL・CIOが合同するまでその任にとどまっていた。

第十六章 安定の秘訣

今ではジョン・ライフの背後には一つの安定したインスピレーションの源がひかえていた——彼の家庭である。バージニア州アーリントンにある小さな庭を持った楽しい家は、住心地はよいが少しも気取ったところのない家で、彼にとっては本当に力の泉ともいうべき住居であった。彼が南部組合組織運動をやっていた時代のレミントンやゴーシェンの家庭のやかましい、騒々しかった日常と、近ごろの毎日のどけさとをくらべてみると、彼はあらためて、健全な家庭生活がすべての労組組織家にとってどれほど大事なものであるかを痛感した。

今ではローズと、バーバラ、ジョアンナ、祖母たちがそれぞれ手伝うことのできる面はいくらでもあった。中でもローズは組織上の困難な問題、特に人間の性格から起る困難な問題をも解決する道を見つけ出す、特別の洞察力をそなえているように思われることがたびたびあった。ローズは大勢のジョンの友だちの妻君連を親しく知っていたので、ライフ夫妻はよく組合の人たちの

家庭の危機にたいする解決策を相談していた。昔のジョンは家庭の問題を仕事に持ちこんでいたし、仕事の問題を家庭に持ちこんでいた。現在でも彼の仕事の面でさまざまな問題はやはり起っているし、中には彼が今までぶつかったことのないような実に大きな問題もあった。ところが今では彼の家庭は解決を見出すことを助けてくれる場であって、更に問題を増す場ではなかった。

ジョンとローズは自分たちの家族関係を正しくしておかなければならないと決心していた。誰でも大目に見るということはなく、家族の一人一人がそれに快よく応じた。

一夜で奇跡が起ったり、魔法使の杖の一振りで奇跡が起ったわけではなかった。それは徐々の成長による奇跡であった。各自の性格の成長であり、家族の融和した力の成長であり、お互い同士のおもいやりの成長であった。家庭問題はそれでも起ったが、ライフ夫妻は自分たちや同志相手方のためになるような、新しい確実な解決法を見いだしていた。

大勢の人たちは自分の目でライフ夫妻がつかんでいるものを学びたいと思った。

「人はいろいろのことを言うでしょうが、私たちの多くはあんたとジョンさんが今もっていらっしゃるものを羨しがっているんですよ」とジョンの同僚の妻がローズに言った。しかし誰でもアーリントンの家庭で歓迎された。訪問客はアジア、アフリカ、ヨーロッパの各地からやって来

た。ジョンの同僚とその妻君たち——若い人たち、年とった人たち、かつてのライフ夫妻のように今にも二人の仲が破れそうな夫婦たち、手に負えないような人たち、元気いっぱいの人たち、謙遜な人たち、傲慢な人たち——すべての人たちがその暖く歓迎される客間で、万人共通の秘訣を見つけ出すことができた。ライフ夫妻を訪れて人間の変らなかつた人は一人もなかつた。心が空っぽのまま訪れて来た人もいたかもしれない。彼らが帰るときは信念をとり戻し、心から満足して帰って行くのであつた。

ジョンは数多い責任を担っている人間であつたから、やむを得ず家を留守にするようなことゝたびたびあつた。しかし「組合未亡人」になるというような問題はローズにとってはまだ二度と起らなかつた。

何よりも先ず彼女自身がこう言っている。「以前の私とジョンとのいざこざは、あの人が実際に何をしていたかということではなしに、あの人が何をしているのかと私が想像したことがもたになつていたんですもの」今ではたとえジョンがやむを得ない事情でローズを連れないで方々の都市へ旅行することがあつても、彼女も、またジョンも、相手を疑うこともなくなつたし、心の落着がなくなるようなこともなかつた。第二にはジョンがローズを連れていっしょに出かけることが多くなつたということもある。今では彼女はもうジョンが面白く遊んでいる場合でも少しの

邪魔にもならなかったし、生活は全く喜びに満ちあふれていた。彼の仕事の面でも、彼が自分たちの助力を必要としている友人たちと会う時でも、ローズは大事な欠くことの出来ないものとなっていた。そういう面が沢山あった。驚く程多数の労使双方の役員たちは、ジョンが何の隠し立てもしないで、ボーカーの勝負やウィスキーびたり、女の子あさり、或いはがみ言う妻君などの問題をもっていたことを、おおっぴらに認めそれに解決をみつけたというのでそんな解答をしきりに望んでいた。

ジョン・ライフの荒んだ行ないを知っている同僚たちは、彼と妻とのあいだに金銭問題を起さなくなった事実を不思議だと言いつつ合っていた。ライフ夫妻はそれについての質問や、それに関連してのMRA財政に関する質問にもよろこんで答えていた。その二つの問題について二人は今では十分話だけの資格をそなえていた。

「ローズが金をどう使うのか私はいつも不審に思っていたことを白状しなければならぬ」とジョン・ライフは言った。「新しい帽子をいくら買ったって金が全部なくなるわけはない。あいつはこっそり窓からシャベルで金を棄てているんじゃないかと以前よく思ったことがある」

「そう思ったのも無理ないと思うわ」とローズは笑って言うのだった。「ジョンがいくら俸給を貰っていても、私たちが家庭でこたごたを起していたころは、何年たってもうまく家計がきり

回して行けなかつたんですの」ジョンもまた自分はその点ではちっとも聖人ではなかつたと認め
ている。

「しかし」と彼はつけ加えるのであった。「二人がゆっくり落着いてこの金のことをお互いに
正直に話しあったとき——どれだけづつ二人が持っているか、どれだけづつお互いに使っている
かを話し合ったとき——その結果を知って二人は驚いた。私たちはすべてのことを話し合い、わ
が家の家計にどうすることが正しいか二人で結論を出した。私は自分の金使いを注意するようにな
り、それまで考えなかつたいろいろのことを考え合わせてみた。そしてそれがうまく行くこと
を知った」

お互いに金がどこへ消えてなくなるか発見した。一つ一つ穴は塞がれて行った。贅沢な、行き
当りばったりな出費あるいは間違っている出費などは削減された。二人はジョン・ライフの俸給
の使い方をいっしょになって計画しはじめた。以前二人が不可能だと思っていたことが、今では
自分たちにもできることが判って来た。彼らは正しい使い道に必要な金なら自分たちが全部持つ
ていることを発見して実に驚いたのであった。

ライフ夫妻はCIOと全米鉄鋼統一労働者組合がいつまでも変わらずに自分たちと家族の面倒を
みてくれたことにたいし、折にふれては感謝の気持を話していた。なぜならジョンが長期にわた

って重い病気で寝ていたときでさえ、組合がきちんと俸給を送ってくれたからである。彼はデイビッド・マクドナルド会長と、財務部長I・W・エーベルとに対し、全米鉄鋼統一労働者組合の寛大な待遇に胸もつまるほど感動した。

自分たちの家庭を再建し、自分たちの生活の目標を更新させて貰ったことにたいする感謝の気持から、ジョンとローズはますますMRAの世界的事業の財政面にたいして自分たちの分担した責任を果たすことに熱を入れるようになった。

経営者階級の人たち、たとえばマニング一家、チャールズ・ヘインズ、ウィリアム・ウィルクス、そのほか金の使い道と目的にたいする全く新しい考え方を発見した大勢の人たちに会ったことは、ライフにとって大きな驚きであった。そのことをいっしょに話し合っているうちに、ジョンとローズ夫妻はこの新しい考え方をこれから労働者階級にも同じように持たせなければならぬことに気づいた。金銭というものは、もはや単なる個人の満足や、身勝手な我儘や、生活安定の手段につかうものだとみなすわけにはいかないのである。ジョンとローズ夫妻は自分たちの生活の動機の変革を経験した。そこに別の道があることをその経験を通して知った。彼らはたとえ値うちがあるものであろうと、なかろうと、もはや自分たちだけの欲望のために使うことはなくなった。彼らの持っている財産は突然一つの委託物となってしまう。つまり私欲のない革命的

經濟觀をとおし、進んで新しい社会秩序を作り出すという偉大な目的のために使うことになったのである。

ジョン・ライフは昔の組合組織時代のことに思いを馳せてみた。当時ケンタッキー州のトゥイン・ブラランチの鉱夫たちは山間で集会を開き、そこで新しい労働組合に鉱山中のすべての労働者を加入させる仕事に出発することになった。そのころ彼らは大した金は持っていなかった。しかし彼らは一つの主義のために闘っていた。そして自分たちの信じている大きな目的のためにはあらゆるものを犠牲にする覚悟をしていたので、その男たちは喜んでめいめいのポケットを空にした。その仕事を成功させるためには、それが唯一の方法だった。ジョン・ライフ自身は輸送中のその貴重な資金を安全に保護するためにチャールストンへ派遣されたのであった。その男たちは出せる限り持っている金をはき出したのであった。彼がかつて知ったあの輝かしい時代——闘争と犠牲のあの時代——のように、彼はいまそれと同じような心からの動機を持って、心からの献金をする好機があらためて到来したことを知ったのであった。しかも今度はそのころよりもっと大きな目的のためなのである。こんど場合はその金に賭けられている対象はこれまでよりはるかに大きいのである。金というものは物質的な慰安や、或いは贅沢品の高によってその値うちがはかられてはいけないのである。その金を通して各国民の求めている世界を造る闘いに使用する

ことができるからである。

それだからライフ夫妻の金銭に関する話は彼らをはるかに超越した大きな規模をもった話になるのであった。これがM R Aの財政の基礎であることを彼らは知ったわけである。

「M R Aの金はどこから来るのか？」という質問は適切な、大事な質問であることをジョン・ライフは知った。犠牲的な献金などということが例外とされている利欲的な社会に住んでいる人なら、誰でもそういう質問を發するのは、当然の話である。すべてがかけ引きに終始している時代においては、あらゆる人間が秘密の仕掛けがないものかと捜し回っているのも無理のない話だ。

自分自身が新しい動機を経験したために、ライフはM R Aの資金面を理解しはじめた。彼はまたその具体的な事実をつかむことを自分の仕事とした。彼は自分が納得するだけでは満足しなかつた。彼は私欲を離れた経済的動機の証拠をほかの人たちにも見せてやりたいと思った。それはもはや自分の利欲によって動かされる動機ではなく、自ら与えるという気持によって動かされる動機から生み出されたものである。もしこういうことが現代の社会で一般に行なわれるとしたら、何かしら革命的なものが第一歩を踏み出したことになるわけである——マルクス主義者の弁証法的物質主義にとっても革命的であると同様に、資本社会の物質主義にとっても何か革命的な

ものに第一歩を踏み出したことになるわけである。つまり一人の人間も除外されることのないひろがりの中に社会を再建するために、自発的に、犠牲的に自分の生活を参加させることになるからである。

組織実行委員の一人としてジョン・ライフはその具体的な実情を厳然たる数字でつかみたいと思つた。彼は特に一九五三年AFLの指導者たちのために用意されたMRAの資金に関する報告に関心を抱いた。

この報告は驚くべき事実を語っていた。前年度のMRAの支出をまかなつた献金を差し出した数千人の大多数が、労働者、教師、その他低収入の枠内の人たちであつたことである。少数の人たち——四十名足らずの人たちが三千ドル以上の額を寄付していた。この人たちのほとんど総てが、資金と貯蓄の中から大きな犠牲を払って寄付した退職者たちであつたことにライフは注目した。幾十万ドルにのぼる大きな額の寄付金は、それよりはるかに少額のもものが集まつたものであつた。額の大小を問わず、すべての献金者にとって献金するということは眞の犠牲を意味してゐた。「これほどなるほどと感心させられた書類は今まで見たことがない」とジョン・ライフは述べた。彼にとってそれはまた事務の一つでもあつた。なぜならそういう計算書は毎年、政府側の会計検査を受けて保管されるものだからである。

ほかの人たちと同じようにジョン・ライフもその事実を知ってあきれんばかりに驚いたのであった。各国の数千人の男女が進んで資金を差し出し、貴重な財産を売り、中には保険証さえ売り、遺産を差し出し、あるいはささやかな給料から定期的に寄付しているからである。

こうした犠牲はライフ夫妻の心を打った。特にジョンを喜ばせた南部の一国会議員があった。この男は第一に先ず州内で人種的差別に反対する断乎たる立場をとっていた。そのため次回の選挙に彼は国会の議席を失なったのである。第二にこの国会議員とその家族は、それにもかかわらず毎月五十ドルづつ献金していた。

ミシガン州マキノ島にだんだん規模が大きくなって行きつつあるセンターはもち論、各地にも本部を建てて維持して行くために、教師、建築熟練者、大学生たちがそれぞれの時間と技術を提供した。六十名の復員軍人たちは自分たちの貰う年金や特別支給金の中から八万ドルを寄付した。

ジョン・ライフはたびたび友人たちにフランク・ブックマン博士のことばをMRAの経済面の説明の鍵として伝えた。「世界にはあらゆる人間の必要に應ずるだけのものはあるが、あらゆる人間の貪欲に應ずるだけのものはない。もしすべての人間が十分思いやりを持ち、お互いに分かち合うならば、すべての人間が十分なものを持つようになるのではないだろうか？」これほど簡

単な問題なのである。しかし時日がたつにつれ、それは単に簡単だというだけではなしに、實際的であり、革命的なことだということをしてライフ夫妻は経験を通して知った。もしも貪欲と恐怖にたいする普通な人間の動機が、すべてを捧げ、世界再建の仕事に喜びを持って奉仕しようという偉大な、積極的な願望に席を譲るならば、それが達成可能なことにたいし一步を進めた証拠になるのではなからうか。

ジョン・ライフは喜び勇んで自分の物質的財源だけではなしに、自分の身まで捧げた。彼の時間も、力も、すべての考え方も、ことばも行為も、今では自分がすでに引受けた世界的の事業の達成に結びつけられるようになった。病気にかかろうと健康であろうと、彼はただほかの人たちにたいする新しい生活の橋渡しになろうと念願していた。

アーリントン時代はたび重なる重い心臓病の発作で暗い影が射してはいたが、少しでもからだの調子さえよくなれば、彼は病室にはいつて来る一人一人に自分の力の最後の一片まで快よく差し出すのであった。

彼はジョージタウン大学のハロルド・ジョンソン博士に病気をみてもらっていた。病人の信念と心のおだやかさがその医師の心をつかみ、医師は職業的義務の要求する以上の思いやりをもって病人に臨んでくれた。

「恐らくジョン・ライフのような方にはこれから二度とお目にかかれないうしょう」とライフの死後、この腕の確かな、信望のあるニグロの医師は語っていた。「この方が心臓の発作から回復された回数ほとんど医学上前代未聞の回数でした。一九五四年までにこの方はすでに五回の発作を経験されましたが、ほかの人ならその一回で亡くなっただけです」。

あの方がクリーブランドのCIO大会から、からだの調子がよくないと言いながら帰って来られたのを覚えています。私が診察したとき、あの方は大会中ホテルで実はひどい心臓病の発作があったことを発見しました。

あの方は心身を和らげる方法を心得ていられたので、すごい体力を蓄えていられたのです。

あの方は拘束のある境遇を自分の生き方とあきらめていられたので、少しもいらせせず、常に人のことを考えて、長い期間じっと静かに寝ていることがおできになったのです。あの方はすべての人間は平等であるという考え方に身を打ち込んでいられました。あの方はあらゆる階級、民族の人たちに融和の精神を植えつけることに生涯を捧げていられました。たとえそれがあの方の生命にかかわっても、喜んで実行していられました。誰か人のためにやらなければならぬ事があると考えたなら、あの方はどうしても休んでなどいられない人です」

ジョンソン博士は何か偉大なる信仰の前に立っている人間のような話し方をした。「私はジョ

ン・ライフさんは理由があつてこの世に生まれて来られたのだと固く信じています。そしてあの方はあらゆる医学上の計算を超越してこの世にとどめて置かれたのです。なぜならあの方はその目的のために身を捧げられた方だからです。あの方はご自分の生命全体からにじみ出ることばで人々に話をされたのです——すべての人にたいする思いやりの心から。あの方はすばらしい指導者でした」

アーリントンにはまたリトル・フォールズ教会のライフ家の牧師でもあつたフランク・アーウィン牧師もいた。忠実にジョン・ライフを訪問しつづけていた牧師は、病人の心にある謙讓な誠実さの挑戦を感じ取った。それが動機となつて牧師の生活に革新的な変化が行なわれた。

ジョン・ライフを訪ねたある日、牧師はこの前訪ねて来て話し合いをしたことがもととなつて、自分は他人から借用した説教を、自分の説教のように利用した不正直さに心を悩まされたから、これから正直になりたいということを彼に話した。牧師はその次ぎの日曜日にその決心を驚いている信者たちに向つて、特にことこまかに説明した。この正直さのおかげで牧師は多くの信者たちと新しい結びつきを築くことができた。

アーウィン氏はジョン・ライフのことを書いています。「自分はキリストの福音を人に説く身ではあるが、その私にもジョン・ライフは、自分のこれまで経験したものと違うような精神的深み

をそなえた人間のようと思われる。私よりもっと完全なやり方で神の意思に身をゆだねていたように私には感じられた。彼は本気で絶対の道義標準（これはクリスチャンとしての私の信仰の基準でもあるのだが）を生きようと努力していた。

ジョンが心臓の発作に襲われて病院へ連れて行かれたとき、私は彼の牧師として慰めを与えようと思って出かけて行ったが、しばらくいっしょに話をしているうちに、私が彼に慰めを与えるのにはなしに、逆に彼から慰めを受けていることを発見した。彼が実に率直に私の前に自分の生活をさらけ出して正直に話してくれたとおりに、私も自分の信者や、友人や、家族の者にたいして全く正直にならなければならぬ義務があると感じた。私自身の道徳的、精神的な確信がだんだん深まり、強まって来たのも、実は彼の手本があったからだったのである。

私はこの偉大な人から生涯の影響を受けた大勢の中の一人に過ぎない。しかしこの一人の生涯こそ、私たちが神の望みどおりの生き方——文明人の当然あるべき生き方——をすることができるとし、しなければならぬという良い例なのである。

ジョン・ライフはいつまでも私に、誰が正しいかということが問題ではなく、何が正しいかということが問題であるということばを思い出させるだろう。このようにジョンは神が人間の心を私欲のあるものから、自らを与えるものに変らせ、不純なものから純粋なものに変らせようとい

う呼びかけに答えた不滅の証人として立っている。私は彼を知ったことにたいし、神に感謝している」

毎朝ジョンがワシントンの自分の事務所へ出かける前、ライフ一家は朝食のテーブルで「家族会議」を開き、その席でめいめいが朝早く考えておいたり、書きつけておいたことを自由に持ち出すのが例となっていた。「あなた方のもっていらっしゃるようなものを、どうしたら私たちにももつことができるでしょうか？」と大勢の人たちが尋ねるのであったが、ライフ夫妻はそれに対する解答としてこの日常の習慣を話してきかせるのであった。家族の者たちは毎日のように人並みな人間の動機や、家族を分裂させるさまざまな反撥や感情を克服する必要をはっきりと見極め、謙遜な心で現実に考えていたので、そうするには一つの方法しかないこと——つまりみんなが朝、静聴の時間を持ち、お互いが正直になりあう家族会議を開くこと——しかないことをはっきり知っていたのである。

このようにして一家の者のお互い同志にたいする思いやりが、現実になそれを表に現わす形をみつけたわけである。誰一人として完全な人間はいないのである。誰一人私のほうがお前よりっぱだということは許されないのである。ややこしいことでもなければ、浮世離れしている話でもないのである。日常生活の現実問題を扱っているだけなのである。

ライフ夫妻にとっても、まただんだん数を増して相談に来る数千人の人たちにとっても、私たちの生活のすべての細目の問題——つまり仕事、金、慰安、人事関係の問題——にたいする鍵は、家族としての融和であり、その献身であった。もち論、家族の誰一人として突然天使のように純真になったわけではない。彼らは世間並みの平凡な人間である。大小さまざまな問題にたいする反応にはこれからも直面しなければならなかった。しかし今では全部の者が正直な気持と、喜んで先ず自分から変えて行こうという気持で、そういう反応を処理するのであった。各人にとっては自分が正しいということや、相手が間違っていると証明することより、家族としての私たちの融和のほうももっと大切なのであった。彼らは単に世界の再建に身をゆだねた個人同志ではなく、世界の再建に身をゆだねた一家族なのであった。そうした大きな見解の上に立っているのだから、個人同志の食い違いなどは通常ずいぶん小さな、無意味なものに思われ——まもなく消滅してしまふのであった。

ジョン・ライフ自身はその謙遜な誠実さと、地についた考え方で、家族たちに進む道を示していた。彼にとってこれが一日を始める唯一の方法となっていた。静聴の時間に、自分や家族についての健全な真実の考えや、CIOの仕事についての指導者らしい考えをいっぱい書きつけた彼のノート・ブックの全ページは、彼の日常のインスピレーションが有効に用いられた証拠として

いつまでも残っている。

自分の過去の失敗にたいして訪問してくれた家族の人たちに行なった詫言のことは——各人が為し得ることにたいする期待のことはや、また、さまざまな国のさまざまな背景を持つ友人たちにたいする啓発的な考え方や、挑戦を感じさせる考え方——自分の仕事や、「切崩し」問題の処理、不和、贅沢、不正直などにたいする実際的な導き——新しい考え方による世界問題解決の考え方——ジョンが毎朝書きつけることによって捉えた考え方はそういうものであった。

そういう記入の一つにこう書いてある。「この古い世界は人間の作った混乱にすっかり巻き込まれているので、人間の心ではあらゆる問題を解決することはできない。私はそのことを知っている。どうしたら先ず私たち自身を変え、つぎに他の人たちを変え、かくして混乱から抜け出す道を見つけて出すことを学ぶことが出来るか、それには私たちがすべて人間よりはもっと権威ある存在のことに耳を傾けなければならぬ。私たちが正しい道に導いてくれることのできるのは、神の声よりほかにないことを、私は心の底から信じている」

一九五五年二月九日、AFL・CIO 統合促進委員会はマイアミ・ビーチに会合し、この二大連盟統合協定に署名した。ジョン・ライフもその署名者の一人であった。この協定は両団体の別個の最後の大会を経て、一九五五年十二月から効力を発することになった。

そのころにはすでにジョン・ライフの悪化している健康状態は、彼がこれ以上業務執行の責任に耐えられないことが明らかとなっていた。CIOの組合を作り出すためにいっしょに闘って来た大勢の人たちの特色となつてゐる寛大な気持から、鉄鋼統一労働者組合の会長ディビッド・マクドナルドはライフを自分の助力者に任命した。

ジョン・ライフは良心的にその地位の責任を果たそうと努力したが、彼の肉体力には限りがあった。

しかし彼の家族にとって、また親しい同僚や友人たちにとって、ジョン・ライフの精神の偉大さはますますはつきり判つて来た。自分の友人たちや、世界の無数の人たちの幸福を願う彼の燃えるような憂慮の中にあつては、如何なる肉体的拘束も押し流されてしまうのであつた。今や病弱を超越した力をふるい立てて、彼はその心の中に全世界を抱きこんでいた。

第十七章 ジョン・ライフとフランク・ブックマン

「私は自分がまだ少年の部類に属する年で労働組合に入ったことをよく覚えている。自分は労働階級のために奉仕し、報酬も、賞讃も、給料さえも、貰うことなど絶対に考えまいという自分の信念と誓いは、当時非常に深かった。しかし長い間に、私は自分の誓いを破って誤ちを犯して来た。フランク・ブックマンに会うまでの私は、いろいろな点で妥協の生活を送っていた。労働指導者としての自分の真の任務が何であるかということに、彼がもう一度私の目を開かせてくれた」

ジョン・ライフは一九四〇年にフランク・ブックマンに会ったことが自分の生涯の転機になったといつも語っていた。彼はカリフォルニアのブルックデールで開かれたあの週末の会議で経験したことを今でもありありと記憶している。

第一日目の早朝、朝食の一時間以上も前に、ライフの部屋のドアにノックが聞えた。ジョンは

ドアを開いた。そこに湯気の立っているコーヒーのコップを載せた盆を持ってブックマン博士が立っていた。「君が静聴するのにコーヒーでも飲みたくはないかと思ったものだから」とブックマンは言った。

「まるで私もずっと前から『静聴の時』を持っていたような思いがした」とジョンはその話をするとときいつも言っていた。

ブックマンの人間性と彼の個人にたいする思いやりは、労働界に対する彼の信念、「神に導かれた労働者は世界を導くことができる」という大きな使命に対する彼の信念とともに、ライフ夫妻の心を強く打ったのであった。

「自分の敵を変えて自分の友人にする」という彼の挑戦はジョン・ライフにとっては新しい考え方であった。いや、それよりもっと大きな意味を持っていた。労使のあいだの闘いは避けられないものだという前提を承認する彼をふくむ大多数の人たちにとって、それは革命的な新しい考え方であった。この新しい視野で考えれば労使双方とも交って、一つの大きな共通の目的のために融和を見いだすことができることを、ブックマンは教えてくれたのだ。

フランク・ブックマンが若いころから社会正義のために情熱をもやしていたこともライフは知った。二十世紀のはじめのころケンタッキーの炭鉱の生活を通してジョン・ライフの心に深く植

えつけられたと同じものを、フィラデルフィアの貧民街に住む人たちの生活が、ブックマンの心に深く植えつけたのであった。人による人の搾取、貪欲のありさまを見せつけられ、ブックマンは一世紀前のカール・マルクスのように深い憎しみを感じたのであった。しかしその後ブックマンは憎しみはいやすことはできるし、万民のための新しい世界は決して恨みや憎しみの上に築かれるものではなく、ただ自分自身が経験したように、人間の心の革命的な変革の上でなければ築かれないものだということを見つけた。これは理論ではなく、証明された事実であることをブックマンは明らかにした。

彼は言う。「四十年前の私の心は分裂していた。ちょうど現在の各国が分裂しているように、私の心は分裂していた。私の心の中で物質主義が勝利を占めていた。ある日、私の傲慢さと私の物質主義の代償がどんなに大きいかということに神に教えられた。私はそれを認めた。それが第一段階である。まず正直になること」

「私は神に向い、それから自分がそれまで不当な扱いをした人たちに向って『済みませんでした』とあやまった。それが第二段階である。私は神のことに耳を傾けることを学んだ。私は人間や国々に解答をもたらずという神の使命を心にうけ入れた。それが第三段階である」

ジョン・ライフはブックマンが自分と同じ経験に導こうとしていることを、落着かない気持ちで

悟りははじめた。一九四〇年から一九四三年までの時代、自分の家庭が再び融和し、労働組合指導者としての仕事が新たに成果をあげたことなどが、フランク・ブックマンの考え方の実行可能性を彼に納得させた。あるイギリスの炭鉱夫が彼に言ったように、それは「今まで発明されたあらゆる『イズム』にたいする解答である」

「すでに始まっている人間社会の歴大な変革」フランスの外務大臣であった頃のロベール・シューマンがフランク・ブックマンの仕事に対するこの評価は、大変ジョン・ライフの関心をとらえた。ブックマン自身はかつて「すべて個人の變革を基礎にして全面的な變革、經濟變革、社會變革、國家變革、國際變革があり得る」ことについて語っていた。

ライフはまたこれが単なる理論ではないことを知っていた。彼自身の経験から考えても、また百を数える国々にの男女たちの経験から考えてみても「歴大な變革」の証拠はすでに議論の余地もないことであった。

「世界の再建とは普通の人間であるわれわれによって考え、意図されることではないだろうか？」とフランク・ブックマンが言ったとき、また「普通の人間が非凡なことを行なう」と彼が語ったとき、ジョン・ライフの闘志はもえるのだった。普通の人間が偉大な生き方をする能力を持っているというブックマンの信念に、ライフは共鳴した。彼が個人的な問題で悩んでいた暗い時

代でも、高い地位が彼に与えられたときでも、彼は決して自分の奉仕している下部組織の労働者たちと接触することを忘れなかった。ほかの人間ならその地位や権力が増して来るにしたがって、よそよそしくて近づきにくい人間になるかもしれない。しかしジョン・ライフはあくまで普通の人間の仲間、暖かい思いやりのある人間であった。そして政治家も労働者も、金持も貧乏人も、すべての人間は同じように高貴な魂の所有者であるというフランク・ブックマンの考え方に共感を抱くのであった。

ジョン・ライフが一九四〇年にはじめてフランク・ブックマンに会って以来、一度も彼を忘れていないのが事実なら、フランク・ブックマンもまた決してジョン・ライフを忘れなかった。ブックマンはアメリカ国内をあちこち廻っているあいだも、また海外へ旅行しているあいだも、暖かい、啓発に満ちた手紙はvariなくライフ夫妻のもとへ送られて来た。

一九四一年、ますます戦争の深みにはまりこんで行く世界の動乱のさなかに、彼はニューヨークからジョンとローズに手紙を書き送った。「あなた方がたえず人の改変の必要を強調していることと、日常の問題にたいしても神に導かれた解決を見いだしていられるやり方を嬉しく思っています。今日のように世界がいよいよ暗くなって行くにつれ、私たちはいよいよ神の導きが確かであることを見いだしています」八月にはまた彼は手紙で次ぎのように書き送った。「私

たちはたえずあなた方の助力を必要としています。多くの人たちが心の底で望んでいる心の改変を与えるという大切な仕事をするために神がどんなにあなた方を用いていただけるか、ご本人のあなた方はあまりご存知ないのです。私たちは人びとの目を開いてやる努力は、たとえつらくとも最後までつづけていかなければならないのです」

ジョン・ライフの母サラ・アン・ライフが一九四二年五月に亡くなったとき、フランク・ブツクマンは電報をよこした。「まことに、たとえ私が死の影の谷間を歩いていても、私は不幸を少しも恐れまい、なぜなら神が私について下さるから。あなた方みなさんのために祈りながら。フランク」

翌月彼はミシガン州デアボーンからライフ夫妻に手紙を送った。「何というすばらしい友人を神は与えて下さるのでしょう。私はあなた方お二人に感謝しています。もしアメリカ全体が、あなた方のいま抱いていられるような思いやりと分ち合う気持を持ったら私たちの困難のほとんど全部が間もなく終りとなるだろうということを私は確信しています。お会いできたことをどんなに私は喜んでいることか。また会えることを楽しみに待っています」

そのようにして思いやりと友情の花模様は年を追って織りつづけられて行った。四十年代の終りに再び危機が夫婦のあいだに迫って来たころも、ライフとローズはフランク・ブツクマンの心

が相変らず自分たちに向って開かれていることを知っていた。だから一九五二年の鉄鋼ストライキの直前、ジョンとの最後の破局が避けられないと見てとったローズが解決策を求めて再び頼って行った相手はやはりフランク・ブックマンであった。

ジョン・ライフにとって運命を決するような一九五三年のはじめ、フランク・ブックマンはインドから手紙をよこした。「たえずあなたのことを思い出しています。フィリップ・マレーが亡くなったことがどんなに大きな痛手か私は知っています。デイビッド・マクドナルドは親友たちのできるかぎりの援助を必要としていることでしょう。私はいつもお祈りするとき特にあなたのことを念頭においています」

一年後イタリアにいるフランク・ブックマンから思いやりのある手紙が届いた。「私は海を越えた遠い国にいてもあなたと結ばれていることを感じています。昨日社会党の党首サラガット氏と七十分もいっしょに話し合いました。私たちはあなたのことを話題にしました。彼はまもなくアメリカを訪れます」

こうした手紙の中にも世界情勢の動きをうかがうことができた。一九五四年フランク・ブックマンはモロッコのマラケシュからライフ夫妻に手紙を送った。「私はいま世界の美しい国モロッコに來ていますが、ここは楽しい国ではありません。フランス人とモロッコ人のあいだに起

っている問題は、どこにでも見られる個人同士を分裂させている問題と同じように、しごく単純な問題なのです。解決をもたらす人たちを見出しています」

「その上アフリカの将来という本当の問題がひかえています。アフリカは分裂してはばらになるでしょうか？ それとも世界の国々に向ってコミュニズムの解答となるような融和の基礎を見つけ出すでしょうか？ 私たちがここに来ているのはそういうためです。あなたがアメリカから私たちに与えてくれている手本に感謝しています。なぜならそれはどんな情況にもびったり当てはまりますから」

翌年ジョンはフランク・ブックマンの努力が実を結んだことを新聞で読んだ。分裂しあっていたモロッコの国家主義者たちの分派と分派とのあいだに、そして彼らとフランス人とのあいだにすばらしい和解が成立し、追放されたサルタンが平和のうちに復帰することによってモロッコの独立の基礎が打ち立てられたのであった。

このようにフランク・ブックマンの手紙が自分の机に世界の現地の模様を運んでくれているうちに、ジョン・ライフの視野もいよいよ広められて行った。

ジョン・ライフとフランク・ブックマンとが運よく二人で会う場合は、いつもお互い同志に啓発されるのであった。ジョン・ライフはそのように過した時を、自分の人生の最も意義深い瞬間

考えていた。ブルックデールでの最初の会合、彼が住んでいたタホー湖畔へのたびたびの訪問、その後長年にわたっての幾たびかの再会、ジョアンナの洗礼式というような特別のいろいろな出来事、それぞれの誕生日、喜びの時、悲しみの時——これらのすべては一九五三年以後ジョン・ライフがフランク・ブックマンといっしょに世界的の闘いにのり出すことになった偉大な日々への前奏曲であった。

ジョン・ライフはフランク・ブックマンが自分のためばかりではなく、アメリカのために尽くしてくれたことをはっきり認識した。ブックマンの人柄とその事業が正当に世に認められることに、ジョン・ライフは誰よりも先きに喜び勇むのであった。一九五三年彼はフランク・ブックマンの郷里であるペンシルバニア州アレントウンのリーハイ・バレー新聞同業組合(CIO)の会長に電報を送った。その一節に次ぎのようなことが盛られていた。「アレントウンの名士としてフランク・ブックマンに名誉賞が与えられたことを慶賀する。フランク・ブックマンは長年にわたり、国民生活の中に道義標準と社会正義をもたらす闘いの先頭に立って来た。私は一九四〇年以来フランク・ブックマンを知っているが、彼が私の生活に影響を与えてくれたことを通して私の労働組合に対する考え方を根本的に変え健全なものにしてくれた」

ジョン・ライフとフランク・ブックマン——これは偉大な人間同志の友情であった。そればかり

りではない。この二人の偉大な人間は、気楽な関係に満足するのではなく、地上に神の意思を實現させようという共通な誓いの上で結ばれていたのである。この二人がほかの多くの人たちといっしょに決意した仕事は、歴史の方向を変えていくのであった。ジョン・ライフはフランク・ブツクマンのことは常に頭に描いていた。「人間性は変えることができる。それが解答の根本である。国家経済は変えることができる。それが解答の成果である。世界歴史は変えることができる。それが私たちの時代の使命である」

第十八章 ヨーロッパへの訪問

ジョン・ライフのアーリントンの家庭にはアジア、ヨーロッパの各国からこれまでも大勢の人たちが訪れて来た。しかしジョン・ライフ自身は一度も海外へ出たことはなかったが、いま、ヨーロッパを訪問するという考えが彼の心を捉えた。

また、彼はMRAを通してあらゆる献身的な労働者が夢に描いている目的、世界の労働者の団結という目的の可能性を見て来た。ヨーロッパを訪問して、労働組合の友人たちとそれぞれの困で会えたなら、それがこの根本的な仕事にプラスになるにちがいない。

しかし一九五五年の終りまでにジョン・ライフはまた幾度か心臓病の発作に襲われた。ヨーロッパ訪問はゆゆしい肉体の危険を招くにちがいない。しかし彼は神の保護と導きを頼りに、使命感を持ってヨーロッパの旅を決意した。

ジョン・ライフの旅に随行したニューヨークのアイリーン・ゲーツ医師は、その旅行の模様

をつぎのように伝えている。

「ジョン・ライフの二つの特色がはっきり目立っていた。それは不屈の精神と信仰である。一九五六年イギリスに向って出発のさい、私が波止場でライフ夫妻一行に加わったときもそうであった。その後の二年間も、また一九五七年にマキノからアーリントンへ帰る最後の旅行の場合もやはりその通りであった。船上の人となった第一日目から彼がたえず苦痛に悩まされどおしで暮らしていたことははっきり判っていたが、痛みにこらえて行こうという勇氣は、回復しようという決意とおなじように断乎たるものが見受けられた。

私たちがイギリスに上陸したときの彼の喜び方はたえようもなかった。ロンドンに着くとすぐ彼は胸にしまっておいた目的を話した——スコットランドへ行ってフィリップ・マレーの出生地であり、生家や親戚の家のあるブランタイヤを訪れたいというのだ」

こういう信念と、勇氣と、決意の前に医師はただ「イエス」と言うよりほかはなかった。この小さなスコットランドの炭鉱町を訪れたときの彼の喜び方は周囲にも伝染した。彼はスコットランドのフィリップ・マレーの親戚であるケリー家の居間に静かにこしをかけて家族の者と熱心に話し合った。炭鉱夫福祉センターにはCIOからフィリップ・マレーのために贈られた金属額が飾られていた。それにはウォルター・ルーサーとジェームズ・ケリーの名と並んでジョン・ラ

イフの名も見えていた。

それは思い出深い時代のことであった。なぜならこの町は初期のころのイギリス炭鉱夫たちの闘争の場だったからであり、その闘争から単にフィリップ・マレーだけではなしに大勢の偉大な社会正義の闘士たちが生まれたからである。近くの町にはケア・ハーディを記念して一軒の農家が保存されていた。この人はイギリス労働界の先駆者であり、炭鉱夫の選出した、最初の労働者出身国會議員となった人である——シルクハットの波の中に混った、ただ一つの布帽子であったのだ。

どんなにジョン・ライフはケア・ハーディの信念の深かった話を聞いて感動したことだろう。ケア・ハーディは一度こんなことを言っていたそうである。「貧困は自然によって定められたものでもなく、神によって定められたものでもなく、人間同志の間違った関係から生れたものである。はじめ私を駆り立てて労働運動に飛びこませ、それ以来そこに私をとどまらせてくれたのはイエス・キリストのキリスト教である」

ジョン・ライフの友人にスコットランドの労働者出身の国會議員であるジョン・マクガバーンがいた。フィリップ・マレーと同じように、ジョン・マクガバーンも敬虔なカトリック信者であった。長いあいだイギリス労働党の嵐を呼ぶ男であったマクガバーンはその固い信念のおかげで

刑務所へ入れられたこともあった。ジョン・ライフと彼は共通の点が沢山あった。世界大戦の中止時代、スコットランドの失業者たちがグラスゴーからロンドンまで三百マイルの「断食行進」を行なったとき、ジョン・マクガバーンは子供のころからの足の傷のためにびっこを引きながらも行進の先頭に立って行った。騒擾を起したかどで四回もイギリスの下院から力づくで守衛に追い出された人でもある。

犠牲心と大胆な勇気で結びつけられていたジョン・マクガバーンとジョン・ライフの生活は、今やこれまでに以上に大きな献身によって結ばれたのである。——それは人間の^{オモシロ}変革を通して新しい社会を築き貧困と不正行為に終止符を打つことである。

一九五六年の春、ブックマン博士はM R A 世界使節団といっしょにロンドンに滞在していた。この一行はそれまで十一月のあいだ『消え行く島』というイデオロギー的な音楽劇をもって世界中を回って来たのである。百名の配役陣と、あらゆる背景、国籍を持った数十名のスポークスマンの随行団はすでに六万九千マイルの旅をして来た。『消え行く島』は毎晩満員のプリンセス劇場で上演されていたので、ジョン・ライフも行ってみたいと思った。

彼がその劇場を訪れたことは大きな経験となった。鋭い思想的直感と、覚え易い音楽をまき散らす劇を見て行くうちに、ジョン・ライフの目は輝いてきた。彼はイギリスの劇場に行くのは

はじめてだったので、彼は一人一人について説明されるさまさまの人物を興味深くながめた——保守党や労働党の国会議員たちや貴族たちが、工場労働者や、家庭の主婦たち、子供たち、実業家たちにまじって見物していた。幕があき、二、三分が過ぎると、彼が予期していた伝統的なイギリス人の控え目な態度は全然見受けられなかった。この劇が彼らに与えた効果は驚くほどで、観客のすべては心から反応を示した。劇の現実さが彼らを解放して裸の人間にした。人の心に食いつくように見せてくれるこの劇の普遍的な真理は、このアメリカの労働指導者の場合とおなじように、イギリスの観客の心を深く捉えたのであった。

劇場から帰りながら、彼はこういう経験をしたことを限りなく喜んでいた。健康にさわった様子は少しも見受けられなかった。

ロンドンで数週間滞在した後、彼は帰国する前にスイスにあるヨーロッパのMRAの本部、コーを訪ねてみたいと言いつ出した。そこへ行けば彼はアジアやアフリカの労働組合の人たちと旧交を温めることができるということを知っていたからである。数日たってから、彼はコーへ行く決心をしたから、みんなも出発の用意をしなければならぬとはっきり申し渡した。「万事うまく行くよ」というのが彼のいつも人を安心させるときの口ぐせであった。

そういうわけで不安はけされてしまった。ジョンとローズとバーバラとゲーツ医師はイギリス

の田舎道を南に車を急がせ、やがて海峽連絡船に乗り、ブローニュまで彼は終日静かにベッドで休んでいた。海は鏡のように穏かだった。荒れたのは海ではなく、船から汽車に乗り移るときこんどの旅のために特に用意された車付きの椅子で、押し合いへし合いしている休日観光客たちの中を縫って彼を運んだときだけである。寝台車でゆっくり休んだ翌朝、彼は早くから服を着かえて椅子からからだを起し、スイスの山やまを眺めながら快哉を叫んでいた。

コーではジュネーブ湖に面した美しい部屋ですばらしい二週間をすごした。時どき彼はバルコニーにこしをおろしてローヌの谷や、湖水を越えた向うのフランスのアルプスの山やまを見上げていた。会議の模様は彼の部屋に短波ラジオで連絡された。彼は発言者のことばに、熱心に耳をすませていた。会議に出席した各国からの代表者たちはこの姿を現わさぬ参加者を意識していた。フランク・ブックマンも彼の部屋にはいつて来た。二人は過去の大きな経験や将来に横たわっている任務のことなどを話し合った。会議に列席している五十カ国以上の国々から集まった数千人の人たちの心に、一つの世界的な解答が力強く流れているのを見て、コーに滞在した数週間はずばらしいほど彼の精神を肥やしてくれた。

コーを訪れることについて彼がはつきり神の導きを得たと同じように、アメリカに帰国する時がやって来たとき、彼はイタリアを回って帰れというはつきりした神の声を聞いたように感じ

た。

用意周到な準備の後、再び一行は停車場に出かけた。そこからスイスを抜けてイタリアへの汽車の旅が始まった。ジョン・ライフは夜明けの山やまを楽しんだ。すべてのものは新しく新鮮であった。時間がたつにつれ彼の顔は灰色に変わった。彼の昔ながらの敵である痛みが彼と共に旅をしていたのであった。しかしミラノでは彼はイタリアの労働者たちの中にまじっていた友人たちに挨拶することができたし、その人たちに心からの思いやりを示していた。そこからジェノアに向い、そこで彼は気持のよいホテルのベッドに喜んで横たわった。

翌日一行は無事商船コンスチチューション号の最上甲板にある船室に到着した。はじめの数日のあいだジョン・ライフは一日に二、三度づつ甲板を歩くことができた。彼は港や大きなジブラルタルの岩に心を楽しませていた。

ジブラルタル海峡を出て一日もたないうちに困ったことが始まった。海が荒れて彼は酔ってしまった。酸素吸入や、薬物治療や、付き切りの看護が必要となった。こうした危急の場合、ロイズは夫にまけないほどの信念を持っていた。彼女は三度の食事を船室の夫のかたわらで取った。ニューヨークに着いたとき、彼はアーリントンの家に直行しなければならぬ気がすると言い出した。でも家へ帰るまではきつと大丈夫だと言った。

ゲーツ医師はアーリントンのハロルド・ジョンソン博士に電話した。博士はすべての準備をととのえてくれた。彼は一刻の猶予もせずアーリントン病院に着かなければいけなかった。

ゲーツ医師は書いている。「何というあわただしいことだったろう。病院車はニューヨークの埠頭からアーリントンの病院まで四時間と五分で飛ばした。これは汽車よりずっと速いタイムである。ジョンはまるで小学生のようにそのスピードを喜んでいた」

アーリントン病院ではジョンソン博士が彼を迎えた。酸素テントの中でくつろいだとき彼は微笑した。「神さまがここまで私を連れて来て下さることを知っていたのさ」と彼は囁いた。

第十九章 最後の闘い

一九五七年の夏、七十六カ国から千二百名の男女がマキノ島に参集した。そこでは毎日のように、大勢の人たちの心にあつた人と人、国と国を分裂させている傷つけ合いや憎しみの気持がいやされて行った。

ジョン・ライフの心はどんなにかそこへ飛んで行きたい思いにかられたことだろう！ 息詰るようなワシントンの暑さの中で病床につきながら、彼は心の中で「マキノへ行け。マキノは私の信念と誓いを更新し、深めてくれる」と言うせき立てられるような強い衝動を感じた。

家族の者も彼とおなじことを願っていた。しかし旅行したら必ずや痛みはひどくなるだろうし、恐らく死を意味することとなるにちがいないという恐れと心配の試練の前に彼らは立っていた。その頃ジョン・ライフはたった一つの燃えるような目的を抱いて一時間、一時間を生きていた——彼は自分の生命を時間という尺度では数えず、まだ自分に残されている生命をもって人

びとのために、また、人間と国家を再建する仕事のために、どれだけ自分が役に立つことが出来るかという根拠の上に立って、生命を生きていたのである。病いに衰えたこの闘士は、犠牲がどんなに大きかろうともう一度出かけなければならぬと感じた。彼は幸福な闘士として、闘いながら死にたいと思った。

こういうわけでジョンは、途中の各地で必要と思われるあらゆる応急処置の用意をして、家族といっしょにマキノに向けて出発した。マキノで彼の病状がますます悪化して来たとき、他の親類もみな駆けつけて来た。

会議が大ホールで始めると、ジョン・ライフは二階の部屋で横になりながら、イアホーンで発言者のことばに耳を傾けていた。

この二年のあいだに彼は、精力を使い過ぎたり、興奮したりすれば、その結果はひどい痛みに終ると覚悟しなければならぬことを知っていた。とは言うものの、体力が衰えて来るにしたがい、彼の精神はますます強くなって来るのであった。時には痛みの拷問にかけられながらも、彼はなおもその心に労働界の友人たちにたいする深い関心を抱かずにはいらなかった——その人たちが自分といっしょになって、労働界が世界を一つに結束し、鼓舞する強力な力となるために、経験をつみ、実行の方法を見いだしてくれればよいがという、祈りにも似た希望を抱かずに

はいられなかった。

アメリカや遠方の国々から集まって来た指導者たちや下部組織の労働者たちは、会議の席にしをおろしたり発言しながらも、二階の静かな部屋で横になりながら耳をすましている人の力とインスピレーションを感じていた。

或る朝、彼はニューヨーク州の或る地方労組の会長が代表者たちに向って話しているのを聞いた。「ジョン・ライフは四つの標準を持ち出して労働運動全体にたいする道を示してくれた。一方、われわれの中の或る者たちはその考え方にあまり好意を持たなかった。事実われわれはこれを見て嘲笑した。ところが今はどうであろう。われわれは現に倫理的な実践法則をとり入れようと先を争っているではないか。もしわれわれがあのときジョン・ライフの言に耳をかしていたなら、われわれはもっとより以上に完全に事を処理していたはずである。われわれの持っている六つの法則は、今なお単に相対的なものに過ぎないではないか。もの珍らしい気持が薄れたら最後、われわれはたちまち元の泥沼に沈むかもしれないのである」

「私は今朝ジョン・ライフに自分が言いたいと思ったことを書きつけてみました」とそのニューヨーク州の役員はジョン・ライフに直接話しかけてでもいるかのように、目の前に吊ってある

マイクロフォンを見上げながらことばをつづけた。「私の仕事は人々の物質的幸福と同じように、人々の心にある信仰を求める渴望を満たしてやることです。私は神がどんな方法で私を役立てようと思っていられるのか、みつげ出さなければいけないのです」

この男の妻君は彼のかたわらに立っていた。「私の夫は以前は革命家でした」と彼女は夫のことばを補足するように言った。「私たちはメーデーにはいつもニューヨークの五番街をいっしょに行進しました。ところがしばらく前に夫は自分もう隠退した革命家だと言っていたんです。いまその隠退から飛び出しました。四つの道義標準を身につけて、私たちはジョン・ライフとみなさま方みんなといっしょに全世界を行進しようとしています」

フロリダから来た組合指導者の一人であるアーニー・ミッチェルがつぎに発言した。「私は労働界とアメリカにこの解答をもたらすためにジョン・ライフといっしょに仕事をしたいと思いません。このことばの実際の意味は、私が自分の仕事をMRAの方針にそうようにし、まず妻にたいして家庭ではじめながら、自分の信念を実生活に完全に生かすことです」自分の仕事をMRAの方針にそわせるといふミッチェルの決意は、それから数カ月たって、彼が或る大きな会社から年俵一万ドルの人事課の口の申し出があったとき、実際にためされたのであった。これは彼が現在貰っているものに比較したらすばらしい給料であった。しかし彼はジョン・ライフにたいす

る約束を決して破らなかつた。彼は遂にその会社にたいし、自分の決意は労働運動にとどまることだと伝えた。彼は自分の生涯はジョン・ライフの場合とおなじように、労働者への奉仕に捧げてあると心から感じていた。

一度彼の体力がだんだん衰えて、ほとんど絶望と思れたことがあったが、そのとき運輸労働者連盟と会長クイルから届いた賛辞の電報が、ジョン・ライフの精神を立ち直らせ、彼に新たな力を再び与えた、その電文はAFL・CIO合同にたいする彼の仕事に言及したほかに、つぎのことばを伝えていた。「労働運動と産業界の双方に、健全な、倫理的な慣習を与えようというあなたの不撓不屈な努力と、労働運動の中に健全な、道義標準を当てはめ、それを実生活に移して実行されたあなたの手本とに感謝します。さらにあなたはご自身で説かれたことを実地に実行されました」

イデオロギーの訓練を受けにマキノに来ていたプリンストン大学の幾人かの学生たちが、熱心に希望して彼の食事をその部屋に運ぶことを引受けてくれた。彼らはライフに奉仕することを特権と考えていた。

その中の一人は思い出を語っている。「ライフさんのお盆を持って私が部屋へは行って行く」と、ライフさんはベッドの中で身を支え、注意を集中してイアホーンで会場の話に耳をすまして

いられる姿をよく見受けました。しかし誰かが部屋へは行って行くと、たちまち注意力は、痛みのある場合でも、ない場合でも関係なしに、はいつて来た人に全部集中されるのです。『今日はどうだい、相変らず元気かい？』という挨拶は決して意味のない、おさなりの挨拶ではなしに、正直な返事を期待している心からの質問なのです。

ライフさんの話し振りは落着いた話し振りでしたが、どんな人間でも新しい世界を築き上げる仕事に参加できる役割を持っているというはっきりした確信を念頭に置いた話し振りでした。ライフさんの生活の中心点は、ものを^{チェンジ}変革させる神の力の体験であり、最大の関心は、自分の知っている人、会ったことのある人、いっしょに話したことのある人たちすべてに、自分のみつけ出したと同じものを見つけ出さしてやりたいということでした……。

人間の本性というものは果して^{チェンジ}変革できるものかどうかということについて、いろいろと論ずることは誰にでもできることです。しかし私にとっては、ライフさんがどんなかたくなな人間でもそれができるといふ、生きた証人なのです。彼はこれまでの生涯の中にあらゆる苦しみを経験し、自分の周囲のあらゆる苦しみを見て来られた方です……。

これだけの経験をして来られた方ですから、普通だったら人間の本性や人生そのものの現実の姿に幻滅を感じていいはずですが。しかし私の目の前にいる人は、この通り、神と仲よく暮らして

られるではありませんか」

ジョン・ライフはほかの人たちにもそういうふうに見えていた。しかし彼もやはり心の中では、いかにも人間らしい苦しみと闘っていたのである。時には恐ろしい苦痛のために、さすがの彼の勇気も信念もくつがえされそうなこともあった。国中の友人たちに会えるようなからだになりたいたと熱望していたので、時には彼も失望したり、たえまのない苦しみを憤ったり、病気を恨んだりしたい誘惑にかかることもあった。しかしそういう疑惑や誘惑に襲われると、彼は自分の気持ちを正直にすっかり口に出して話してしまうのであった。そうすると心の平和は戻って来て、彼は再び神の偉大な慈悲と心使いについて話をはじめるのであった。

ジョンがマキノで会った人たちの中に、エディ・ダウリングというブロードウェイの有名な俳優兼プロデューサーがあった。ダウリング氏はぜひジョン・ライフに会いたいものだと思っていた。その男の来訪を受けてもからだのほうは大丈夫かどうかと尋ねられたとき、ジョンはすぐ答えて言った。「大丈夫だよ、ちょっとでも私はダウリングさんに会わなければいけないんだ。

この人は神に選ばれた人なんだから」

その夜エディ・ダウリングはマキノの大ホールで一千人の聴衆に向い、「あの酸素室」での数分間が自分にとってどれほどの意義があったかということの話した。これは個人としての話だ

が、と前置きして彼は言った。「実は私はアメリカ労働組合の興味ある一役員に会うのだという
気持で、あの部屋へ上って行きました。ところがそうではなく、私の会った人はこれまで私がま
だ会ったことがないと思われるほど、実にすばらしい人でした。全世界のために生きている一人
の人間でした」

忘れることのできない出来事が一つあった。恐らくジョン・ライフの最後の演説になるだろう
と思われる演説を彼が試みたときのことである。それはロンドンの労働者の指導者の古顔であっ
たトッド・スロウンのために会議の会場で行なわれた追悼式の席上でのことであった。彼はフラ
ンク・ブックマンの古くからの友達であり、また最近ではジョン・ライフの親友となった男で
ある。ジョンはその式には列席したいと言った。

それは実に勇気のいる決心であった。ジョンは自分でもそんなことをするだけの体力がないこ
とは人間として承知していた。事実それが彼が姿を現わした最後の公けの会合となったわけであ
る。しかしその日、彼は出ようか、やめようかなどとは少しも考えなかった。彼はただ心の奥の
信念と確信から行動した。

ジョンは車付き椅子にのせられ、廊下を通過して大会議場に運ばれた。彼がはいって行くと、す
べての人の頭はそのほうに向けられ、彼が車付き椅子から降りて、ホールの正面に待っている肘

掛椅子のところまで静かに歩いて行くあいだ、しばらくあたりは静まり返った。エディ・ダウリングはすぐ自分の席から立って彼の横の椅子にこしをおろした。

自分の話をする時が来たと感じたジョンは、人の手をかりないで中央まで歩いて出て行った。立ちどまったとき、一瞬彼のからだはよろめいた。

やがて彼は壯者をしのぐような勢いで話をはじめ、その声は大ホール中に響きわたった。

彼はトッド・スロウンが十二才のとき、はじめて闘争の匂いを嗅いだころからの話をした。当時、一八八九年の大がかりなロンドン波止場ストライキの指導者たちは、いつもトッドの父親のささやかな時計修理店の二階に会合していた。トッドが反逆者になったのはその当時のことであった。そのとき以来、彼は労働者のために奉仕しようと決心した。そしてその決心どおり、彼は獄に投ぜられようと、どんな悲惨な目に会おうと、あくまで彼らのために闘った。

「商売は時計屋、生まれつきの煽動家」とトッドは自分のことを言っていたが、労働者たちに対する彼の熱情が、遂にフランク・ブックマンのうち立てた労働者の世界的任務の旗印しに应じて立ち上ったのであった。それより少し後れてジョン・ライフが立ち上ったのと同じことであった。その点では彼はその後に長くつづく闘士の中の先駆者であり革命家の中の革命家であった。

ジョン・ライフは自分のことを、トッド・スロウンの跡を追う者だと語っていた。彼はトッド老

の容赦のない闘いと犠牲の生涯のことを——貧困と、憎しみと、貪欲と、恐怖を一掃し、人間同志の兄弟愛を持ちこむために、あらゆるものを捧げた生涯のことを話した。

自分につきまとはって離れない痛みを感じながら部屋に戻ったとき、ライフの心は相変わらず世界中のかずかぎりない人々のうえを思うのであった。彼はローズに、すべての人間が、いま自分がからだの痛みにもかかわらず感じている喜びと平和の汲みきれないほど深い泉と同じものを、自分たちの手でみつけ出してくればよいがという自分の念願のことを話すのであった。彼は医者の一人が言ったように、自分を造ってくれた神に導かれて静かな水のそばを歩いているといった人間であった。

世界を危くしているイデオロギーの問題を理解しているジョン・ライフにとって、マキノに百名の日本の青年団が出席していることは多大な意義のあることであった。四百三十万を擁する日本青年団の指導者たちの中には、イデオロギーの研究にモスクワに來ないかという招請を断わって、わざわざマキノへ出かけて來た人たちもあつた。

この団体は第二次世界大戦後、日本の次ぎの世代にデモクラシーの恩恵と形式を教えるために組織されたものである。ところが今、青年団の指導者たちの中には、道義的な基礎のないデモクラシーは中味のない貝殻のようなもので、唯物的な、破壊的思想が容易にはいりこめるといふ

ことを悟る者たちが出て来た。万一東京の青年団の建物の屋上に赤旗がひるがえったなら、日本の将来はコミニズムの味方として決定されてしまふだろうとさえ言われていた。

モスクワの招待によって重大な思想戦の動きが、民主的な日本の青年指導者たちの心を動揺させた。彼らはフランク・ブックマン博士にこの状況を伝えた。博士は直ちに日本青年団を手の中に収めようというコミニストの考えの意義を悟った。彼は百名の青年団指導者をMRAのイデオロギー大会に招待することによって日本青年団の民主的な主体性を守る決意をきめた。この招待はブックマン博士の深い信念から発したことであり、費用は全世界によびかけて募金した。このことがライフ夫妻もまじえた大勢のアメリカ人たちの義侠心を大いに呼び覚まし、そのため日本の青年指導者たちがマキノ島まで飛行機で来ることができるようになった。

その夏の数カ月間、その青年代表者たちはマキノ島で訓練を受けた。母国へ帰ったとき、彼らは東洋と西洋のために役立つ、自由な、啓発的なデモクラシーを築き上げるもとなる、道義的イデオロギーをすでに身につけていた。

毎朝ジョン・ライフは青年団代表たちの動静を知りたいと言っていた。ある日、日本の総理大臣岸信介がワシントンのブレアハウスから電話して、ブックマン博士とMRAに日本の青年代表を招待してくれたことにたいし感謝すると伝えて来たので、彼は特別に喜んでいて、岸氏が感謝

のことは述べたとき、ブックマン博士は青年たちが「右へも傾かず、左へも傾かず、真直ぐの道を行くことを学んでいる」と答えた。

それから間もなく岸氏は東京を訪れた自由中国の代表团に向って、自分は自国の政府の政策が「右へも傾かず、左へも傾かず、真直ぐの道を行く」ものになることを望んでいると語った。

そののち行なわれた青年団の選挙に、MRAの大会に出席した人たちは健全な人びとと共にコミュニストの攻勢にうち勝って民主的な役員を選出することに成功した。

そういうニュースを聞くとジョン・ライフの目は光って来るのであった。彼にとってそれは一種の強壯剤だった。

痛みが支配力を弱めることに、抑えつけていられないジョン・ライフのユーモアが飛び出すのであった。ある日、彼は付添っている医者ウィリアム・クロース博士が、病人に贈られた新しい、珍しい型の電気剃刀を、ジョンの不精ひげの生えた顎にためしてみようと言いついた。楽しそうに剃刀の唸りが半分間つづいたが、顎はちっとも歌い文句にあるような桃の肌にはならず、元のままの不精ひげはなくならなかった。医者のいぶかしそうな目が剃刀と顎のあいだを往復しているあいだに、ベッドからくっくっくっという笑い声が漏れて来た。「先生、剃刀の覆いをはづすと、もっとうまく剃れますよ。」

医者と病人の二人が大笑いをした後で、そのとおりうまく剃れたのであった。

毎日ジョン・ライフとフランク・ブックマンのあいだにメッセージが交換されていた。時には真剣なものもあり、時にはユーモアのあるものもあったが、常に偉大な心の暖さがあふれていた。

感謝祭の当日、誰かが間違いをしでかした。ジョンのディナーの盆にはかぼちゃのパイがのつていなかった。これは労働者側から苦情を申し立てる場合のあらゆるテクニクを使って、訴訟を起す値うちは十分あるわい、と彼は心に思った。彼は一枚の紙を取り上げ、そこにいていねいな印刷体の字を書きつけた。「フランク・ブックマン博士様。私には苦情があります。感謝祭だというのにかぼちゃがついていませんでした」

その手紙はうやうやしく配達された。四、五分もたたないうちに、二度目の盆が彼の部屋に運ばれた。盆の中央に派手な装飾にとりまかれてしつらえられた特別席に一切れのかぼちゃのパイがのっかっていた。ジョンは愉快そうに笑いこけてベッドにどっかり頭をつけた。

ジョン・ライフの革命にたいする胸の焔はいつまでも消えなかった。彼がフランク・ブックマンと並んでアメリカに正当なイデオロギーを与える闘いの際やったように、指導者たちにたいしてその所信の表明を迫る場合は少しも遠慮容赦をしなかった。解答のあることを知りながら、臆

病の気持から、あるいは政治的の便宜から、闘いを引受けることを躊躇している人間をみつけた場合は、いつも彼の怒りは爆発するのであった。

ジョンはアメリカの商業の歴大な可能性のことを考えていた。どういうふうにしたらそれに一般民衆の要求に応じられるような新しい動機を持たせて——現在百カ国で進展中のMRAの世界的なイデオロギー勢力に援助を与えられるような新しい動機を持たせて——これを動員することが出来るようになるだろうか？

彼自身がこのイデオロギーを採用しはじめたとき、その結果は組織不可侵協定のおかげで、アメリカ労働界自体にとってはかり知れないほど大きな節約となり、全国的規模のCIOの組織運営上はっきりした節約となり、組織不可侵協定とAFL・CIO合同後は、支配権の争いによるストライキ停止のおかげで、各地の産業にとって今までよりはるかに大きな節約となったことを痛感した。

ともかくアメリカ人は——共和党であろうと民主党であろうと等しく——目を覚さなければいけないのである。ジョン・ライフはそうさせてやろうと決意した。ワシントンから来て会議に参加している大勢の中に、ジョンのよく知っている古顔の共和党の上院議員も加わっていた。彼はその上院議員に部屋に来てもらった。

上院議員が部屋にはいつて来ると、ジョンは彼を迎え、やがて苦しい息使いをしながら非常にゆっくり、しかし落着いて力をこめて言った。「上院議員さん、あなたはフランク・ブックマンがジョン・ライフの人間を変えたとき、彼は国のために五億ドルの金を節約させてやったことをアメリカに言つてやる必要がありますよ」

ジョン・ライフがこの上院議員に話したとき、彼はただ単にアメリカの労働界と産業界に、数字で計算できる節約をさせてやっただけを考えていたわけではなかった。彼の考えはそれよりはるかに広いものだった。彼はいま自分が健全な、安定したアメリカの経済を軸として動いている自由世界の経済に深い関心を寄せていると自覚していた。その安定をもたらすために重大な役割を持っている信頼感を全国に作るということは、妥協や宥和策の問題ではなく、自分が信頼にあたいするものになり、ほかの人を信頼にあたいする人間にさせるという問題である。これがC I Oの政策をライフが運営して行くさい、あらゆる関係の鍵とも言うべきものであった。損をした者は一人もなかった。みんなが得をしたわけである。

上院議員はベッドのそばに立って、ジョンがその先を話すのを待っていた。しばらく沈黙した後、ジョンはまた口を開いた。彼はくり返した。「フランク・ブックマンがジョン・ライフの人間を変えたとき、彼は国のために五億ドルの金を節約させてやったのですぞ」上院議員はうな

ずいて部屋を出て行った。彼は大いに考える種を与えられたわけであった。

十月一日の午後遅くなつてから、ジョン・ライフは突然耐えがたい痛みに襲われた。侍医たちは急いで彼の枕元に集まつた。彼らはできるかぎりの手当をほどこしてみた——しかしこんどのものは人間の手当ではどうすることもできなかつた。ライフは怒濤のように打ち寄せて来る苦痛の中で呼吸もたえだえにもがいていた。こんどは最後のよう思われた。

突然彼は大声であえいだ。その声はいつのまにかはっきりした、威厳のあることばとなった。

——「ローズ、バーバラ、ここへはいつて来てくれ。私は子供たちみんなに会いたい。ちょっとでもいいからみんなの手に触つてみたい。私はいま話したいことが少しある——今夜」家族の者は急いではいって来て、医者たちといっしょに並んで待っていた。ジョン・ライフのことばは、息を吸おうともがいている中から、ためらいがちに、ひとくぎりのことばとことばのあいだに長い間を置いて、ゆっくり出て来た。それを眺めていた人たちには、彼のからだをかきむしっている断末魔の苦しみだけで、もはや彼に力が残されていようとは思えなかつた。

「もう一度朝の光を見られるかどうか自分でも判らない」と彼は話を始めた。やがてみんなの悲嘆をなだめてやろうと努力するかのようにつた。「でも、そう言ったからと言ってがっかりしないでくれ。長つたらしいお祈りはやめてくれ——短いので結構。めいめい短いので結構。私

私たちはこの長い年月のあいだ、神さまが私たちに、教えてくれようとなすったこと、フランクが私たちに、示してくれようとしたこと、それを学ぼうではないか。子供のときから、私たちみんなが、そういう生き方をして来なければいけないのだ」

永遠につづくかと思われる数分間が過ぎて行く——やがて囁きが聞えて来た——「私は大変、大変悪い人間だった。でも心の奥のほうで、私は神さまが、私のこれまでやった罪深い行い全部を許して下すったことを、非常に、非常に、はっきり感じている」

彼は落着いた。静寂がめいめいの心をさぐるように忍び寄った。

やがてジョンはまた口を開いた——「これは誰にとっても、口に出して言ったり、引受けたりすることは、なかなか容易なことではないことを、私も知っている。しかしこのことは、私が眠りにつく前に、どうしても言っておかなければならないと、思ったのだ。

私たちが学ばなければならんことは、まだまだ沢山ある。しかしみんなで、学ぼうではないか。みんなで、学ぼうではないか。私は信じている。人々の心をつかもうというこの闘いは勝つということを——唯物主義にたいする闘いも——あらゆる国々の、人々の心の中にある、あらゆる『イズム』にたいする闘いも。

なかなか容易なことではないだろう。それには私たちの持っているエネルギーの、どんなはし

くれでも必要だ。そのためには毎朝、一時間早く起き出し、何マイルも、何マイルも歩いて、みんなといっしょに計画を練り、自分自分の国のために、神さまの導きを求めなければならないだろう」

再び静寂。

「私は一九五二年以来、自分流義のただたどしいやり方で、四つの絶対的標準にそうて生き、神さまの導きの手にそうて生きようと、努力して来た。いつもうまく行ったわけではない。でも私はつまづきながらも、進んで努力した。

このイデオロギーを通して、この世界に多くを与えた人たち、すべてを捧げた人たちのことを、考えてみようではないか。あらゆるものを捧げた人たち——あらゆる最後のものまで捧げた人たちのことを。

私たちがどこへ行きつくか、自分で知らない人たちもいるかもしれない。時には私だって知らないこともある。しかし神さまは知っていられる。もう一度私は言いたい。私は自分の家族に感謝している——最後の一人一人に。それから私の母、私の父に——何という平和な家庭だったことだろう」

また長い沈黙がつづいた。やがて彼は口を開いた——こんどはローズのことであった。

「お前たちの母は、私にとってりっぱな妻だった。私にとってどんなにりっぱな妻だったか、お前たち子供たちが知っているかどうか私は知らない。神さまが私たちを一つに結んで下さったのだ。とても本物の愛情だった。ローズ、神さまといっしょに歩きなさい。神さまはお前の手を取り、静かにお前を導いて下さるだろう。お前といっしょに話しあった、あのすばらしい長い時間の話し合いから、すべてのものが生まれたのだ。私はそれにたいしてどんなに感謝していることか」

それから若いジョアンナに低い声で言った——「神さまは私たちの家庭を結ぶために、お前を授けて下さった——お前の助けを借りて神さまをみつけるようにと。お前は家庭を結びつけるために、神さまが私たちに授けて下さった贈り物だった。時にはお前を甘やかしたかもしれない——ひどく甘やかしたかもしれないと思う——でもお前は神さまの導きによって生きて行けるようになっているはずだ」

彼はエステイズを枕許に呼んでその胸を軽く叩きながら言った。「息子や、決して神さまに背を向けてはいけない。お前の、その大きな胸を開くのだ。お前のやらなければならんことは、それだけだ。でもお前をあんなに長いあいだ、失望させていたことは済まないと思っている。近頃は、ずいぶん努力して来たが……」——呼吸しようともがいているうちに、その声は尾を引いて静寂

の中に消えた。しばらくして我れに返った彼はエステイズの妻ジョアン顔を見た。「ジョアン、お前は私のこの大きな息子にとつて、りっぱな妻になってくれた。時には息子の父親と同じようにお前に報いることもないこともある。でも、いっしょにいつまでも神さまの導きに従って行ってくれ。お前たちにはすばらしい息子たちがいる。」

彼はしばらく目を閉じた。ひと息、ひと息が永遠のように思われた。部屋の中にいたほかの私たちは身動きもせず待っていた。

やがて彼はゆっくりフッカーとその妻フランシスのほうに頭を向けた。「お前たち二人が、お互いに正直になろうとして、努力して来たことを知っているよ。お前の母と私は、お前たちが悩んでいることを知っているよ。私たちもいっしょに悩んで来たのだから。私がやったように、あまり長い間待っていてはいけないよ」

ジョンは自分の愛する者たちのために最後の呼吸をつづけようと努力していた。今にもこれが最後となるかと思われた。これ以上の努力はつづくはずはない。けれども彼は部屋の中にいる一人一人に特別のことばを伝えた。やがてジョアンナが言った。「パパ、ビル・グローガンがパパのそばにいたいと言って今日やって来たのよ。この人も一生涯パパといっしょにこの闘いをやって行くといっています」

「嬉しいよ」と彼女の父は微笑をうかべて答えた。「ビルはいい奴だ。神さまは決してビルとモリーを見棄てはしないよ」

こんどは少しらしくなったと見えてまた口を開いた。「私は医者たちに感謝している。みんな親切な医者だった。でももっと偉い医者が一人おられる。神さまは私にとっても親切にして下さった——私たちに——そうじゃないか？」

私は鏡を通してしか見られない——非常に曇った鏡を。でも神さまはそこにおられる。いつか私も神さまの前に出るだろう。それはすばらしい日だ」

めいめいの将来には何が待ちかまえているかも判らないが、ジョンの部屋にいた者は誰一人その日のことを忘れることはできないだろう。すべての者は彼が自分たちに与えようとつとめていたものが何であるか知っていた。彼はみんなの将来に待ちかまえている誘惑もおとし穴も知っていて、一人一人の心を覗き込んでいたわけである。ジョン・ライフは自分の家族は一人も完全な人間ではなく、人間の弱さに左右される人間だということを知っていた。彼はみんなに解答を力強く認識して欲しいと思ったのである。

やがて徐々に奇跡が起りはじめた。彼の呼吸は次第におだやかになった。発作が消えた。彼はくつろいだ。そして家族の者が足を忍ばせて出て行こうとすると彼は言った。「お願いだからミ

ユリエル・スミス（有名な黒人歌手）に『おお主よ、何というすばらしい朝よ』を歌ってくれるよう頼んでくれ」

第二十章 最高の経験

十一月にはいるとジョン・ライフは異常な回復ぶりを示し、次第に健康をとり戻して来た。彼はアーリントンの自分の家に帰りたという話をしはじめた。体力が少し戻って来ると、マキノを出発しなければならぬことがはっきり判って来た。もう雪は島一面に吹雪いていた。間もなく湖水もすっかり凍ってしまうことだろう。暴風の季節にはいだったので湖は荒れて来た。

ある日の夕方、モーター船の船長が、本土へ安全に渡れると伝言して来た。そして船員たちは寝台の準備をしてあるボートに、できるかぎり慎重にライフを運ぶためにやって来た。湖はこれ以上静かに治まることはないと思われるほどないでいたし、ジョン・ライフもこれ以上気分よくなれないと思われるほど気分がよかった。

こんどの旅路はどこまで行ってもおだやかだった。間もなく彼はアーリントンの家に帰った。もう先きはそれほど長いはずはない。ジョン・ライフはそのことを知っていた。しかし彼は心

配しなかった。

アーリントン病院で暮した最後の一日一日でさえ、彼の思いと心使いはほかの人たちに向けられていた。彼の闘争心は今もなお、この役立つ解答を何とかして一般大衆に与えようという世界的な闘いに向けられていた。特に彼の心は自分の家族に向けられていた。ケンタッキーのそれぞれの炭鉱町からジョンの三人の兄弟が訪ねて来た——背が高く顔色の浅黒いフレッドは、彼らの母サラ・アンにとてもよく似ていた——ローガンはジョンによく似た大男である——長兄のシヤードはからだのがっちりした、ことばつきの優しい人間である。三人ともおとなしくジョンの枕元に立っていた。この四人兄弟の再会にことばの必要はなかった。

彼はまたたえず統一鉄鋼労組とその指導者たちのことを考えていた。もはや字も書くことができなかつたので、彼はよくローズに頼んで組合の友人たちに伝えたいと思う個人的な伝言を代りに書いて貰った。すばらしく澄んだ気持ちで、彼は葬式のことまでこまかい点に気をくばって計画し、何のこだわりもなくそのことを話題にした。彼の念願は自分の友人や同僚のすべての者に、自分の経験したことや、自分の努力した目標や、自分が切に希望したことをはっきり判らせてやりたいということであった——彼らの各々が、道義的な筋金と目的を労働界に与えるようにつとめるようになり、恐怖も、憎しみも、貪欲もない、そして戦争の亡霊と唯物主義の暴虐も全くな

い世界を築き上げるのに必要な、優れた指導性をアメリカにもたらして貰いたいと思つてゐることを、はっきり判らせてやりたいということであつた。

ジョン・ライフはアメリカ労働界の闘争史に奥深くまで織り込まれてゐる自分の生涯を思い返してみた。それはまるで恐怖と飢餓の時代から、人間の尊厳と経済的福祉がアメリカ労働者の正當な所有となつた時代への旅路を思い返して見るようなものであつた。彼は炭鉱夫や鉄鋼労働者が一時間十一セントの賃金を貰うために、汗を流してゐた時代のことを思い出した。彼の生きてゐるあいだに、思い出に残るような相当の賃金値上がたびたび行なわれ、いろいろ特別の給与が与えられたため、無数の労働者たちに生活の安定と、慰安と、余裕が生じたのであつた。彼はC I Oと自分のもと属してゐた懐しい統一鉄鋼労組が、無数の人たちを経済的に解放するこの闘いに、あれほど目覚しい役割を演じたことを誇りに思ふのであつた。

しかしそんなふうに向したにもかかわらず、各地にはなほだしい失望感が残つてゐるのである。彼は同僚たちの多くが、かつての彼がそうであつたように、今もなおこれすべてが改善されたわけではなく、これですべてを勝ち取つたわけではないという焦躁感に悩まされてゐることを痛感した。人びとはかつて自分たちの時間も、自分たちの金も、自分たちの生命さえもすべて投げ出し、労働者のためによりよい世界をもたらず闘いに、残酷な虐待にも耐え、投獄の苦

しみも忍んだ。そうした闘争の時代以来、自分たちの組合とその指導者たちにたいする人びとの献身的な誠実さは薄れてしまったではないか。組合と組合員にたいする指導者たちの輝かしい犠牲心も薄れてしまったではないか。

物質主義は他人に奉仕し、犠牲を払おうという人間の意思を破壊することをジョン・ライフは知った。多くの労働者たちは生活がらくになって来ると、自分たちは誰にたいしても、自分たちの組合にたいしてさえ、何らの恩義も受けていないというように感じている。精神的責任感の喪失は家庭生活内でも、組合にたいする不誠実な態度の中にも、国の中においても、あらゆるところに明瞭にあらわれている。闘争、犠牲、成功、沈滞——この四つのことばで言いあらわされた昔の譬え話は、残念ながらますます悲劇的な、ますます毒性の多い形で幾たびかくり返されているのである。これと同じ物質主義がすでに雇用者側、政治家側の生活の中にも全面的に浸潤している——これがアメリカの疾病である。

ジョン・ライフの経験は彼自身に「人はパンのみによって生きるものではない」ということを教えていた。精神的な熱情を——組合が誕生した時代、彼らを駆り立てて前進させたあの熱情を——再び労働者たちの心に燃え上らせてやらなければいけない。労働界がその熱情と、融和の精神と、力と、理想をとり戻す道は、フランク・ブックマンの「神に導かれた労働者は世界を導く

ことができる」という力強い哲学の中に見いだすことができることは、ジョン・ライフがすでに証明したところである。

繁栄するということはもちろん正しいことである。しかしそれはあくまで人に仕えるものであって、絶対にそれが主人となつてはいけないのである。物質的な収益というものは、かならず人間の心に不満を残すものである。心の満足というものは精神的自覚の結実したものである。情熱と犠牲と、労働者に当然な革命への献身がありさえしたら、新しい世界は今でも築くことができる。これが労働界への解答なのである。ここに労働者の運命がかかっているのである。

しかしこれからはほかの人たちがこの任務を押し進めて行かなければならないのである。

彼は自分の国のことを考え、世界衆知の人種問題のことを思うと、一日も早くこの解答が持ち出される日を熱望しないではいられなかった。

一月七日の朝、ジョンはあらゆる人種や階級をふくめた三百名の男女から成るMRA勢力が、その日、南部に向けて出発し、アトランタで「最高の経験」という、分裂、傲慢、いがみ合いにたいする力強い解答を描いている劇を上演することを聞いた。

CIOの南部労働組合組織運動の自分の自分の経験から、彼はその大胆な企てに参加する者たちに肉体的迫害がおきるかもしれないことを知っていた。しかし、一方解答が絶対に必要である

ということも知っていた。「私たちはその人たち一人一人の身の安全と、フランク・ブックマンのためにお祈りしなければならぬ」と彼はもはや囁き声よりは大きく出せなくなった声で言った。「大胆な企てだが、それが唯一の解答になるのだ——それ以外に方法はないのだ」このことばがこの勇敢な闘士の心から出た最後のほとばしりであり、最後の祈りであった。

その瞬間ジョン・ライフの生命の焔は消えはじめた。最後が近ずいたことは明らかである。

彼は生にたいして正直に顔を向けていたとおなじように、死にたいしても正直に顔を向けていた。そうすることによって死と深く結びついている神秘と恐怖を、ほかの人たちの心から取りのぞいてやりたいと思ったのである。床に臥しながら彼は囁いた。「私は父と母にまた会いに行くのだ。すばらしいにちがいない」彼の笑顔は輝いた。

どこか判らないところから、どんな力をふりしぼって来たのかしらないが、急に喜びにあふれた声を張り上げて彼は誰かと話をした。「キリストがいま迎えに来られた。ジョン・ライフをさがしていられるんでしょう？　ジョン・パーノン・ライフをさがしていられるんでしょう？　ここにいますよ。私をさがしていられるんでしょう？　ここにいますよ」

ローズと、バーバラと、ジョンナは彼の上に身を寄せた。しばらくするとジョンは幾度も、

幾度も同じことをくり返した。「神さま、私のほうまで降りて来て下さい。私もあなたのほうへ上って行きます」

ジョン・ライフは一九五八年一月七日火曜日午後一時、アーリントンで亡くなった。

第二十一章 世界の讃辞

ワシントンのニューヨーク街にある長老派教会には他とはっきり区別のつく、時を経て黒光りしている木の座席がある。これがアブラハム・リンカーンのお祈りした椅子である。ここでリンカーンはアメリカにたいする信念の泉の水を汲み取ったのである。

一九五八年一月十日のうららかに晴れた寒い朝、この教会でジョン・ライフの追悼式が催された。正面の席についた彼の家族のまわりに、彼の属していた統一鉄鋼労組とCIOの同僚たちが幾列にも並んだ。会長ディビッド・マクドナルドを先頭にして、全米鉄鋼統一労働者組合の執行委員会の委員全部が棺に付添った。

棺は説教壇をほとんど埋めんばかりに盛り上げて積まれた花束のあいだに安置された——かず知れぬ労働界の指導者たちの心からの愛と尊敬のしるしである。

式は追悼式以上に意味深いものであった。それは教会に集まった数百の人たちの心からあふ

れ出たものの積み重なりであった。大勢の人たちが感動を与えながら讃辞を述べているあいだ、まるでジョン・ライフ自身が挑戦と高貴な献身のことばを語っているような思いがするのであった。彼自身があらかじめ予定していたとおりに式は運ばれた。この式を通して彼はほかの大勢の人たち、特に組合の友人たちに、自分がいま手を引いてしまった仕事をつづける勇気を奮い起してもらいたいと望んでいたのであった。

当然のことながら、アメリカの労働界は彼の功績に感謝する量においても第一であった。AFL・CIOの会長と財務部長であるジョージ・ミーニーとウィリアム・シュニツラーは個人的なメッセージを送り、ミーニー氏の助力者R・J・トマスがそれを読んだ——「ジョン・ライフは献身的努力と理解とをもって労働組合主義に奉仕した。彼は真の人道主義者である」

ジョン・ライフといっしょにCIOのために尽した会長であり、現在合同連合の産業組合局長であるウォルター・ルーサーはライフ未亡人に打電した——「あなたの夫君の不撓不屈な私心のない努力のお陰で、幾千万のアメリカの労働者たちは、現在人間としての尊厳と誇りとを大いに自覚しています」

鉄鋼労組会長ディビッド・マクドナルド、統一炭鉱労組会長ジョン・ルイス、その他大勢の全国組合の会長らも意を尽した弔辞を送って来た。運輸労組の会長マイケル・クイルからのメッセ

ージはつぎのとおりであった——「あなたの夫君の組織労働界の進歩にたいする献身は永久に労働者たちのために犠牲的に献身する人たちの亀鑑として残ることでしょう……あなたの夫君の率直、賢明な忠言と、顕著な指導力と、ゆるぎない高潔さと、主義にたいする忠実さはいつまでも記憶されるでしょう」

フランク・ブクマンの名代として式に参列したことをウイリアム・グローガンは光榮に感じた。またジョン・ライフ並びに彼の家族を知ったことも彼の光榮とするところであった。それゆえ彼が列席のジョン・ライフの同僚に向って話をすることは待望の好機であった。そのときのことばは今でも感銘深いものがある。

「何というすばらしい人だったでしょう。これほどの心の平和を保ち、これほどの勇氣を持ち、人びとに応待する方法を心得ていたということは、何という大きな恵みを神から与えられていたのでしょうか。しかしながらジョンが何よりも親しく人びとに愛されていたということは、人々が彼をすばらしい人間と考えることではなく、彼を偉大な罪人として考えていた点にあるのです。彼は自分のことを話すとき、いつも罪人として話しました。いつも必ず人にはそういうふう話すのです。晩年は最後を飾るような経験の中に生きていたジョンが、かつては大きな罪人であったことを知ることは、すばらしいことではないでしょうか。そういうところにこそ私たちの希望が

——私のような人間の希望が——人間性にたいする希望がかけられるのだと思います。

ジョン・ライフはフランク・ブックマンに会ったのち、労働組合指導者として、自分の仕事に新しい力を見いだしたのです。彼はブックマンから謝罪というものの持つ恐るべき力を学びました。全然自分のことは考えないということから生まれて来る彼の謙譲さには、誰一人立ち向うことはできませんでした。そして彼は自分を局部的な立場に埋めるということをしませんでした。

彼は利己的に自分のために、利己的に組合のために、利己的に国のために生きていたのではありません。ジョン・ライフは全世界のために生きたのです。彼は神と世界に奉仕しました。しかもそうしているあいだにも彼は自分の家庭のため、自分の組合のために、自分の国のために最もよく奉仕しました。彼は人間というものが、よりよい賃金、時間、労働条件などより以上のものを必要としていることを知っていました。彼らは心のための何ものかを必要としていたのです。」

次には、式のためにシカゴから飛行機でとんで来た、白髪の、背の高い、ハースト会社の副会長メリル・メイグズが正面の席に立った。ジョン・ライフのことを語るその一語一語にメリル・メイグズの心がにじみ出ていた。彼はバーム・ビーチのブレイカーズ・ホテルで、ジョンが自分たち資本家の友人たちに衝撃を与えたときの思い出を語った。「ジョンはその人たちに向って、これこれの情勢を解決するためにどれほどの金が準備されているかということではなしに、何が

正しいかということに関心を持つべきことを教えました。

私は彼を尊敬し、彼を愛すようになりました。彼が、正しいものの根拠の上に立って解決点に到達しなかったことは一度もありません。神の指導のもとに立っているジョンの公平無私、勇氣、影響力はサミュエル・ゴンバーズ以来、どんな人間よりも労使関係の安定のために大きな仕事を成し遂げました。私は自分の最も愛する、最も尊敬する親友を失なったのです。そして彼は結びのことばをつけ加えた。「ジョン、君の冥福を祈る。あの世で出会う『資本家』たちの面倒も頼むよ」

メイグズのつぎにチャールズ・ヘインズが立った。彼がフィラデルフィアで偶然フィリップ・マレーとディビッド・マクドナルドに出会ったことが端緒となってここまで来たというわけである。つぎにルイス・ピュイックが立った。彼はかつてジュネーブの国際労働会議でガテマラの労働代表をつとめた男である。ピュイックは言う。「ラテン・アメリカの労働組合の一員として、われわれ及び仲間の数千人はジョン・ライフから学んだことにたいし甚大な感謝を捧げる次第であります。ジュネーブのILOにガテマラの労働者代表として出席したさい、私はジョン・ライフの生き方の価値を知りました。彼は単なる労働指導者ではなく、世界的な為世家であります。彼自身の中から、あらゆる革命の中の最も偉大な革命が生まれたのであります。彼がいつも人に

伝えたことの中に世界を救う真理があるのです。世界労働史上には多くの偉大な人物がりましたが、ジョン・ライフもその一人であります。これからジョンは歴史の中にはいつて行きますのみならず、これから全世界を通じて労働界に新しい時代が始まるのです」

当時 ICFU のラテン・アメリカ支部の総局事務長であったルイス・アルベルト・モンジは弔電を寄せた——「汎米労働者連盟 (O R I T) はわれわれの偉大な同僚ジョン・ライフの逝去を悼む」

説教壇にはジョンの家庭牧師であったアーリントンのリトル・フォールズ教会のフランク・アーウィン牧師が立った。心の底から誠実な謙遜な態度で、彼は自分がこの労働指導者を訪ね、その病室で助力を与えようと思ったが、逆に病人から助力を与えられ、信念の復活を見だし、再奉仕の覚悟を決めたことをまたくり返して語っていた。「ジョン・ライフはたえず、特に統一鉄鋼労組の執行委員会にいる自分の愛する仲間のことを考えながら、自分自身でこの葬式の計画を立てていたのであります」

最後に立って話したのは、からだつきから容貌まで驚くほど父親そっくりの息子エステイズであった。エステイズは深い感慨をこめて、父の誠実さと闘争心にたいし心の底から感謝している

ことを語った。

偉大なニグロの教育家ブッカー・ワシントンの娘ポーシャ・ビットマン夫人は教会を出るとき「こんなすばらしい式に参列したのははじめてです」と言った。

上院外交委員会前議長、上院議員アレキサンダー・ワイリイは述懐していた。「私たちはこれから将来も、こんなすばらしい式に参列して話を聞くことはないだろうと思う。われわれの委員会の多くは仲違いや勢力争いで分裂している。これは騒ぎ立てるすべての人や、権力を求め、いがみ合いをこととしている人たちにたいする唯一の解答である」

上院、下院の指導的な人たちもジョン・ライフの逝去に注目した。ニュージャージー出身の共和党上院議員H・アレキサンダー・スミスは上院の演説の中で労働指導者としてのジョン・ライフを「非の打ちどころのない高潔な人物」と評し、「彼はMRA運動に一身を捧げ、家庭内、及びわれわれの公けの関係に於て最高の道義標準にもとづく人間関係を強調することに一身を捧げた」と言った。

下院の壇上ではカリフォルニア出身の民主党議員ジョージ・ミラーはライフを評して「無数の労働者の友たちであると同時に、この下院の多くの議員たちにとっても偉大なよき友」であったと言ひ、彼の「影響力と奉仕の範囲は彼自身の家族や直接の交友から、国家と世界にまで及ん

だ」と言っている。

ワシントンだけではなしに、アメリカの方々の都市や海外からも、この日、大勢の人々が心から真情を吐露した。相離れた国々にもこの人を惜しむ気持で一致していた。彼の家族には東洋からも西欧からもぞくぞくメッセージが伝えられて来た。いずれも——ジョンが開拓した任務を受けつぐことを誓ったメッセージである。メッセージはインド大衆の指導者たちからも、アフリカの新しい国々への指導者たちからも届いた。スエーデンの北極圏の鉄鉱労働者たちからも、ドイツの炭鉱夫たちからも、イギリスの鉄鋼労働者、港湾労働者たちからも、スイス、イタリアの産業労働者たちからも、フランス、アイルランドの繊維労働者たちからも、韓国、フィリピンの労働組合指導者たちからも、カナダ労働同盟事務長からも届いた。

特別追悼式はデトロイト、ニューヨーク、ロサンゼルス、アトランタ、及びカナダの各都市、イギリス、スイス、南阿、濠州、及び日本でとり行なわれた。

イギリスのロンドンでは各界層の人びとが追悼式に集まった。最初に弔辞を捧げたのはクライドサイドから出て来たジョンの旧友ダンカン・コーコランであった。「われわれは偉大なるアメリカ人であり、世界労働界の大立物であり、偉大なるイデオロギーの闘士を追悼するため集まったのです」と彼は演説した。

コーコランは次いでジェームズ・ハワースに一言頼んだ。彼はイギリス労働党の全国執行委員会の委員と、イギリス運輸有給職員組合の会長をつとめているあいだに、ワシントンでジョン・ライフと会ったことのある人である。ハワースは語った。「ジョン・ライフは労働界で今まで知られている人の中で最も偉大な人物であります。AFLとCIOの合同ということはこの二、三十年間に起った事件の中で最も重大なものの一つであります。これが達成された一つの要因は、組織の中の自分の地位より合同の成功を第一に置いた人間がそこに一人いたためでありました。無私無欲——これこそジョン・ライフを要約したことばです」と彼はことばを結んだ。

ほかの労働界の人たちもそれぞれ讃辞をつけ加えた。ロンドン労働評議会の財務部長スイリル・ブランドは言う。「イギリスの労働運動界はジョン・ライフの生涯を高く評価している。われわれヨーロッパの人間は彼のような生き方をするアメリカの労働組合指導者の友情を必要としている」アイルランド労働指導界の長老であり、国會議員であるロバート・ゲットウッドは所信を明らかにした。「ジョン・ライフは、あらゆる国のすべての人のための新しい世界について、フランク・ブックマンが与えてくれたあのイデオロギーの概念を、身を犠牲にして文字どおり生きぬいた人である」

日本の労働界の指導者たちも東京に集まった。全国電気通信労働組合の山村委員長は語った

「ジョン・ライフのお嬢さんの言葉から、私はその父がどんな人間であるかを知りました。労働組合の仕事の中でMRAを生き抜くことは、さぞむづかしいことだろうと私はよく考えたことがありましたが、ジョン・ライフによって私は、労働組合の中にこそ、それを生き抜かなければならないことを自覚するようになりました」全日本造船労働組合委員長柳沢錬造氏は語った。「今日の午後私はアメリカ労働界の巨星が地に落ちたことを実感しました。しかし考えてみると、そうでないことが判りました。巨星はまだ地に落ちてはいないのです。彼はアメリカ及び世界の労働界に多大な貢献を残した人であり、彼の光は今もなお輝いているのです。私は彼が着手し始めた闘いをつづけて行くのが私たちの使命だと感じています」

このような、恐らくアメリカ労働界のほかのどんな指導者の伝記にも比較するもののないような世界的な讃辞も、その理由は実に簡単である。彼の生き方がすべての人間の心の最も深いところにある念願と、共通の根柢の上に立っているからである。彼は階級を超越し、皮膚の色を超越し、人種、国籍、信仰を超越し、規定しようという法律、条約の力を超越し、企画しようとする政治家の知恵を超越し、破壊しようとする憎悪を超越して、人間同志を結束させている領域において如何に生きるべきかを発見したのであった。人びとはジョン・ライフから共産主義、あるいは反共産主義の持っていない労働者にたいする理想を把握したのである。

イタリアから化学労働者組合の指導者エジディオ・クワリアは書簡を送って来た。「私のところへ届いた逝去の報は、私、ならびに私の妻、私の親戚、友人たちの心を深く打ちました。

彼の思い出は私たちの記憶に赤々と輝いています。十八才の若者のころ彼はすでに鉱山夫の苦しい生活を知り、労働組合なるものの必要性を学び、その仕事に自分を投じたのです。後、その偉大な人柄のおかげで、彼はCIOの最高の責任ある地位に迎えられました。遂に彼の視野は絶体的道義標準のための闊いという高い視野となり、彼はアメリカの労働組合の統合、及び全世界の民主的な労働組合援助のためにたゆまず闘って来ました。そして遂に最後には彼は長期の病気の試練の中で精神的な犠牲を明らかに示し、そのおかげで天帝の膝もとへ呼び返されるにふさわしい人間となったのです。

カトリック信者の一人として、私はつねにMRAによって人生にたいする訓練をされてきました。それが私の仕事の場合の助けとなり、私の信念を強めてくれました。ジョン・ライフの実例が私たちすべてに、道義的な闊いを開こうという情熱をかきたててくれました」

インドの労働組合の十三名の指導者たちはつぎのようなメッセージを送って来た。「ジョン・ライフは労働運動に新たな方向を与えてくれた。行詰った唯物的な哲学を棄て、精神的変革の確乎たる道を指し示してくれた。彼が先駆者となって示した新しいタイプの人間は、彼の念願し

ていた新しい社会を築き上げるだろう。そして私たちはその仕事に自分たちの身を捧げる覚悟である」

前に共産主義者であったルールの八名の炭鉱労働指導者たちは、ジョン・ライフの生涯の挑戦は自分たちの考え方に一つの転機となったと打電して来た。

三百万の組合員を擁している全日本労働組合総評議会の事務局長岩井章氏と、百万の組合員を擁している全日本労働組合議の議長滝田実氏からのメッセージは簡潔で、意味深く決定的なものであった——「彼を通してわれわれは新しいアメリカを見た」

この追悼式の進行につれてあらわれたものは悲哀、感謝、或いは讃辞を越えたものがあった。ジョン・ライフは去ってしまった。しかしそのときでさえ、彼は人びとに改変することを呼びかけていた。そのワシントンの教会に集まったすべての人の心の中の最善のもの——世界の国々から讃辞を寄せたすべての人の心の中にある最善のもの——それらがおのおのの表現されて一つの偉大な念願となったのである——自由人の世界、平和の世界、神の望みにかたどられた世界を築き上げようという念願である。

その日はジョン・ライフのおかげで人びとは自分自分の生活を新たな正直な、現実的な見方で

眺めたのであった。家庭生活、労働の真の奉仕、国家と世界の必要——そういったものがすべて驚くほどはっきりして来たのである。ジョン・ライフ自身が行なったと同じ決意を固めるためにはっきりして来たのである。

彼の仕事はこうしてつづけられた。彼の精神は今もなお、自分の仕事を他の人たちの生活の中に、そしてその生活を通して完成を求めながら生きている。

フランク・ブックマンの簡単で、しかも雄弁なことばは実に適切なことばであった。

「すべての人間が平等になる時代。それは神の賜物である。ジョンはそれを実生活に生きた」

第二十二章 後につづく者は誰か

死は人間ジョン・ライフを肉体的な疾病の束縛から解放してくれた。死はジョン・ライフのもっていた真理には終止符を打ち得なかった。彼の真理はあくまでこの世に残っている——今の時代にとって欠くことの出来ない適切な真理である。

ジョン・ライフは決意することによって、真理を身をもって生き、信仰を持った。彼の生涯を正しく読むすべての人にとって、二つの事は明瞭である。

第一は自分に最も近い人たち——自分の妻と家族、CIO内の自分の同僚たち——に思いやりを持つという彼の決意である。この決意は彼はほとんど破壊してしまった人との関係を元に戻し、築き上げ、大切にするためにしなければならぬあらゆることをして行こうという道義的決意であった。自分のやらなければならない事を知ることが、彼にとっては困難ではなかった。大ていの男とおなじように彼は、すでに知っていたのである——しかし彼は決意することを躊躇し

ていたのである。長いあいだ彼は自分自身に正直に直面することを拒んで来た。そのため彼は大きな不幸に巻きこまれた。しかし、それまでより大きな視野を発見して、彼は今までと違った生き方をしようと勇敢な決意を行なった。

第二の発見は自分から最も遠い人たち——世界中の無数の人たち——に思いやりを持つという決意をしたときに判った。アメリカの労働界に尽すということは確かに一つの偉大な目標である。ジョン・ライフはほかの沢山の事柄と同様に、その目標は大半達成した。しかし彼はそれより更に偉大な目的を見はじめたのである。彼はフィリップ・マレーが感じたように、アメリカの労働界が一つの特別な責任を持っていることを感じた。彼は全世界の労働者はアメリカからの謙虚な道義的指導に応じるだろうということを知った。彼と妻が見いだした基本的な人間としての経験は、単に自分自身だけのために、自分の家庭だけのために、アメリカの労働界だけのために善であり、正しいわけではないことを彼は発見した。それは世界的な解答につながるものだったのである。

それがジョン・ライフの持った新しい視野だった。そして彼はそれにしたがって生きようと決心した。

この視野を通して彼は世界の本当の争いを明確に知った——そして彼を通して多数の人たちも

知ることができたのである。彼は人々に新しい次元に入る道を示したのである——しかも今直ちに入る道。

今なおジョン・ライフの死は彼を知っていたあらゆる人たちの心を動かしている。苦しいし、センチメンタルな、味気ない、つらい感情にまけてしまうこともできるが、その反対に心を癒し、心を清め、充実したそして実際的なものにもなり得るのだ。その決定はジョン・ライフの記憶を心の中に抱いている私たちすべての意思の中にあるわけである。

一九五八年七月の或る静かな夏の朝、小人数の一人の人たちがアーリントンのコロンビア公園墓地の中にあるジョン・ライフの墓のかたわらに立っていた。ローズ・ライフとその母親といっしょに居るのは、中共本土の端にある自由都市香港の労働組合協議会の事務局長ファン・ホイ・チューであった。ファン氏は中国式に墓の上に向い白い花を供えた。一行は沈黙のうちに立っていた。突然ファン・ホイ・チューは大きな声でお祈りをはじめた。彼はそれまでお祈りしたことは一度もなかったのである。彼は言った。「私はいま神の霊と、フランク・ブックマンの霊と、ジョン・ライフの霊に導かれてご挨拶に参ったのです。あの人の肉体はここに葬られてはいますが、あの人の精神は私たちすべての者をとり巻いています。」

私はジョン・ライフの精神を私の妻のところへ、同志である労働者たちのところへ、私の組合へ持ち帰ります。私はこの人の精神とこの人の声を永久に心の中に抱いて行きます。私はこの人の挑戦を受けて立ち上ります」

付
録

在職中の讃辞

ステートメントおよび新聞記事

追悼の言葉

在職中の讃辞

AFL・CIOよりよせられた言葉

一九五五年十二月、第一回AFL・CIO合同大会で金と白とでふちどられた楯がジョン・ライフに贈られた。

ジョン・ライフ氏に贈る

ジョン・ライフとともに働いた経験を有するわれわれは、みな彼の厚い友情と指導性に浴することが多い。同胞愛の精神を惜しみなく与え、勇気をもって組織に当たったこの偉大な労働運動指導者の徳を永久に讃える。自由と安定した生活を最終目標とする組合運動を推進するに当って氏の忠告と手本とはつねにわれわれを勇気づけて来た。労働運動に捧げた氏の献身と謙虚さを今後も活動の手本として、折にふれ指導を仰ぐことであろう。

ここにAFL・CIOはジョン・ライフのおかげで前よりは一層よい生活を知った数え切れない人びとを代表して、讃辞を呈し、記念に楯を贈るものである。

ニューヨーク

AFL・CIO大会

一九五五年十二月七日

交通労組より

次のメッセージは一九五七年十月二十二日に、ニューヨークで開かれていた全米交通労組の第十回大会から、マキノ島のMRA大会に出席中のジョン・ライフにあてて電送されたものである。

AFL・CIO所属の全米交通労組はCIO専任副会長ジョン・ライフ氏に同志からの御挨拶を送る。炭鉱夫組役員として、鉄鋼労組役員として、さらにCIO南部地区委員長として氏が発揮した手腕と功績を讃える。

三万人の会員を有する鉄道労組を私たちの組織に参加せしめた氏の役割も大きい。

AFL・CIO合同に至るまでの氏のためまぬ努力に全労働界は永久に感謝するであろう。

国際部長 マイケル・クイル

国際部次長 ウィリアム・グローガン

アメリカ労働宣言

一九四七年、労働休日にマキノ島の全北米

M R A 大会から発表されたもの

- 一、世界の富と仕事を搾取されることなく、凡ての人に与えること。
- 一、無私 of 経済原理を通じてすべての人が富を享受する時代を招来すること。
- 一、質、量ともに優秀な仕事をする事。
- 一、労働者が神に導かれるとき、世界を再造することができると信ずる開拓精神と情熱を見出すこと。
- 一、自己の非を反省し、心を変えることによってチームワークの力をうみだすこと。
- 一、新しい世界を打たてるといふ情熱を産業界の動機とすること。
- 一、凡ての決定を誰が正しいかでなく、何が正しいかで決めること。
- 一、真のデモクラシーが解るようなチームワークをつくり出すこと。

バックマスター

全米ゴム労組委員長CIO副会長

ウィリアム・ドハティ

郵便配達人組合委員長AFL副会長

H・W・フレージャー

鉄道車掌組合委員長

チャールス・ミラード

全米鉄鋼労組カナダ支部長

エリック・ピーターソン

国際機械工連盟財務兼書記

アーネスト・ピュー

CIOバージニア州地区委員長

ジョン・ライフ

全米鉄鋼労組国際部長

エルロイ・ロブソン

カナダ鉄道従業員組合副委員長、カナダ労働評議会次長

アーチャー・ヴァーチュー

ミシガン州鉛管工労組委員長

ラッセル・ワイト

CIO自動車産業労組所屬、オーズモビル・六五二支部長

ステートメントおよび新聞記事

フロリダ州、マイアミ市のレーバート・シチズン紙の社説

一九五八年一月十六日

ジョン・ライフの一生は家族と同胞に対する奉仕の精神で貫ぬかれていた。彼は生涯を通じてアメリカばかりでなく、全世界の人びとの生活を引きあげる努力を惜しまぬ人として知られている。

後年における彼の闘いは、道義的価値を人びとに与え、また組合運動の本質的なものに向ってなされたが、その影響を心に感じた人々は非常に多い。私はライフ氏を個人的に知る機会に恵まれなかったが、彼を深く惜しまずにはいられない。

直接関接に彼の人格にふれた者は、私もその一人であるが、生涯忘れることのできない偉大な遺産を与えられた。

労働運動は強力な闘士を失った。しかし晩年彼が与えた影響は今後も長く続くであろう。

彼は単に労働界ばかりでなく、国家的にも国際的にも考え方と生活態度が完全に変わることに必要を確信していたが、それは産業界の人びとに非常な挑戦を与えていた。

ライフ氏が他界したことをきいて、多くの頑固な産業人がくやみをよせたが、その人たちは産業平和を確立するために絶え間なく努力した彼の無私に徹した姿に打たれていたのである。

確かに彼は尊いものを残してくれた。彼の偉大な精神はわれわれの思い出に生きつづけるであらう。詩人の言うように、

たまゆらの宿るやかたは朽ちれども

永久にいのちはつづき行かなむ

連鎖反応をおこす

ジョン・ライフ

インド・マドラス市　ザ・ヒンツウ紙

一九五三年三月十二日

ジョン・ライフ氏は六百万の会員を持つCIOのフィリップ・マレー会長の下で長年働いてきた。

ジョン・ライフと妻のローズはアメリカの労働者の賃金と生活改善のため、幾度もストの第一線で闘ってきている。

十四才の時、炭鉱労働者となって以来私の心には憎しみが芽生えた。神に服従していたのは、経営者に負けてしまおうと思った私は真向から経営者に反抗する決心をしてきた。しかし、私は、自分たちの欲することのために闘うことよりも、何が正しいかで闘うことの必要さが解った。私は自分の心の憎しみに解答を見出した。私は現在CIO南部諸州組織部長として、九つ

の州の鉄鋼、自動車、繊維、油業、ゴム、木材等の労働者四十五万人を対象として働いている。

私はMRAにであった当初、CIO所属のフィリップ・マレーを会長とする鉄鋼労組の西部諸州支部長をしていた。私は妻とともにカリフォルニアの山間の町で開かれたMRA大会に出席し、そこでフランク・ブックマンに会い、とも角MRAの四つの標準を生活に受け入れることにした。これは確かに革命的なことだった。当時私の属する組合はある鋼鉄会社を相手に二カ月ストをやっていた。そこで私は社長に会いに行き、思いきってあやまった上、正直に話をした。「今まで私たちの方にもあやまちが無かったとは言えません。いっしょに何が正しいかを改めて検討したいと思えますが」と私がいうと、社長はこの新しい考えに興味を持ち、結局私たちが思っていたよりずっとゆづってくれた。僅か二日で完全な話し合いが成り立ち、全員復職することができた。

その直後私は次のような発表をした。「MRAの標準を行い実際にあてはめたおかげで組合のためにも、また労使関係のためにも私は過去三年間なし得た以上のことを三カ月間に達成できた。この精神を生かせば、労使が助けあって大衆の必要とするものをつくり出すことができる。

私は心の革命的変化を経験したが、これは労働指導者としてではなく、一個の人間として体

験したものであるから、同じような心の革命が経営者側にも起り得るのである。どちら側から始めてもいいのだ。上から下に行くことも、下から上に行くこともある。とも角自分から始めることが先決だ。

私はこの目でMRAが世界的解答をもった世界的勢力として育ってきたのを見ている。それは、一、健全な労働運動になくてならない基本的なものであり、二、原子力時代が蒸気時代とは比べものにならないほど進んでいると同様、資本主義やマルキシズムよりはるかに勝れた革命的労使のチーム・ワークを生ずるものであり、三、相対立している国々との間に真の平和な関係をつくり出すイデオロギーを持っているものであると私は見ている。

本来私は労組出身者であるから、第一の点についても少し言及したい。労働運動にたずさわった者は誰でも知っているように激しい闘争によって得たものを組合内の不和で失うことが多い。元来不和というものは、相手を批難する結果である。私が間ちがいの責任を全面的にとる気持になるとき、融和が生れる。こんなことがあった。ある時、一人の組合支部長が野心的で組合のことより自分本位に活動していると思ったことがあった。私は態度にありありと彼を嫌っていることを表わし、心の中ではあんな奴はだめだときめこんでいた。そのとき、ハッと私は自分の態度が間ちがっていたことに気がついた。そうした態度は彼のためにも組合のために

も何ら益するところがなかったわけである。益するところが無いばかりか、事態をさらに悪くしていたのだ。私は彼に直接自分の間ちがった態度を謝罪し、彼を助ける意味で一しよに働きたいと言った。今までは不和の原因となっていた私たちの間に融和が生れ、しかも連鎖反応的に組合にひろがって行った。

私は自分がMRAの四標準を生活するとき、必ず他の人に影響を与えることを経験している。実際全国組合の指導的立場の人びとにまでその影響は及んでいる。健全で強力な組合をつくるには、その指導者が健全な道義標準を生きることが絶対に必要なことである。指導者がわるくては到底立派な組合をつくることは覺つかない。ウイスキーを飲んだり、徹夜でポーカー遊びをやることは健全な組合も、強力な組合をもつくることに一向に役立たないことを私は経験で知っている。幸福な家庭に至っては論外である。

フィリップ・マレー氏が亡くなる直前、彼を事務所を訪ねたときに彼の言った言葉を私は忘れることができない。「ジョン、つくづく思うことだが、家庭が融和ユニオンしていなくては、職場で健全な組合ユニオンをつくらうたって無理だよ」

世界に宣言する

一九五八年ブックマン博士の八十才の誕生を記念して十五カ国の労働指導者たちが、世界に向って発表した宣言文。

十五カ国の労働者を代表する私たちは、過去二十年間にわたって貴下が労働運動に与えて下さった新しい革命的な迫力ある指導性に感謝する。

二十年前にM R Aがはじめて提唱された時、私たちの多くのものは、それも「善い考え」だ位に思っていた。しかし、今日では産業界ばかりでなく、国内的にも国際的にも多くの驚嘆すべき実績をあげた世界勢力となっている。これは東と西を融和し、共産主義者と資本主義者を融和し、世界に解答を与える唯一のイデオロギーである。

貧困と不正のない社会を生む経済制度の確立を望んでいる私たちの確信はあなたによって強められ、新しい型の人間ができれば、空腹には食物を、空の手には職を、虚ろな心には満足を与える思想で満すことのできる新しい社会が生れ得るといふ希望が与えられた。

全造船労働組合委員長

全電通労働組合委員長

国会議員

フランス全繊維労働書記長、フランス連邦前副会長

アフリカ社会主義運動スーダン支部書記長

ナイジェリア港湾労働組合書記長

西バキスタン労働連合会長

インド労働組合会議執行委員、国会議員

ノルウェー、オストフォルド組合会議書記長

イタリア化学労働書記長

スイス鉄道労働書記長

フィンランド労働プレス・サービス紙

デンマーク前農林大臣

デンマーク、ホルセンス・ソシャル・デモクラット紙編集長

スエーデン金属労働組合

柳 沢 鍊 造

山 村 貞 雄

加 藤 勘 十

モーリス・メルシエ

ヤ・ドウンビヤ

エグウンウォク

カーン・バクチア

ゴピナス・シン

ハンス・ビヤコルト

エチディオ・クォグリア

オット・カデグ

カーレ・ハウタマキ

エンツ・スモラム

ソファス・ラスムッセン

ジグフリド・ウィクストロム

ブラジル社会党

ニュージールランド木材労組委員長

イギリス交通労組前委員長、労働党執行委員

カルロス・アンセルモ

ジェームス・フリーマン

ジェームス・ヘワース

追悼の言葉

ジョン・ライフが一九五八年一月七日に死去したとき、世界各国から弔辞が送られた。

アメリカ

生涯を組合運動のために献身したジョン・ライフは真のヒューマニストであり、偉大な人であった。

AFL・CIO会長

ジョージ・ミーニー

財務兼書記長

ウィリアム・シュニツラー

アメリカ労働運動のために一生を捧げたジョン・ライフの無私でたゆまぬ努力のおかげで数えきれないほど多くの人が人間性の尊厳と高貴さとを学び得たのである。

AFL・CIO所属産業部会長

ウォルター・ルーサー

同財務兼書記長

ジェームス・カレー

同執行委員

アル・ワイトハウス

全米鉄鋼労組中央執行委員、各支部長、役員全部は同志の死去に際し哀悼の意を表す。

AFL・CIO副会長、全米鉄鋼労組委員長　デイビッド・マクドナルド

神の使徒の死は崇められる。

ジョンの魂は今も生きている。私はやがて相見える日を固く信じている。夢に見るジョンの額にまさまざと「彼地で相見えん」と書かれている。

凡ての人が平等である新しい時代に私たちは入ろうとしている。それは神の賜である。ジョンはそれを生きた人である。

フランク・ブックマン

南アメリカ

同志の死を心より悼む。

ICFTU南米支部書記長　ルイ・アルバータ・モンテ

韓 国

アメリカ労働運指導者ジョン・ライフの死を悼み、高潔な生活を手本とすることを誓う。

韓国民議院議員外務委員長 尹 璫 璋

日 本

私たちは彼によって新しいアメリカを見た。

総評事務局長 岩井 章

全労会議議長 滝田 実

全電通労組委員長 山村 貞雄

全造船労組委員長 柳沢 鍊造

映画労連委員長 福田 武

海員組合国際部長 西巻 敏男

参議院議員 鈴木 強

衆議院議員 加藤 勘十

参議院議員 加藤 シツエ

インド

私たちインド労働組合と社会党の者は道義の頹廃と分裂が人類の生存を脅かしている現代に、道義標準を掲げ国際融和のために働いたジョン・ライフに感謝している。

彼は労働運動の方向に行詰りをもたらす物質的思想から、道義革命の方向に転換する道を教えてくれた。彼が自ら示した新しい型の人こそ私たちが渴望する新しい社会をつくり出すことを信じ、そのために誓いを新たにするものである。

インド社会主義労組同盟書記長

ラジャラム・シヤストリ

同 西ベンガル地方委員長

シブナス・バナジー

インド労組会議執行委員、国会議員

ゴピナス・シン

インド港湾労組副委員長

ナラシンガ・ラオ

南部鉄道労組委員長

アナンドハン

ボンベイ市労組委員長

フェルナンデス

銀行従業員労組書記長

ブグワディア

フィリピン

フィリピン交通労組は偉大なる労働指導者ジョン・ライフの死を心から悼む。

フィリピン交通労組委員長

ロバート・オカ

フランス

アメリカのみならず全世界の労働者のための献身的闘いとフランスに対する貢献に感謝する。

フランス全繊維労組書記長

モーリス・メルシエ

マルセイユ海員組合

ヴィクトル・ロール

フランス社会主義婦人部長

ロール夫人

オランダ

労働界、産業界における新しい指導精神を開拓したジョン・ライフの勇気と信念を尊敬する

オランダ全労同盟会長 (一九二八一—一九四八)

エバート・クーパース

オランダ交通労組港湾部長 (一九五七)

ヤブ・ヤンセン

オーストラリア

ジョン・ライフの示した勇氣とその信仰は永く労働者の希望となるであらう。

ヴィクトリア州ゴム労組委員長

ヴァーチガン

港灣労組ヴィクトリア支部

ベグ

ナイジェリア

世界の国々にの融和というジョン・ライフの大理想のため私たちは闘うことを誓う。

鉄道技術労連、書記長

ルイス・アゴンジ

港灣労組書記長

オヌマラ・エグワンウォーク



著者紹介

アイルランドのダブリン市に生れ、若くしてアメリカに移住。ニューヨーク市の交通労働組合組織の初期における闘いに参加、以来労働運動に挺身二十二年間交通労組の専従役員であり、一九四五年以来は同労組国際部門担当の副会長。

最近特にアジア、アフリカ、ヨーロッパ及びカリブ海地方を旅行する機会を得て、各地の労働指導者と交友を深めている。

ジョン・ライフとその家族と特に親交のあつかつた彼が、持ち前のアイルランドの軽快なセンスで書きつづるライフの冒険にみちた、一生は世界を舞台にして、くりひろげられ読者を魅了せずにおかない。

ジョン・ライフ

¥ 280. 千 34.

昭和35年3月15日 初版発行

著者 ウィリアム・グローガン

訳者 相馬雪香

発行所 東京都千代田区
九段4の11

労働法學研究所

電話東京(331)4687・(301)2745

振替東京58631

印刷・教文堂 印刷人 土屋武雄

これはアメリカの一労働者の生涯の記録である。ジョン・ライフはケンタッキーの山の中で極端に貧しい家庭の五男に生れた。家計を助けるために14才で学校を中退して炭鉱に入った。

危険にさらされた炭鉱夫のみじめな生活は、彼の心に社会正義に対する火のような情熱と憎しみをかりたてた。組合運動の中で彼の心はきたえられ、次第に国のあり方に対して、世界のあり方に対して大きな構想と情熱がはぐくまれていく。

彼の一生は迫害と抗争、愛と憎しみにつづられる人間味にあふれた物語りである。

米国労働者の生活については案外知られていないが、本書はライフの人間記録を通して、アメリカという国の実態についても教えられる所が多い。

発行所
労働法学研究所

¥ 280.

